鹿児島県史料

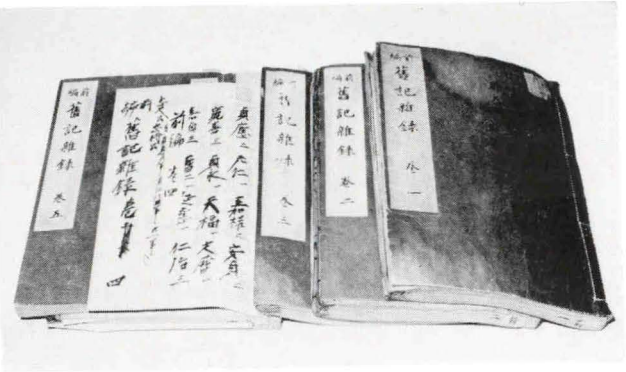
旧記雑録前編

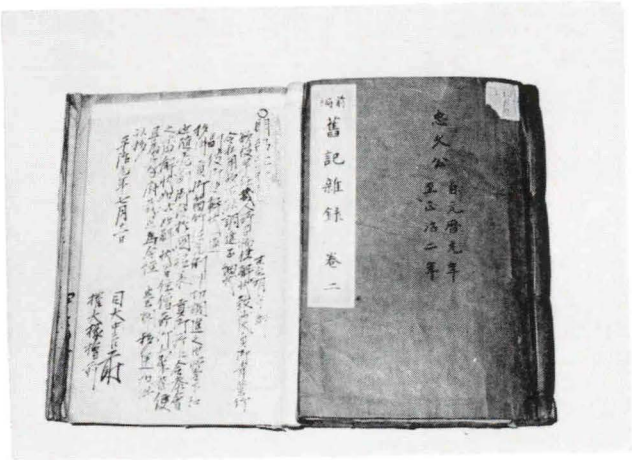
一

題字

鹿児島県知事

鎌田要人


舊記雜錄 卷一
舊記雜錄 卷二
舊記雜錄 卷五


舊記雜錄 卷二

序

このたび、鹿児島県史料「旧記雑録前編」（全二巻）を刊行することになりました。これまで、「旧記雑録追録」（全八巻）を刊行してまいりましたところ、好評のうちに完結いたしましたので、ひきつづいて、前編を刊行するものであります。

旧記雑録は、膨大な薩摩藩史料の中から、伊地知季安・季通父子の努力によって、筆写収集され、編年された一大史料集であります。つまり鹿児島県の歴史に関する基本史料を集めた、鹿児島県編年史料とも言えるものであります。

旧記雑録は、これまでにも、「鹿児島県史」をはじめ、本県の地方史研究に多く利用されてきましたが、地方史の研究だけに限らず、広くわが国の歴史の研究にも欠くことのできない史料集であります。いまここに、本書が刊行されることによって、多くの人々に利用され、研究がより一層進められるのであれば、わたくしの幸甚とするところであります。

本県では、「旧記雑録」のほかに、「忠義公史料」と「西南戦争」の史料を継続刊行しております。あわせてご活用されるようお願い申し上げます。

このたびの刊行にあたり、出版を許諾された東京大学史料編纂所、また終始ご指導をいただきました顧問・委員の先生方、その他ご協力いただきました方々に、深く感謝の意を表します。

昭和五十四年一月

鹿児島県知事　鎌田要人

解題

伊地知季通編纂の薩藩旧記雑録のうち、季安・季通の父子自筆草稿本である島津家本旧記雑録は、現在東京大学史料編纂所々蔵であり、前編四八巻（長久二年―天文二三年）、後編一〇二巻（弘治元年―寛永二一年）、追録一八二巻（正保二年―明治二八年）、附録三〇巻からなる膨大な薩藩編年史料集となっている。薩藩旧記雑録には、右の島津家本の他に主な写本として内閣文庫本（国立公文書館所蔵本）、鹿児島県庁本（鹿児島県立図書館所蔵本）、島津家本（東京大学史料編纂所々蔵本）等がある。前者は表題が薩藩旧記前集、同後集となっており、前集が三六巻、後集が三二巻の計六八巻となっている。後者は前編薩藩旧記雑録・後編同・附録同となっており、それぞれ三六巻・三五巻（末尾三巻は追補）・五巻で計七六巻となっている。県庁本・内閣文庫本その他の諸写本と島津家本とは、収載史料その他にかなり相違がみとめられるが、その事由は県庁本前編一、巻頭記載（明治十三年十月付）の季通の序文によって明らかとなろう。左にこれを示す。

「国史ヲ編輯スルニ考拠トスヘキ者ハ古実録ナリ、余カ亡父季安性古ヲ好ミ、薩隅日旧古ノ記録文書ヲ探討スルコト数十年、余モ亦之ヲ集メテ以テ大成スルノ志アリト雖、固ヨリ至愚ニシテ編纂ノ道ヲ知ラス、普ク探リ広ク求メ纂輯スルニ若干冊トナル、旧記雑録ト名ク、前後両編ニ分チ惣計六十八巻トス、長久二年（星霜八百四十年）ヲ以テ始トス、元和元年（星霜二百六十余年）ヲ以テ終トス、此中間五百七十余年ノ歴世治乱沿革ヲ見ル証拠トスルニ足レリ、初メ筆ヲ弘化ニ起シ、嘉永中ニ至リ勤務暇アラスシテ停止ス、其後匿蔵スルコト殆ト三十年、而テ他書ハ皆近歳ノ災ニ罹ル、惟是ノ一書災ヲ免ル幸ト云ヘシ、該書載スル所ノ原文既ニ亡失スルモノ多シ、就中寺院所蔵ノ如キハ、廃寺ノ際悉皆官庫

ニ収蔵セシニ亦兵災ニ罹ル、嗟乎惜哉、曩ニ偶横川三等属ヲ訪ヒ該書ノ存在セシ話ニ及ヘリ、乃需ニ応シ五六巻ヲ遣ス、日ナラスシテ同氏京ニ齎シ、往テ巌谷編修官ノ展閲ニ供セラル、是ニ於テ該館監事三浦安、書ヲ本県渡辺大書記官ニ寄セ、該書ヲ謄写シテ以逓送スヘキノ倚頼アリ、即旨ヲ余ニ伝ヘラル、余以為ラク、此独余カ幸ノミニアラス、将来ニ保存スルニ至テハ豈本県ノ幸ト言ハサルヲ得ンヤ、退テ拙纂ノ体裁無キヲ思惟スルニ、大ニ額ニ汗スルニ至レリ、伏テ願クハ再調審査ヲ経、脱漏ヲ増補シ、且醜拙ヲ刪除セント欲ト雖モ、公務ノ寸暇偷ミ難ク笑ヲ永世ニ貽ス、実ニ是遺憾ト云ヘシ、今全巻謄写成ル、近日将ニ逓送セントス、概閲スルニ恐クハ伝写ノ誤アランコトヲ、因テ按スルニ、旧古ノ文章時世ノ沿革ニ随ヒ各其体ヲ異ニシテ、其草行ノ文辞ニ至テハ解シ得サル者最多シ、識者ヲ俟ニ如カス、今該巻披閲ノ便ヲ要シ、更ニ目録ヲ巻端ニ載セ概由ヲ叙ス」

すなわち季通の父季安の長年の収集書写史料に加えて、季通もまた史料の収集書写につとめ、それらを編纂して旧記雑録と名づけ、前編・後編にわけ、長久二年より元和元年に至る計六八巻の編年史料集にまとめたという。集成作業のはじめは弘化年中であったが、嘉永年中に至り繁忙のため中断、その後三十年もの間秘蔵したまま明治も十年余を経過したという。それが県官から内閣修史局編修官の知るところとなり、全巻謄写を依頼されることとなった。季通は忽卒の間、十分補訂を加ええぬことを気にかけながらもわずかに体裁をととのえ、謄写せしめて東京に送ったのである。そしてこのとき、県庁にも控として副本を作ってとどめたのであろう。この県庁本はその後さらに追補して、後編に三巻（元和二年―寛永二一年）を加え、他に附録五巻（年紀未考四巻、朝鮮日々記・朝鮮軍聞書一巻、鹿児島大学図書館玉里文庫所蔵島津久光自筆本前編巻一巻頭目録によれば、さらに島津世録記一巻の計六巻）を加えている。しかし季通はその後も手もとにある季安・季通自筆草稿本にさらに増補訂正を加え、その質量の増大整備をは

かり、編集に工夫をこらしたのである。島津家本と内閣文庫本、県庁本との巻数、内容の相違は右の事情にもとづく。季通が晩年旧記雑録の増補訂正につとめたことは、左記の同人編纂、殉国名藪再訂本の明治二十三年一月付のあとがきにより明らかとなる。それには「殉国名藪の一巻ハ過る弘化丁未の年輯録する所にして、巻首の序文に詳かなり、季直ハ余か幼名、指を屈すれは既に四拾四年を経たり、余今老年に至り、磯邸島津公の命に由て、昔年編輯する所の旧記雑録増補の事に與れり、名藪も亦命を請て其遺漏を追補し、以て雑録中に載せ」と記している。すなわち明治二十三年当時、季通は島津忠義の命をうけ、さきに編輯した旧記雑録増補の仕事をすすめており、それに同じく手がけていた殉国名藪の追補の成果を活用、載録していたことがわかる。いま島津家本旧記雑録の処々に季通の筆になる殉国名藪よりの書き入れのあることは、この経緯を物語っている。

さて伊地知季安の夥しい編著の中に、島津氏大系図正統増補全十巻がある。これは記録所編纂の島津氏世録正統系譜増補を書写した上に、自ら収集した史料を付加し、記事に考証を施す等したもので、書写は文政十一年であるが、本文中の註記は天保十一年に及んでいる。当時季安は文化朋党事件に連坐、遠島、赦免により、帰鹿後も出仕はかなわず、在野の身であったが、史学の研鑽に没頭、管窺愚考・雲遊雑記伝の編述等、数多の業績をあげ、すでに篤学者としてその名の知られた存在であった。

このように季安は島津氏家譜の増補修訂につとめているが、これを基礎として別に編年史料集成の意図も持っていたようである。季通が編纂した島津家本旧記雑録の前編・後編・付録には、季安の手になる書写史料が数多く含まれているのであって、それらの存在自体が季安の意図をそのまま物語っているように思われる。季通はその志をつぎ、さらに増補修訂を施し、追録をも付加して、膨大な薩藩編年史料集にまとめあげたのであると云えよう。

一二世紀末、島津氏が島津庄の地頭として、また薩隅日三州の守護として南九州の地に関係をもって以来、守護大名、戦国大名、近世大名と変貌しながらも、同氏の支配は一九世紀後半に至るまで、一貫して続けられてきた。そしてその長い歴史は当然夥しい関係史料の堆積をともなった。しかしそれらはただ漫然と後世に伝わるにまかせたのではなく、関係者の手により度々収集、整理、保存の努力が重ねられて今日に至っているのである。島津家文書を中心とする薩藩史料の本格的な収集、整理、系譜の作成は、幕藩体制の確立期に入る一七世紀、寛永末年以後のことである。幕府が諸国に国絵図・城絵図（正保）・諸家系図文書（譜牒余録として集成）等の提出を求めたのを契機に、島津家でも光久代より本格的な系譜調査、編纂、考証が行なわれることとなった。そして文書奉行（記録奉行と改称）に平田純正が任命され、記録所の設置をみ、同人を中心に積極的な史料収集、整理が続けられ、それをもとに家譜の編纂がすすめられたのである。明暦三年、純正はその功業に対し加増百石の恩賞を与えられている。

はじめに編纂されたのは、初代忠久以降十八代家久の初世に至る間の正統系譜一一四冊であり、ついで家久の中世以降その死去に至る間の正統系譜続編七九冊と、支流系譜五二家九六冊分であった。その後も記録所職員により、ひきつづき十九代光久以降二十五代重豪に至る間の正統系譜続編が編纂され、その数五〇八冊、合計正統家譜正続編七〇一冊、支流系譜九六冊に上った。さらに明治に至って二十六代斉宣、二十七代斉興の分も平田宗高らの手により追加編纂されている。そしてはじめに編纂された家久初世までの分も逐次増補訂正がなされ、収録史料の量も著しく増大した。当初のものを旧譜と呼ぶのに対し、それは新編島津氏世録正統系図と名づけられている。恐らく島津家文書の整理と併せて、新たに編纂しなおされたのであろう。季通が旧記雑録を増補修正する際、右の新編島津氏世録正統系図を十分に活用していることは、収録史料について両者を比較すれば自ら明らかであり、所在の記事等も後者によ

って訂正を行なっている。この点右の島津氏世録正統系図が西南戦争の際、関係者の尽力により岩崎の文庫から搬出され、兵火をまぬがれたということは、その後の旧記雑録の増補訂正を可能にしたわけであり、特記しておくべきことがらであろう。鹿児島城の火災・廃仏毀釈・士族の移住・西南戦争・風水害・火災・戦災等、これまでに幾多の人為的自然的災害に見舞われてきた鹿児島の地には、歴史の古さを直接示す原史料が必ずしも多くは残されていない。しかし原史料が失われたものも、歴代の記録所の関係者や季安・季通ら篤学の士の努力によって書写され、編纂された形で史料として大量に今に伝えられている。これら先人の努力には心から謝意を表さずにはいられない。

季安・季通の履歴については、既刊の追録一、巻頭の解題に詳述したので省略するが、伊地知父子二代の遺業、薩藩史料の集成、その成果としての薩藩旧記雑録が、これまでも、またこれからもいよいよ薩藩史、鹿児島県史は勿論、広く日本史研究の重要基本史料として活用されることは疑いあるまい。

島津家本前編旧記雑録と県庁本前編薩藩旧記雑録の目録を記して比較してみると、次の如くになる。

（島津家本）

一　長久　二――壽永　二
二　元暦　元――正治　二
三　建仁　元――承久　三
四　貞應　元――仁治　二
五　仁治　三――寶治　二
六　建長　元――弘長　三

（県庁本）

一　長久　二――建久　九
二　建仁　元――嘉禎　四
三　延應　元――寶治　二
四　寶治　三――弘長　三

七 文永 元—建治 三
八 弘安 元—弘安 十一
九 正應 元—永仁 六
十 正安 元—嘉元 四
十一 徳治 元—正和 五
十二 文保 元—元亨 二
十三 元亨 三
十四 元亨 四—正中 二
十五 正中 二—元徳 元
十六 元徳 二—正慶 元
十七 正慶 二—建武 二
十八 建武 三
十九 建武 四
二十 建武 五—暦應 三
二十一 暦應 四—康永 四
二十二 貞和 二—観應 元
二十三 観應 二—文和 元

五 文永 元—建治 三
六 弘安 元—弘安 十一
七 正應 元—正安 元
八 正安 二—正和 五
九 文保 元—元亨 二
十 元亨 三—正中 二
十一 正中 三—元弘 元
十二 元弘 二—建武 二
十三 建武 三
十四 建武 四
十五 建武 五—康永 四
十六 貞和 二—貞和 六
十七 観應 二—文和 元

二十四　文和　二―文和　三
二十五　文和　四―延文　元
二十六　延文　二―康安　元
二十七　貞治　元―應安　五
二十八　應安　六―永和　元
二十九　永和　二―永德　三
三十　至德　元―應永　元
三十一　應永　二―應永　六
三十二　應永　七―應永　十七
三十三　應永　十八―應永　十九
三十四　應永　二十―應永二十七
三十五　應永二十八―應永三十五
三十六　正長　二―永享　九
三十七　永享　十―文安　元
三十八　文安　二―應仁　二
三十九　文明　元―文明　五十
四十　文明　十六―文明　十八

十八　文和　二―文和　三
十九　文和　四―康安　元
二十　康安　二―應安　五
二十一　應安　六―永德　三
二十二　至德　元―應永　六
二十三　應永　七―應永　十七
二十四　應永十八―應永　十九
二十五　應永二十―應永三十五
二十六　正長　二―嘉吉　四
二十七　文安　元―應仁　二
二十八　文明　元―文明　十五
二十九　文明十六―文明　十八

四十一　長享　元――文亀　四　　三十　長享　元――文亀　四
四十二　永正　元――永正　十八　　三十一　永正　元――永正　十八
四十三　大永　二――大永　七　　三十二　大永　元――大永　七
四十四　享祿　元――天文　四　　三十三　享祿　元――天文　四
四十五　天文　五――天文　十　　三十四　天文　五――天文　十
四十六　天文　十一――天文　十五
四十七　天文　十六――天文　十七　　三十五　天文十一――天文　十七
四十八　天文　十八――天文二十三　　三十六　天文十八――天文二十三

右によっても明らかな如く、島津家本は量が増し、年代によっては県庁本の倍となって一巻を二巻としている。また区切りをあらためて巻をわけているものも少くない。島津家本巻八の内表紙には、巻六を消して巻八とあらためて記してあり、季通が県庁本の巻仕立をあらため、巻数を訂正したことを示している。しかしなお一応の編成であったとみえ、史料配列順の錯乱等が間々みられる。

何分季安・季通の書写は大量で、且つ時日の制約も少くなかったであろう。勢い書写・転写の間に、誤脱の生じることもやむを得ない。誤読・脱落・錯簡の例も一、二に止まらない。また人名・地名の比定、かな文書の傍註の誤り、考証の不適格等も間々見うけられる。しかしこれだけ多量の史料を幾度も転写しながら、その割には誤脱がきわめて少ないというべきであろうか。すべてとは云いきれないが比志島文書・樺山文書・入来院文書・台明寺文書・池端文書等、比較的まとまった文書は季安の書写したもので、後に増補したとみられる伊作家文書・越前島津氏譜等は

季通が書写したものと思われる。また同一文書を重複掲出している例がしばしばみられるが、その場合は大抵、季安の書写した文書と同じ文書を、季通が別に家譜（島津氏世録正統系図）等に載録されている文書写から書写したもののようである。

このように島津家本は内閣文庫本・県庁本に比して、はるかに内容が豊富になっているといえよう。しかし旧記雑録編纂の出発点が島津家々譜（世録正統系図）増補の再編にあったと思われるところから、基礎となった記録・文書の中心は、島津家関係（宗家・庶家を含む）のものが大部分で、それに逐次収集された記録・文書が付加されていくという形となっている。厳密な意味で薩藩編年史料、さらに鹿児島県編年史料というには、なお島津家編年史料の色彩の濃いことは否定できない。祢寝文書・二階堂文書の如くかなりまとまった文書をはじめ、なお現存する相当数の文書が収載されていないことも、右の事情と無関係とは云いきれない。今後島津家本旧記雑録に脱漏しているこれらの文書を一括収録することによって、はじめて薩藩史料、鹿児島県史料の名に適う完き史料集となるのであろう。そしてその課題の実現は、季安・季通等先人の遺業を継承し、その志に報いることになるのではあるまいか。

例言

一　本書は、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本（伊地知季安・季通自筆原本）「前編舊記雜錄」を底本とし、巻一から巻二十五までを収めて、「鹿児島県史料旧記雜録前編一」として刊行するものである。本書に収載した文書の年代は、長久二年から延文元年までの三百十六年間である。

一　底本に欠脱した一部の文書・記事を、鹿児島県立図書館所蔵本から採録増補した。

一　収載された文書について、原文書や影写本がある場合にはそれにより修正したが、いちいちそのか所は示さなかった。

一　文書・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。重出する文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文を省略した。

一　文書・記事の内容が数種にわたる場合には、小番号を付した。

一　巻末に文書・記事目録をかかげたが、正文・案文・写などの区別はしなかった。

一　刊行にあたって、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ　文書の所在などを示す原注は一字下げて首部におき、この原注や文書中の異筆・補筆は、「　」（墨書）、『　』（朱書）で囲んだ。

ロ　合点は、頭または右肩に「レ」（墨）、「レ」（朱）で示した。

ハ　文書の年月日・差出・宛所の位置などは、底本の体裁にあわせてある程度の統一をした。

ニ　書状の封じ目は、底本にあわせて「 」や「」を併用した。

ホ　花押は（花押）とし、適宜に人名を傍注した。

ヘ　端裏書・付紙などは、「　」で囲み、右肩にその旨注記した。

ト　文書・記事には、適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一　原文の磨滅虫損は、字数を推して□又は▭を以て示し、解読困難な字は、▨又は▩にして（ヨメズ）と注を付した。

一　原文の抹消は、その文字の左側に「ミ」を加えて、右側に書き改めた文字を記した。

一　頭注や行間の書きこみは、底本の体裁にあわせたが、頭注の長い場合はその位置を示し、関連か所の文末にまとめた。

一　人名・地名には適宜に傍注を付したが、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　原文中の返り点や送り仮名などは原則として省略し、仮名文書に付されていた底本の原注は、一部を残して省略した。

一　欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一　漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意をそこなわないものは、一部当用漢字新字体を使用した。

一　異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、一部底本の用字に従い、併用したものもある。

一　変体仮名などは、現行の平仮名に改めた。

一　当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

陳（陣）　蜜（密）　諏方（訪）　麑（鹿兒）　訴詔（訟）　飛彈（驃）　太輔（大）　狼籍（藉）

旧記雑録前編一　目次

口絵

序文……一

解題……二

例言……一一

目次……一四

巻一　長久二（一〇四一）年――壽永二（一一八三）年（忠久公）……一

巻二　元暦元（一一八四）年――正治二（一二〇〇）年（忠久公）……四二

巻三　建仁元（一二〇一）年――承久三（一二二一）年（忠久公）……九六

巻四　貞應元（一二二二）年――仁治二（一二四一）年（忠久公・忠時公）……一三一

巻五　仁治三（一二四二）年――寶治二（一二四八）年（忠時公）……一七八

巻六　建長元（一二四九）年――弘長三（一二六三）年（忠時公・久經公）……二〇一

巻七　文永元（一二六四）年――建治三（一二七七）年（忠時公・久經公・忠宗公・貞久公）……二五〇

巻八　弘安元（一二七八）年――同一一（一二八八）年（久經公・忠宗公・貞久公）……二九六

巻九　正應元（一二八八）年――永仁六（一二九八）年（忠宗公・貞久公）……三三六

巻一〇　正安元（一二九九）年――嘉元四（一三〇六）年（忠宗公・貞久公）……三八八

巻一一　徳治元（一三〇六）年――正和五（一三一六）年　（忠宗公・貞久公）……四二二
巻一二　文保元（一三一七）年――元亨二（一三二二）年　（忠宗公・貞久公）……四四九
巻一三　元亨三（一三二三）年正月――十二月　（忠宗公・貞久公）……四九一
巻一四　元亨四（一三二四）年――正中二（一三二五）年　（忠宗公・貞久公）……五一二
巻一五　正中二（一三二五）年――元徳元（一三二九）年　（貞久公）……五四三
巻一六　元徳二（一三三〇）年――正慶元（一三三二）年　（貞久公）……五七五
巻一七　正慶二（一三三三）年――建武二（一三三五）年　（貞久公）……六〇七
巻一八　建武三（一三三六）年　（貞久公）……六四二
巻一九　建武四（一三三七）年　（貞久公）……六七六
巻二〇　建武五（一三三八）年――暦應三（一三四〇）年　（貞久公）……七〇五
巻二一　暦應四（一三四一）年――康永四（一三四五）年　（貞久公）……七三五
巻二二　貞和二（一三四六）年――觀應元（一三五〇）年　（貞久公・師久公）……七六四
巻二三　觀應二（一三五一）年――文和元（一三五二）年　（貞久公・師久公・伊久公・氏久公）……八〇〇
巻二四　文和二（一三五三）年――同　三（一三五四）年　（貞久公・師久公・氏久公）……八三二
巻二五　文和四（一三五五）年――延文元（一三五六）年　（貞久公・師久公・氏久公）……八六三
文書・記事目録……八九一

（表紙）

忠久公　自長久二年　至寿永二年

前編　舊記雜錄　巻一

（原寸縦二四・三センチ　横一六・七センチ）

1

『見于交替式』

太政官符

一定割公廨置國儲數事

大國壹萬貳仟束（計公廨利率一万束、割取一千以為国儲、若公廨有増減者、一依此率准折、上中下国亦同此例、）

上國玖仟束

中國陸仟束

下國參仟束（志摩国并壱岐・対馬・多禰三嶋不入此例、）

右檢案内、去神亀元年三月廿日格偁、割正税稲出擧取利、名爲國儲、以充朝集使還國之間及非時差役并繕寫籍帳書生、并除運調庸外、向京擔夫等粮食、其出擧法、大國四万束、上國三万束、中國二万束、下國一万束者、至天平十七年、始置公廨、卽停國儲、天平寶字元年十月十一日式、唯稱割公廨内、置國儲物、未立割置之數、充用之色、因茲、諸國所置多少無限、或有貪吏不免贓汚、自今以後、宜依件爲定、以充公用、其充給粮食之色、准神亀元年格、但税帳大帳貢調等使、亦充粮料、其長官佐職各遞奉使、品秩雖異、使務是同、如聞、或國一使之料上下別數、事實不穩、宜一使粮料高卑同法、但四度使料多少之數、量事閑、繁増減定之、若違此制、輙私犯用者、計贓科罪、一同官物、

（延暦廿二年二月廿日）

（年紀ハ玉里島津久光書写本ニヨリ補フ）

2

『續日本紀』

神亀元年三月甲申、令七道諸國依國大小、割取税稲四万以上廿万束以下、毎年出擧取其息利、以充朝集使在京及非時差使除運調庸外、向京擔夫等粮料、語在格中、

3

『令』

天平寶字元年十月乙卯、太政官處分、比年諸國司等交替

之日、各貪公廨競起爭論、自失上下之序、既虧清廉之風、於理商量、不合如此、今故立式、凡國司處分公廨式者、惣計當年所出公廨、先塡官物之欠負未納、次割國内之儲物、後以見残作差處分、其法者長官六分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分、其博士醫師准史生例、員外官者各准當色、○丁卯、始制諸國論定數、隨國大小各有差、事具別式、

4 『清水臺明寺文書』

聽宣　贈於郡司

可且加制止、且搦進其身、臺明寺山邊所在雜木伐運雜人等事、

右、得彼寺住僧解狀偁、謹檢案内、當山是修行者建立、不獲(ママ)定之檀越、然而靈驗無喻、祈禱有感、如此之聞遍滿遠近、非無其驗、隨即爲公家御願寺、勤修法華三昧、粉米每年立用公帳五十餘斛、然而深山之甚、依不被下合夕、住僧也少、荒廢尤多、借住無人之間、所在堂舍顚倒及數十年、不蒙公恩、敢不可修造、隨即相期公家造木之程、今月二日大風、一屋不遺、皆悉掃地顚倒又了、因之制置此山所在雜木、擬免件造事(ママ)粉之處、里邊雜人不隨制止之旨、欲伐失矣、仍言上如件者、可停止之狀、所仰如件、宜承知之、依件行之、故宣、

長久二年十一月十二日

大介惟宗朝臣在御判

5 『清水臺明寺文書』

國符　贈於郡司

可任先符旨、重以制止、臺明寺傍(ママ)示内山野狩獵雜人等事、

右、如聞者、件山國内第一之勝地、靈驗無比砌也、所住僧侶等致鎭護國家之祈、而間先々依彼山辞狀、件狩獵制符已明、而今愚暗雜人等、不憚制止、動致狩獵之計云々、佛法陵遲只在於斯、仍重所仰如件、宜承知之、任先符旨、早以停止、若不憚制止者、慥召進其身、將以糺決、符到奉行、

大介藤原朝臣在御判

長久四年八月十一日

6 『續日本後紀卷十』

承和八年二月乙卯、勅、天平勝寶四年騰　勅符云、先禁

斷寺邊殺生畢、今如聞、時序稍遠、禁斷遂薄、若違犯、卽以違勅論、春蒐秋獮、釣而不網、事不得已、期兮止殺、況乎仁祠之邊、精舍之前、從來解脫之界、非是漁獵之地、如聞、勢家豪民、無憚憲章、國宰講師、不存檢校、遂使寺內馳馬、佛前屠禽、如此淫濫、不可勝言、夫妖孽之臻、未必自天、民自取焉、可爲太息、宜重下知五畿內七道諸國司、嚴令禁斷寺邊二里殺生、如有犯者、六位已下科違勅罪、五位已上錄名言上、不得阿容、三月壬申朔、勅、大和國添上郡春日大神神山之內、狩獵伐木等事、令當國郡司殊加禁制、

7 『清水臺明寺文書』

國符　贈於郡司

可慥制止臺明寺山傍(ママ、下同)示內山野狩獵雜人等事

右、得彼山住僧等辭狀偁、請被下知在地、停止傍示內山野狩獵雜人等狀、右謹檢案內、當山贈於郡部中、雖有猪鹿之堵、建立此寺之後、言上事由之日、傍示之內、前例被停止件狩也、而今往來山中雜人、任意致殺生之計、一向結重罪之胤、仍言上如件、望請國裁、停止件狩、靜致念佛讀經之勤、將爲國家鎭護之祈者、今檢案內、件山佛法興隆之基、經論流布之砌也、須往來雜人、發歸依渴仰之心也、而今如聞者、爲宗殺生、結惡業煩惱之胤云々、是尤重在可制止、仍所仰如件、宜承知之、早以制止、若背制旨、強有狩獵之輩者、因准強竊盜之犯、可捕進其身者也、事爲善根之上、已緣鎭護之祈請、可糺行、不得疎略、符到奉行、

大介惟宗朝臣在御判

長久(元カ)六年八月八日

奉行

大領藤原

8 『調所恒範譜中』

天喜二年甲午初、

一條帝時、高麗賊來、劫掠邊陲、乃奉幣諸社、以禱禳之、

三位大宰大貳源朝臣資通(字多帝皇子敦實之玄孫)照長德三年例、崇加管內諸神爵一級、及二月二十七日、正六位上行大典山宿禰某、抄寫其在大隅諸郡大小神名於副諸神位記、爲簿一通、以授恒範、奉行之時、方恒範居主神司故也、(今其原本久歷年、所上方殘欠、僅余三郡、所謂肝屬郡、謨熊毛等也、而他五郡既亡無見、可不惜哉、)

『調所氏文書』

田（マヽ）□

田捐大明神□

正五位下中山明神一前

肝属郡卌九前

副諸神位記卌九巻

従二位大明神七前

中宮國玉大明神　中□

下津宮大明神　鷹屋□

武塔大明神

従三位大明神五前

神崎大明神　伊勢伊津友（支カ）

加茂大明神　江多大明神

従四位上明神廿五前

御崎明神　河上明神

三宅明神　火水明神

山宮明神　須久持明神

津宮明神　阿賀志明神

賀茂明神　字隠明神

赤志明神　剣歳明神

江田大明神

秋穏（穂カ）大明神

若山保利大明神

國玉大明神

東屋明神

國玉明神

神崎明神

開聞明神

河上明神

海龍王明神

池田明神　受持明神　字浪明神

揚前明神　石上明神　和太津見海龍王〻〻

山本明神

従四位下明神十二前

包源明神　細明神　汲水明神

伴汲明神　高雄國玉〻〻　河汲佐國玉大王明神

天社明神　武雄明神　御崎明神

秋富明神　國社明神　軍明神

馭謨郡十三前

副諸神位記十三巻

従四位下籔悉日明神一前

正五位下明神五前

渇江明神　賢牟明神　東宮明神

郡板明神　安相明神

従五位上明神七前

郡明神　箕志明神　賢无明神

温江明神　安相明神　東宮明神

郡明神

熊毛郡卌前

副諸神位記卌巻

從三位大明神十八前

國玉大明神　五國玉大明神（立カ）　海子大明神

菅男大明神　海男大明神　稲男大明神

上社大明神　辟大明神　高屋大明神

下浦大明神　雄大明神　江良貴大明神

屎世大明神　神玉大明神　平世大明神

新島大明神　子奈義比之瀬大明神

正四位下明神三前

豊鍬明神　眞長明神　愛雄明神

從五位上明神九前

以世明神　妻明神　笠明神

談志明神　揚田明神　栗屎峯明神

大佐吉明神　瀬明神　永上明神（永カ）

右、興國之基無先祭祀、敬神之道不如褒崇、方今職爲都督、政同朝庭、是以尋長徳三年之例、管内大小諸神奉増爵一級、國宜承知、申官之間、且以施行、不得疎略之、符到奉行、

参議正三位大貳源朝臣　正六位上行大典山宿祢

天喜貳年二月廿七日

（一～九号文書底本ニ欠ク、鹿児島県立図書館本ニヨリ補フ）

10　『在清水臺萠寺』

聽宣　贈於郡司

可任代々聽宣旨、永停止臺明寺山四至内狩事、

右、件山、是佛法興隆之地也、因之代々宰吏、件狩永可停止之由所下知也、而如聞者、背彼起請之旨、近來有好狩輩之由傳言云々、仍重所仰如件、郡司宜承知、永以停止、若不憚制旨、猶有好狩輩者、且搦進其身、兼亦注姓名、可言上事由也、隨則現世重可召禁之、後生永断佛種者也、故宣、

天喜三年七月廿五日

大介高橋朝臣在御判

11　『在清水臺萠寺』

「ロウラニ」

「橋成友状当山傍示之事此案文税所□」

橋成友謹言

不可自今以後狩獵、臺明寺山禁制殺生堺、須波留加多毛止の西訓木尾より内佐古狀、

右、禁制傍示之堺、元者是須波留加多毛止也、而今傍示之近、猶不可狩件訓木尾内之由、山内住僧所令制止給也、隨制止旨、自今以後、不可狩獵件訓木尾内之狀、起請如

件、仍勒事狀、謹言、

天喜四年六月廿九日　　橘成友在判

12

『写本在清水臺明寺』

廳宣　贈於郡司

可且加制止、且以停止、臺明寺山内恣好遊獵輩事、

右、彼寺庄嚴雖舊、靈驗日新、而如聞者、郡内之雜人等恣爲宗遊獵、多断生類、逞欲畋鮫(マヽ)效獲魔(マヽ)慶、自今以後一切禁断、若制止之後、重有此之聞、且言上事由、兼搦進其身、事功徳也、諸佛讃諸、宜承知、永以停止、仍宣、

康平三年二月廿六日

大介内藏朝臣在御判

13

『写本在清水臺明寺』

廳宣　贈於郡司

可任代々廳宣旨、永停止臺明寺山四至内狩事、

右、件山、是佛法興隆之地也、因之代々宰吏、件狩永可停止之由、所下知也、而所聞者、背彼起請之旨、近來有好狩輩之由傳言云々、仍重所仰如件、郡司宜承知、永以停止、若不憚制止、猶有好狩輩者、且搦進其身、兼亦注姓名、可言上事由也、隨則現世重可召禁、後生[illegible]亦可断佛種者也、故宣、

延久元年二月十五日

大介藤原朝臣在御判

14

「百錬抄巻第五」

後三條天皇(諱尊仁)四年

延久元年己酉二月廿三日、可停止寛徳以後新立之庄園、縱雖彼年以往、立券不分明、於國務有妨者、同停止之由、宣下、閏二月十一日、始置記錄庄園券契所、定寄人等、於官朝所始行之、

15

「權執印文書」

八幡正宮

永暹大徳

右人、補任權惣検校職既畢、

應徳四年二月八日

惣検校法師大和尚位　　祝部検校柴嶋

執印兼講師傳燈大法師位判有　　主神検校高白

權惣検校權大掾藤原　　宮主僧

宮主僧

16 『清水臺明寺文書』

御供所検校佛子
修行所検校佛子
御馬所校大法師（検脱カ）
御前検校大法師位
御前検校大法師位
御前検校大法師
辨印柴嶋別吉
辨印山則永
辨印山武依
辨印源爲季
辨印高田爲永
辨印大宅友任
検校午卩安道（ママ）
検校法心幸行
検校藤井壹依
別當安卩佐具（ママ）
別當立橘友成（ママ）
別當藤行正

宮主僧
執當大法師
權座主大師（法脱カ）
座主大法師

（端裏書）
「曽乃墓町本券」

「（外題）
任本主并郡司等判、可令領掌也、（花押）」

宗岡重武謹言
沽渡相傳所領田地事
在
曽於郡二条二里廿七坪壹町　字墓町也、
右、件所領田壹町、依有要用之直、限永年所沽渡於成心房也、仍爲後日沙汰、沽券如件、
大治五年十二月廿八日　散位縣（花押）
檜　前（花押）

「郡判
件二条二里廿七坪一丁本領主沽券明白也、仍加署了、
僧（花押）」

17 『清水臺明寺文書』

八幡正宮執印僧行賢敬白
寄進臺明寺毎年九月中旬三箇日夜不断大念佛燈油佛聖僧供析、贈歟郡止上居取内万得領水田捌段内貳段者、止上御供析奉寄畢、残陸段并畠地壹所字由久留薗事、
四至限渡瀬者　但古渡瀬

副進調度文書伍通

右、十方淨土之中、尋往生因、西方念佛殊勝第一之行娑婆穢濁貴賤、誰不願安養乎、于茲鎭西隅州有所部、号贈唆郡、其中有靈窟、稱臺明寺、有別所、銘衆集院、有住僧、名円臺房、興隆佛法、爲法界衆生、以毎年九月中旬之比、三箇日夜之間僧供析等、勸進十方檀那、始修不断大念佛及十六个年、爲一番僧供之頭、毎年聽聞之處、堂僧十二口析束帯、以自力構置、堂庄嚴爲躰丁寧之條、隨喜之至、涙難禁、値遇之志、尤切也、然則遙期未來際、爲往生安養、件大念佛燈油佛聖僧供析、限永年彼居取内田畠、奉寄既畢、但其内宮前二段坪者、依爲止上御前之砌、御供析所分寄進也、所念無他、佛神照見、行賢敬白、

天承元年九月十七日　　正宮執印僧行賢敬白

「任寄文旨、早可爲臺明寺不断念佛僧供析田之、

證判

大介中原朝臣在御判

大判官代藤原

大判官代惟宗在判

諸司検校縣宿祢在判

税所検校建部在判

惣検校

任用

目酒井

權大掾藤原

權大掾建部」

18

「ロウラ」

「ミやなかのさやく支配状」

就有里名社役事

「此一巻加一見候了、

留守従五位下行紀幸範(花押)」

「是ハ一見加(タル時ノ年月也)

「應永十七年七月十六日」

一武内宮御修理役支配事

参間西	但本陸間	舎籠橋隠
中津河拾捌町	一丈四尺	久樂玖段
山口田玖段	五寸二(分)部	秋松柒段
与樂陸段	三寸五部	友永柒段
是國肆段大	二寸七分	恒久参段
小濱伍町捌段大	三尺三寸七分	千与丸壹町柒段
妙當貳町	一尺一寸六分	乃力壹町一段
大田壹町	五寸八分	弘永壹町柒段
宮恒壹町陸段	九寸三分	釘丸壹町陸段
春恒五段	二寸九分	綾武壹町捌段
智乃壹町伍段	八寸七分	土与丸壹町貳段
有里壹町一段三百歩六寸九分		恒久壹町

五寸二分
四寸一分
四寸一分(ママ)
一七寸分
九寸三部
五寸八分
九寸三分
九寸三分
九寸八分
六寸四分
五寸二分

延久壹町　五寸八分　安松壹町　五寸二分
永松玖段　五寸二分　福丸柒段　四寸一分
實道柒段　四寸一分　得力柒段　四寸一分
一別當伍段　二寸九分　得樂伍段　二寸九分
三郎冠者伍段　二寸九分　惟吉伍段小　三寸一分
宮与丸柒段　四寸一分　勢得陸段　三寸五寸（ママ）
來得伍段　二寸九分　秋恒肆段　二寸三分
鬼次參段半　九分　葦原田肆段　二寸三分
加万參段　一寸一分　宮法師參段　一寸七分
宮王丸參段　一寸七分　末正參段　一寸七分
常得參段　一寸七分　安丸參段　一寸七分
一成肆段　一寸六分　安枝伍段　二寸九分
加治木郷内　宮永

一同宮御修理御遷時菓子注文事

合菓子伍合　白米五舛
拾町別分米　九合九夕八才
町別分米　九夕九才
九段別分米　九夕九才
八段別分米　八夕
七段別分米　七夕一才
六段別分米　六夕一才
五段別分米　五夕二才
四段別分米　四夕
三段別分米　三夕一才
二段別分米　二夕二才
一段別分米　一夕一才

一同東郷　宮永
中津河　一舛九合　久樂　九夕
山口田　九夕　秋松　七夕一才
与樂　六夕　友永　七夕一才
是國　五夕　恒久　三夕一才
秋次　三夕　末吉　一才
一同西郷　宮永
小濱　八合九夕　千与丸　一合八夕
妙當　二合　乃力　一合一夕
大田　一合　弘永　一合八夕
宮恒　一合六夕　釘丸　一合六夕
春恒　五夕　綾武　一合九夕
智乃　一合五夕　土与丸　一合一夕一才
有里　一合一夕　恒久　一合
延久　一合　安松　一合
永松　九夕　福丸　七夕一才
實道　七夕　得乃　七夕一才
宮与丸　七夕　一別當　五夕
得樂　五夕　三郎冠者　五夕
惟吉　五夕一才　勢得　六夕二才
來得　五夕　秋恒　四夕四才
一成　四夕一才　葦原田　四夕四才

鬼次　四夕一才　安丸　三夕一才
加万　三夕一才　宮法師　三夕一才
宮王丸　三夕一才　末正　三夕一才
常得　三夕　安枝　五夕
一加治木郷内　宮永
崎守　八合
一同御修理御遷時御酒注文事
合御酒壹舛代三舛
拾町別分米　四合二夕七才　町別分米　四夕三才
九段別分米　三夕八才　八段別分米　三夕五才
七段別分米　三夕　六段別分米　二夕五才
五段別分米　二夕二才　四段別分米　一夕七才
三段別分米　一夕三才　二段別分米　九才
一段別分米　四夕　三百歩分米　三才
大分米　二才　半分米　一才
小分米　六十歩分米
一同東郷　宮永
中津河　七合六夕二才　久樂　三夕九才
山口田　三夕九才　秋松　三夕
与樂　二夕六才　友永　三夕
是國　二夕　恒久　一夕三才
秋次　一夕三才　末吉　六才
同西郷　宮永
小濱　二合五夕　千与丸　七夕三才

妙當　八夕三才　乃力　四夕七才
大田　四夕三才　弘永　七夕三才
宮恒　六夕九才　釘丸　六夕九才
春恒　二夕一才　綾武　七夕七才
智乃　六夕五才　土与丸　五夕一才
有里　五夕一才　恒久　四夕三才
延久　四夕三才　安松　四夕三才
福丸　三夕　實道　三夕
得力　二夕一才　宮与丸　三夕
勢得　二夕六才　一別當　二夕一才
得樂　二夕一才　一成　一夕七才
惟吉　二夕三才　三郎冠者　二夕一才
秋恒　一夕七才　來得　二夕一才
葦原田　一夕七才　鬼次　一夕五才
宮法師　一夕三才　加万　一夕三才
末正　一夕三才　宮王丸　一夕三才
安丸　一夕三才　永松　三夕九才
安枝　二夕二才　常得　一夕三才
一加治木郷　宮永
崎守　一合六夕
一同御遷時産支配注文事
合産壹枚代用途貳拾文
同東郷　宮永　久樂　二分
中津河　五文三分

山口田　二分　秋松　一分
与樂　一分　友永　一分
是國　一分　恒久　一分
秋次　一分　末吉　一分
一桑西郷　宮永
小濱　一文　千与丸　三分
妙當　三分　乃力　二分
大田　二分　弘永　二分
宮恒　二分　釘丸　二分
春恒　一分　綾武　三分
智乃　二分　土与丸　二分
有里　一分　恒久　一分
延久　一分　安松　一分
永松　一分　福丸　一分
實道　一分　得力　一分
一別當　一分　得樂　一分
三郎冠者　一分　惟吉　一分
宮与丸　一分　勢得　一分
來得　一分　秋恒　一分
一成　一分　葦原田　一分
鬼次　一分　加万　一分
宮王丸　一分　末正　一分
常得　一分　安松丸　一分
安松　一分

加治木郷内　宮永　崎守　二文
右、目録支配如件、
保延元年乙卯二月一日

19

「「ロウラ」「ミやなかの御修理支配状」」

就有里名社役事
「此一巻加一見候了、
留守従五位下行紀幸範(花押)」
「應永十七年七月十六日」

一早風御修理支配事
柴尺間壹間
町別一寸九分　九段一寸六分　八段一寸四分
七段一寸二分　六段一寸　五段八分
四段六分　三段四分　二段二分中
一段一分中
桑東郷　宮永
中津河拾捌(ママ)　三尺六寸一分　久樂玖段　一寸六分
山口田玖段　一寸六分　秋松柴段　一寸二分
与樂陸段　一寸　友永柴段　一寸二分
是國肆段大　七分　恒久参段　四分
秋次参段　四分　末吉壹段小　二分
桑西郷　宮永
小濱伍町捌段大　一尺一寸三分　千与丸壹町柴段　三寸一分

妙當貳町　三寸九分　乃力壹町一段　二寸一分
大田壹町　一寸九分中　弘永壹町捌段　三寸一分
宮恒壹町陸段　二寸九分中　釘丸壹町陸段　二寸九分
春恒五段　八分　綾武壹町捌段　三寸三分
智乃壹町伍段　二寸七分中　土与丸壹町貳段　二寸二分
有里壹町一段三百歩　二寸一分　恒久壹町　一寸九分
延久壹町　一寸九分中　安松壹町　一寸九分
永松玖段　一寸六分　福丸柴段　二寸二分
實道柴段　一寸六分　得力柴段　一寸二分
一別當伍段　八分　得樂伍段　八分
三郎冠者伍段　八分　惟吉伍段　八分
宮与丸柴段　一寸二分　勢得陸段　一寸
來得伍段　八分　秋次肆段　六分
一成肆段　六分　葦原田四段　六分
鬼次参段半　五分　宮法師参段　四分
加万参段　四分　末正参段　四分
宮王丸参段　四分　安丸参段　四分
常得参段　四分　安枝伍段　八分
加治木内　宮永
用丸捌町　四分
右、目録支配如件、
保延元年乙卯二月二日

20 一兩社　参間御修理役支配事

桑東郷　宮永　貳拾参町
中津河拾捌町　七尺五寸六分　久樂玖段　三寸七分
山口田玖段　三寸七分　秋松柴段　三寸一分
与樂陸段　二寸七分　友永柴段　三寸一分
是國肆段大　三寸三分　恒久参段　一寸五分
秋次参段　一寸五分　末吉壹段小　六分
桑西郷　宮永
小濱伍町捌段大　一尺一寸五分　千与丸壹町柴段　一尺一寸五分
妙當貳町　一尺五分　乃力壹町一段　四寸七分
大田壹町　四寸二分　弘永壹町柴段　一尺五寸五分
宮恒壹町陸段　七寸二分　釘丸壹町陸段　七寸二分
春恒五段　二寸一分　綾武壹町捌段　一尺一寸二分
智乃壹町伍段　六寸三分　土与丸壹町貳段　五寸七分
有里壹町一段三百歩　五寸三分　恒久壹町　四寸二分
延久壹町　四寸二分　安松壹町　四寸二分
永松玖段　三寸七分　福丸柴段　三寸一分
實道柴段　三寸七分　得力柴段　三寸一分
一別當伍段　二寸一分　得樂伍段　二寸一分
三郎冠者伍段　二寸一分　惟吉伍段　二寸一分
「末キル、」

21 『在清水臺明寺』
（外題）
「任沽券之旨、可領知之、

御前検校僧嚴禪謹言　　國司代散位中原朝臣(花押)」

沽渡進田地壹町事

在

曽於郡貳條貳里貳拾柒坪　字墓町者

副進　本領主重武沽券一通

右、件田地、依有要用之直、限永年所沽渡進於財田稲富實也、仍爲後日沙汰沽券、以解、

長承四年五月廿七(日脱カ)　僧(花押)

22　『写本清水蠶明寺』

「ロウラニ」

「墓町國判」

(外題)

「任沽券之旨、可領掌之、

國司代散位中原朝臣(花押)」

財田稲富解　申請　國裁事

請殊任本領主沽券、賜國判、令領掌曽乃郡内貳條貳里貳拾柒坪字墓町壹町子細狀、

副進　調度文書二通

一通　正宮御前検校僧嚴禪沽文

一通　本領主重武沽券　在前司國判

右、謹検案内、件田地以指要物、限永年所買得也者、任本領主等之沽券之旨、賜國判、爲令永代之證文、相副券書等、言上如件、以解、

長承四年六月　日　　財田稲富上

「有沽文之上、國郡与判明白也、仍在廳加署、但有訴者、可依券契也、

大判官代藤原(花押)

惟宗

建部(花押)

諸司検校縣宿祢(花押)

税所検校建部(花押)」

「ロウラニアリ」

「三通」

同かたのうりけん墓町國判」

23　『正本在櫨執印』

下　五大院政所正信所

可早任下知旨、令政所沙汰、宛下耕作寺領田畠等事、

在

高城東郷　同仲郷　入來院

薩摩郡并宮里郷　阿多郡等内

右、件田畠等、春時不令知沙汰人、各恣乍令耕作、不限秋(隨カ)
所勘、有限沙汰等令遁避之事、甚以奇怪事也、若於自今
已後者、於院主者有任替限、於政所者永代不朽人也、早
任下知旨、可令政所正信沙汰、宛下耕作件寺領田畠等也、
就中、於入來郡者、有公驗限雖爲坪〻、以往之間、全以
不令知沙汰人、過來候条、所不輕罪科也、早任下知旨、
可令致沙汰之狀、令下知畢、敢不可違失、故下、

保延元年十月廿五日

院主石清水權寺主大法師(花押)

24 『写本清水臺明寺蔵』

「任寄文之旨、可爲佛聖析田之、(外題)

大介菅野朝臣在御判」

正宮執印僧行賢敬白

奉寄臺明寺衆集院阿弥陀堂每日佛聖析万得領田玖段事

在贈於郡

一条三里九坪捌段 字楠本

同条四里十九坪内壹段 字久保山

右、行賢以去寛治元年親父惟宗朝臣在任之時、下向當國、
有事縁、時〻參詣於彼寺矣、住僧等尋舊跡、致二季彼岸
不断經勤之處、本自爲無依無怙之洞(ママ)、只雖相憑十方檀那
之助成、豈以難遂將來哉、因茲、買得便宜水田、取國判
等、施入於彼供析先畢、而於每日佛聖者、依無其析田、
爲便宜之故、雖不足年中之相折、永以所施入件領田九段
也、仰乞、植善苗於身田、結雅果於心樹矣、仍奉寄如件、

康治元年九月廿日　　執印僧行賢敬白

25 『國分氏文書』

廳宣　留主(守)所

可早任官府(符カ)施行并先日廳宣狀、停止僧永修妨、如舊爲
安樂寺領、隨本寺使所勘、全致國分寺沙汰事、

右、件國分寺、任舊例、可爲安樂寺領之由、去年七月被
下官府(符)、隨文成府施行國廳宣畢、而僧永修寄事於左右、
施武威、背官宣旨、追掃府使寺家使等之由、所訴申也、
事出自　綸言、何可忽諸朝威哉、早任先日官符府宣廳宣
等、停止彼妨、重可令致其沙汰之狀、所如件(仰脱カ)、留守所宜
承知、不可違失、以宣、

天養三年正月　日

大介藤原朝臣在御判

26 『入來永利氏文書』

「任先例、可爲地頭職狀如件、（外題）

右衞門尉中原（花押）」

入來院弁濟使別當伴信房解　申請御庄政所裁事

請被殊任度度御下文旨、賜重御外題、薩摩郡内山田村

地頭子細狀、

右、謹検案内、於信房者、雖貪弊不堪之身、勵微力隨堪、

令進上任析於京都、山田村并車内可地頭之由、雖罷預御

下文、至于車内者、依爲當時御目代沙汰、不及力、於山

田村者、無相違賜御（ママ）迚題、爲備永代證文、言上如件、以

解、

久安三年二月九日　　伴信房上

27 一久安三年丁卯四月八日頼朝誕生、

—義朝

下野守　左馬頭　播磨守　從四位下

母淡路守藤原忠清女　〈被刺殺、

—義賢

帶刀先生　〈被誅、

—義憲　所屠殺、

二條院藏人　號志田三郎先生　伊豆守

—頼賢

四郎左衞門尉

〈兄弟五人爲囚被誅於舟岡山、

—頼仲

五郎　掃部助　〈被誅、

—爲宗

號丹波冠者　六郎　〈被誅、

—爲成

號八幡七郎　〈被誅、

—爲朝

號鎭西八郎　〈腹搔切往生云々、

—爲仲

九郎　〈所誅戮、

—行家　〈所誅、

初義盛　十郎　藏人　備前　從五位上

—淡路冠者　爲家

—加賀冠者　頼定

—練絹冠者　正親

—松井冠者　維義

義俊
經家
義成
僧都　仙覺
律師　賴憲
慈應
乙若　〃被誅、
亀若　〃被誅、
鶴若　〃仝上、
天王　〃仝上、
女子　〃自殺、

悪源太　義平　〃被誅、
中宮大夫進　朝長　〃所害、
女子
爲政家所刺殺、
賴朝
右兵衛佐　權大納言（不經參議中納言等）、正二位　右大將
征夷大將軍
久安三年丁卯四月八日誕生、母熱田大宮司散位
藤原季範女也、
清和天皇十代之後胤也、
義門
宮内丞　左兵衛尉　早世、
女子
土佐冠者　希義　〃被誅、
夜叉御前　〃投身杭瀬河、
蒲生冠者　範賴　〃被屠殺、
全成　被誅戮、
圓成　戰死
大夫判官義經　〃自殺、

28

『写都城本田某家入來本田氏文書也』
『ロウラニ』「あくけんたとのゝ御くたしふミ」
下　下本田郷住人等
定遣郷司職事
藤原兼綱
右、爲相傳之上、所令參入、早令安堵住人浪人等、可令勤課役之狀、所定遣如件、住人宜承知、不可違失、故下、
久壽二年三月廿三日

源在判

29 「御譜中　義朝傳中」

保元元年丙子、新院崇徳院也、有御謀叛之企、使武士等招集東三條、上山頂木枝、窺見姉小路西洞院内裏高松殿、于時義朝隨内裏之徵矣、七月三日、令義朝所候東三條留守之捕小監物藤原光貞及武士貳人而問巨細、則説御謀叛次序者詳也、且復知足院禪閤殿下忠實公之三男宇治左大臣頼長公亦勸御謀叛曰、以此之時宜佳期也云爾、

同年七月五日、徵諸將於

内裏高松殿南庭、有官軍於諸方分賦

宣下、其中下野守義朝、陸奥新判官義康兩將候

内裏、加守護勿敢怠慢、其餘悉可發向諸所也、

同年七月十一日寅時、已發官軍向　院御所、盡筋力雖攻鬪、未決勝負之際、義朝遂奏問曰、自夜中至曉天、爲指揮汗馬官軍雖致粉骨、防禦堅固而未得勝利、以故欲放火、則法勝寺在風下、伽藍回祿如之何乎、依

勅定可成敗焉、

勅答曰、有勝利道者急速可任義朝之意、伽藍已下雖會回祿之災、君君臣臣、則再興何可難乎、由此放火於藤中納言家成卿家屋、則西風猛烈忽迨　院御所白川殿、以故新院及左大臣敗北也、依今日之勲功、義朝今夜任左馬頭也、

老父爲義不得逃去而降參、則達之於

天聽、請死罪恩免者、既雖曰及兩度、有逆鱗無寛宥、不得已而使鎌田次郎正清誅於七條朱雀、且復弟四郎左衞門尉頼賢・五郎掃部助頼仲・六郎爲宗・七郎爲成・九郎爲中・乙若・亀若・鶴若・天王共九人斬於舟岡山、于時幼稚之弟四人家臣六人追跡殉死、母堂聞此訃音、哀傷之餘投身於桂川、母乳母亦同入水死、悲乎哉、

30 『權執印文書』

欽明天皇御代時

紀伊國新宮之竹内十郎行實(マヽ)汗將軍ニ忠節を申上候、仍御文を給候所領を被下候、下三ヶ國ニ鹿兒嶋之内武三十町、谷山ニ福本五十五町、同薩摩之内鹿兒四十町、以上百二十五町を給候、彼所領ニハ三年ニ一度御進上物を送上可被申候、

竹内兄弟四人

（花押）　次郎ニ谷山殿

三郎ニ頴娃殿

四郎ニ伊作殿

女子方

保元歳次丙子元年八月廿二日　（本文書疑フベシ）

31

九州雖爲遠土、隅州太郎院七百餘町、爲深心一儀也、就中爲藤家攝政太政大臣政、訪朝家古法處、伯父悪左府依爲崇徳院之御味方、須有清盛存旨、先應一旦之時節、可令遠國者也、

保元元年丙子十一月朔日　（本文書疑フベシ）

按ルニ、建久四年幕府菱刈氏ニ菱刈院ヲ賜ヒ、五年ニ至リ、太良院ニ居リ、菱刈ヲ氏トスルコト見ヘタリ、照考スヘシ、保元ヨリ建久ニ至ル三十八九年ヲ経タリ、

32

『清水臺明寺蔵』

國留守所移　臺明寺衙

欲被早任藏人所召物使解狀致沙汰、貢御青葉竹、令私用故、不能調進子細狀、

副彼御使解狀一通

移、件　貢御笛竹、任先例、可切調進之由、所令下知也、隨差副御使於國、　祗承貢御所仁令參會之處、解狀如此、如解狀者、住僧所行尤不穩便、且爲蒙府裁、且爲令經奏聞、移送如件、以移、

平治元年七月十一日　目大中臣（花押）

權大掾檜前

權大掾紀

33

「義朝傳」

一平治元年己酉十二月、與藤原信頼謀叛、二年庚辰正月三日、於尾張國野間内海、爲長田忠致所殺、年三十八、

- 爲義
  - 男四人
  - 義朝
    - 保元元年被斬
    - 男女二十人
    - 頼朝
      - 男女八人
  - 男女四人

34

「御譜中　義朝傳」

平治元年十二月日、藤信頼卿有起兵革之事、義朝與之楯籠内裏、而放火於三條殿、押籠院内信西入道之一類、

悉以退治畢、稱件勸賞賜播磨州、任播磨守、郎等鎌田次郎正清亦任兵衞尉、乃改正清稱政家焉、平清盛運籌策夜暗之際、密奉爲行幸於六波羅、而無敢知者、聞此故於後刻、各雖周章、而無甲斐也、

平治元年十二月廿七日、向六波羅挑戰之際、義朝之軍忽敗、而退去矣、及此之時、俾政家往六條堀川宿所、殺十四歳女子、而後經近江路著于濃州青墓宿、入于宿長大炊宅、有渠之女子延壽者、先是既寵愛而産女子、稱夜叉也、二男中宮大夫進朝長、今度於龍花越被傷、雖從到于當宿、今也不得行歩、向父請死、不得已、而潛刺殺者也、

義朝欲到東國發青墓宿、宿之市人殆乎二三百輩、夜暗襲來、而將支止、丁此之時佐渡式部大夫重成、忽然進出追散之於四方、馳入于安森、向慕來當敵、射殺十有餘人、而後自剝面皮云、左馬頭義朝只今遂自殺訇、而搔切腹十文字倒死、實廿九歳也、此間義朝遁虎口、同月廿九日、有大炊之弟鷲栖玄光者、假憑之爲指南、著尾州野間内海、宿長田莊司平忠宗之家、翌朝欲請乘馬赴東國、忠宗曰、迎陽春過三日、則窮困少復、待其時進發可乎、強以扼留、不知僞謀而緩然休息焉、

35 「御譜中　義朝傳」

永暦元年庚辰正月三日、忠宗營湯殿進沐浴、金王丸持義朝之劍、除塵垢潔皮膚、而請湯衣不進献、金王丸腹立之餘走出求之之際、勇士三人已入湯殿之内、刺殺義朝矣、實三十八歳也、金王丸忽歸參殺戮三人勇士、鎌田兵衞尉政家應忠宗之招、往其座席、則酌盃酒、此間聞件變事、乘欲立去之期、酌取之男抜刀飛懸、政家捕其男奪取刀刺二刀、則忠宗之長男先生景宗斬政家之首、實三十八歳也、金王丸與玄光斬戮數多士卒、而忠宗父子遁隱、故不得誅戮、乘忠宗之肥馬二人共落去矣、

36 「島津家譜中　頼朝公傳」

平治元年己卯十二月廿七日、嚴親義朝之軍敗、欲退去東國之路、經江州勢多於暗夜、因終日軍勞、睡眠於馬上、從野路邊後義朝列、少焉睡覺見前後、而無同列、任馬只一騎打入森山之宿、則當宿市人怪以出來、其中源内兵衞尉眞弘者、著腹巻持長刀進來、而取付我之馬口曰、可爲落人止焉、已欲抱下、忽抜髭切打割眞弘眞向於二、即以倒死、又一人續來有取付馬口者、是亦自籠手覆切落焉矣、其外數多市人畏其害也、無近來者、以故遁虎口過當宿、

出于安川原、則逢鎌田兵衞尉政家尋我返來、而走馬追迄義朝之列、義朝問所後于行列之故矣、吾報件次序、則慈父感若年如此顯勇氣、而後行路急疾之際、有敵兵堅固守不破關之聞、是以從小野宿經邊路赴小關、白雪滿天漸埋山野、且復非馬蹄之所往還、於茲乎各拔捨甲冑、下馬徒行、故不能行步、而十二月廿八日夜暗後父兄、只一人迷雪路、不知方所、任足以經山野、不行小關方、而到稱小平山寺之麓、丁欲入小舍之時、村人有言曰、雖爲一人止得落人、献六波羅欲與勸賞云爾、由是退去其地、漸到浅井北郡、彼此彷徨之際、會一老尼之有愛情、而攜入吾於私宅、老夫亦同意懇志不浅、匿置王正一月於陰所、白雪粗消、則欲赴關東、謝數日深情、出老人宅、如前日將過小平之地、則懼里人之怪吾、是以無徑路附谷川、窺顧前後臨視左右、行步不快、于時逢一鵜飼之臨川流事漁獵、欲疾行步以過其地、時鵜飼曰、爾是何處人乎、所無徑路到此川邊、懼人目竄身體吾能知焉、言姓名與其故、則吾爲指南往公之所志云爾、賴朝能見得鵜飼深情所不僞之有氣象、而不匿其故詳以言之、於茲乎、鵜飼設奇計、令吾改裝束爲女子容儀、包太刀於菅葉、鵜飼手提之、而相具以到于青墓宿長大炊之宅矣、鵜飼今日歸我之里矣、（賴朝日域）東西悉入手裡、而建久元年庚戌十一月始上洛之時、近江州、而微淺井北郡老翁、忽以夫婦參候旅館、賜馬二疋（白鞍置之）入重寶長持二合矣、又進息男具之、而後為足立猶子、称足立新三郎清恒為近習士也、又微鵜飼、謝昔年懇情、以賜小平之地者也、延壽不斜悅喜、而入夜叉御前居所、進盛膳盡懇志、雖然不可往關東亦不疾、是以預髭切於大炊、出青墓宿已到于關之原、則平清盛之弟、尾張守賴盛家人、弥平兵衞尉宗清率數多之騎歩、自尾張赴京師、懼衆人之中有見知我者、入林間竄一身、而宗清怪之、忽以使從者囚吾、平治二年庚辰（即永暦元年也、）二月九日相具於吾、到於六波羅、則爲宗清之預、是以尾張守之小士、有丹波藤三國弘者、附置渠於吾矣、待今明誅戮時日之際、宗清曰、欲死乎、欲生乎、吾答曰、欲生也、其故何者、去保元合戰之時、殺數多叔父一族、今度合戰喪慈父及兄弟數多、有宥死罪一等者、爲僧法師思吊父祖後世云云、宗清深哀之、而告清盛継母、賴盛直母池禪尼、欲救賴朝、且謂賴朝容儀禪尼愛子、先是早世不違右馬助家盛、禪尼天性匪啻專慈悲、聞賴朝之似家盛、偏思救之許諾、而後使小松左馬頭重盛、請賴朝之死罪恩免於清盛、清盛不可、禪尼落涙歎息之餘、再副賴盛、而達清盛、即不及辭諾返答、而延十三日斬戮之定期、累晝夜運思慮、而後隨継母言、宥死罪爲遠流、定配所於伊豆州也、

池禪尼喜訴之不空、招賴朝於私宅、告配所之定伊豆州、而且懇志非言之得而所述、永暦元年庚辰三月廿日曉天、出池殿赴東路也、

37 「正文在長谷場氏」

若宮不断經衆僧兼賢解　申請　御庄政所裁事

言上二箇条愁狀

一請被殊任本師快賢大徳遺言、年來所令耕作田畠於今年始爲肥後殿押妨子細狀、

右、謹検案内、故本師快賢大徳沈病床、及万死一生之時、私領乃田地書別弖、讓与肥後殿給時、被仰云、於讓狀之外田共者、円如房与兼賢相互尓不成妨壱弖、兩人可耕作之由、遺言早、於證人者、讓狀書給禪明房眼前尓坐處也、仍円如房毛於兼賢之作田者、年來不被成妨、又兼賢毛不成妨、是即遺言有限故也、就中於兼賢之自作之坪者、從本師在生之時給弖所耕作也、而今年始爲肥後殿、讓狀之外乃由(田カ)於被押取之条、且背快賢大徳遺言、且似任我意者、法家之習、師長之物、於弟子之請次事、田舍洛陽定方也、本師毛存此旨弖、円如房与兼賢讓狀之外田波可耕作之由遺言了、是肥後殿之方可成加良牟尓讓狀不入給哉、道理又然也、

一請被同任道理裁定、本師快賢大徳存生時所付属小法師字菊賀丸加身於不令服仕子細狀、

右、件小法師者、快賢大徳存生之時、遺言云、於此小法師者令生長弖、闕伽水可令汲之由遺言了、於實否者、小法師之母女并円如房被召問尓無其隠歟、仍任道理、爲被裁定、言上如件、以解、

永暦二年三月　日　　僧兼賢上

前年ニ当ル

一永暦元年庚辰三月十一日、頼朝配流于豆州蛭小島、

一頼朝公ノ兄悪源太義平ハ、永暦元年正月廿二日、於六條川原被斬、

38 『在清水臺明寺』「ロウラニ」「盗切竹申牒」

國牒　臺明寺衙

欲被早任府宣、且令参府、且令参上國廳、陳申子細、藏人所召物使惟宗眞忠訴申二箇条内子細狀、

牒、今月十八日府宣同廿八日到來偏、一臺明寺青葉笛竹爲住僧等恣切用奉穢事云々者、件笛竹之事、且任府宣、且令参廳、可陳申子細如件、以帖(ママ)、

永暦二年八月廿九日　　目大中臣在判

國司代勾當源在判　　權大掾建部在判

　　權大掾檜前

39　『写本在清水臺明寺』

佛子眞寂謹辞　讓与字不動丸田畠事

合

田地陸段

在桑東郷一条二里字竹原田陸段者

四至東限三昧堂峯　南限三昧堂田大縄
　　西限大河　　北限三昧堂峯

畠地壹所

在同郷葦上村字古川薗者

四至東限主丸田　南限主丸田
　　西限三昧堂田　北限三昧堂薗垣根

右、件田畠等、依為主丸先祖相傳私領、子息不動丸所讓与實也、但致本役公事者、本名留了、雖然、為母於不致教養子息者、為母沙汰、可領知之狀如件、

應保二年四月二日　　佛子眞寂(花押)

「口裏ニ在リ」　　嫡子紀助房(花押)

「進了」

40　『臺明寺文書』

(外題)「任次第證文之旨、可下知之、(花押)」

大隅國臺明寺住僧等誠惶誠恐謹言　申請　大宰府裁事

請被殊蒙　鴻恩、任正八幡宮執印故行賢寄文狀、依代代國判旨、停止當郡住人篤房謀略非理沙汰子細狀、

副進

調度文書等案

右、謹檢案内、臺明寺無依無怙往古靈崛、山修山學聖跡、精蘆草創以來、不知幾許、但　天智天皇御宇之時、被定篦竹貢御所後、逕四百餘歳根本大伽藍也、住僧等雖邊鄙、顯也崇持天台教迹、瑩四教三觀利劍、　密也傳授眞言秘術、挹三密五瓶智水、　宰府為佛法、盍賜裁下哉、焉正八幡宮執印故行賢大徳、為紹隆佛法、買取篤房之祖父篤定并檜前篤季之田地在當山膀至内、相副本券、當山毎年二季彼岸之勤并燈油粉寄進貳町陸段田地、又以年來傳領戒勢之田薗、當山三箇日夜不断常行三昧粉薗壹所并田地陸段、同以寄進畢、其後七十餘箇年之間、敢無他沙汰、隨代代國司被加免判畢、國衙在廳郡司等皆悉所承知也、其旨見於調度文書等、而今篤房雖為篤定末孫、不受継郡司職、私訴阿多平權守忠景、以彼之武威、乍置相傳郡司、

分領半郡事、僅及四五箇年之間、謀計之心甚、欲分取逕多年寺領田、於有限本券田地之頗廣、稱新開加作之由、今申成府判、始分取寺田、或押領四至有限寺薗之條、非理沙汰也、誑惑之甚也、就中於彼岸田燈油田者、臺明寺牓至内也、他領田地全不相交、設雖加作新開、牓至内全不可有篤房之沙汰乎、而牓至内燈油田壹段者、今年春既分取畢、兼又以之爲元起阿黨、住僧等不令切山木、不令苅野卉、於曠野所耕殖物等一一押取、不与山之本作人、京都仁波本寺叡岳、鎭西仁波本山内山、被崇國内、被祈郡内、雖然聖朝外朝國司郡司、全不令制止山野草木等乎、以之思之、篤房一人非例非法也、加之篤房違代代國判、背往古舊記、狩牓至内禁野、殺伽藍邊猪鹿之條、付冥付顯、有危有過者也、又去去年篤房之所進府解狀偁、篤房先祖有指宿願、申請國司、以私田薗寄進臺明寺云々、是大無實也、大虚妄也、其旨見於故行賢寄文狀、以一推万、誑惑甚也、宰府依不令知案内、於彼解狀被成御外題欤、但御外題仁波但可付證文云々、未敢定判御外題也、臺明寺公驗寄文證文明白也、篤房者、不帯一紙書狀、不取出可爲證文指本公驗、而於四至有限寺領田薗押分取之條、實以罪科不輕乎、望請　鴻恩、且爲佛法、且任實正、令停止篤房之條條非法一一誑惑給者、捧恒例不退佛事之功、忝奉祈　府國安寧之由、靜念誦讀經勤行之心、高奉仰正理憲法之貴、以解、

應保二年五月十五日　　臺明寺住僧等謹上

大法師「覺心」
大法師「弁海」
大法師「教意」
大法師「範耀」
大法師「長慶」
大法師「勝賀」
大法師「源豪」
大法師「源耀」
大法師「賴暹」
大法師「遍覺」

「在口裏」
「臺明寺住僧解　大符御「スルヽ」外題」
「此原書、旧御番所御文書二番箱中ニ一巻アリ」

41　『臺明寺文書』
（前号文書ト同ジ）
（花押）

下　大隅國雜掌

可任次第證文旨、令停止篤房妨、臺明寺住僧等訴申當寺四至内作田等事、

副下調度文書等

右、得臺明寺住僧等解狀偁、謹検案内、臺明寺者、無依無怙往古靈崛、山修山學聖跡、精蘆草創以來、不知幾許、且天智天皇御宇之時、被定箆竹貢御所後、逕四百餘歳根本大伽藍也、住僧等雖邊鄙、顯也崇持天台教迹、瑩四教三觀利劍、密也傳授眞言秘術、挹三密五瓶智水、宰府爲佛法、盍賜裁下哉、焉正八幡八宮執印故行賢大徳、爲紹隆佛法、買取篤房之祖父篤定并檜前篤季之田地在當山膀至内、相副本券、當山毎年二季彼岸之勤并燈油粁寄進貳町陸段田地、又以年來傳領戒勢之田薗、當山三箇日夜不斷常行三昧粁薗壹所并田地陸段、同以寄進畢、其後七十餘箇年之間、敢無他沙汰、隨代々國司被加免判了、國衙在廳郡司等、皆悉所承知也、其旨見調度文書等、而今篤房雖爲篤定末孫、不受継郡司職、私訴阿多平權守忠景、以彼之武威、乍置相傳郡司、分領半郡事、僅及四五箇年之間、謀計之心甚、欲分取逕多年寺領田、於有限本券田地之頗廣、稱新開加作之由、今申成府判、始分取寺田、或押領四至有限寺薗之條、非理沙汰也、誑惑之甚也、就中於彼岸田燈油田者、臺明寺膀示内也、他領田地全不相交、設雖加作新開、膀示内全不可有篤房之沙汰乎、而膀示内燈油田壹段者、今年春既分取畢、兼又以之爲元起阿黨、住僧等不令切山木、不令苅野卉、於曠野所耕殖物等一一押取、不与山之本作人、京都仁波本寺叡岳、鎭西仁波本山内山、被崇國内、被祈郡内、雖然聖朝外朝國司郡司、全不令制止山野草木等乎、以之思之、篤房一人非例非法也、加之篤房違代代國判、背往古舊記、狩膀示内禁野、殺伽藍邊猪鹿之條、付冥付顯、有危有過者也、又去去年篤房之所進府解狀偁、篤房先祖有指宿願、申請國司、以私田園寄進臺明寺云々、是大無實也、大虚妄也、其旨見於故行賢寄文狀、以一推万、誑惑甚也、宰府依不令知案内、於彼解狀、被成御外題欤、但可付證文云々、未敢定判御外題也、臺明寺公驗寄文證文明白也、篤房者、不帯一紙書狀、不取出可爲證文指本公驗、而於四至有限寺領田園押分取之條、實以罪科不輕乎、望請鴻恩、且爲佛法、且任實正、令停止篤房之條々非法一々誑惑給者、捧恒例不退佛事之功、忝奉祈府國安寧之由、靜念誦讀經勤行之心、高奉仰正理憲法之貴、以解者、如證文者、事爲功徳、早停止篤房妨、可令勤行恒例佛事之狀如件、

應保二年十月廿九日

少監惟宗朝臣（花押）
大監大藏朝臣（花押）
大監紀朝臣（花押）
大監大藏朝臣（花押）
大監藤原朝臣（花押）
監代大中臣朝臣（花押）
監代紀朝臣
監代藤原朝臣（花押）
監代御春朝臣（花押）
監代豊嶋
監代紀（花押）
監代藤原（花押）
監代紀（花押）
監代清原（花押）
監代源（花押）
監代紀
監代紀（花押）
權大典藤原

「此原文ハ、旧御番所御文書二番箱中ニ一巻アリ」

42

『写本在清水臺明寺』

臺明寺大衆等解　申請　國裁事

請被殊蒙　恩裁、任府宣旨、賜國判、藏人所召物使笠重實巧无實、住僧等稱切穢貢御笛竹、依度度云煩寺家、永停止彼非理沙汰子細狀、

右、謹検舊記、當山者无緣孤獨靈窟、朝庭鎮護道場也、爰天智天皇御宇之時、被定笛竹貢御所後、逕四百餘歳根本大伽藍也、自往古以來、興隆佛法地、廣作佛事砌也、然藏人所召物使笠重實、以永暦元年秋之比、爲奉切備笛竹、参上當院時、巧誑惑謀計、稱切穢篦竹、云煩寺家之處、既請神祭畢、其後猶以不懐心、申成府宣、令付當山府使字五郎大夫、依令勘責過析、住僧等可令停止彼御藏（ママ）重實非例濫行由、蒙府裁處也、望請、國衙宜承知、被停止彼非法狼藉者、住僧等弥以恒例不退善根、必奉祈聖朝府國安隠（ママ）泰平由、仍勒子細、以解、

應保三年二月十日　　臺明寺住僧等上

大法師「弁海」
大法師「教印」
大法師「節耀」
大法師「勝賀」

大法師「源豪」
大法師「遍覺」

43

『正文在水引權執印』

新田宮先執印桑田信包謹言

押書事

右、件押書根元者、宮御領市比野浦公験等、以去年五月中旬之比、爲沙汰隨身令參洛之處、指無御沙汰之間、件浦御公験等、留守御房ニ進上畢、然彼公験依不隨身下向、難遁諸司等勘發者、於公験者、令參洛、本家申返、如本可令進宮之狀如件、

長寛二年六月一日　　己丑主世(ママ)僧(花押)

先執印當時五大院主桑田(花押)

44

「七十八二條帝」

永萬元年乙酉春、爲朝年二十八、流南島、莫不服者、

45の1

『古板在梅北西生寺山王社内其大方五寸許』

仁安三年歲次丁亥三月二日庚子造立之、

爲大施主旦那散位伊朝臣兼高并

藤原氏息災延命諸人快樂

殊致精誠所造立如件、

右誓願大悲中　一人不成二世願

□虚妄罪垢中　不還本覺捨大悲

『右出於仁王朽躰云』

45の2

「伊地知季安考」

右やう檜板にかき、先年西生寺の仁王像の朽損したる躰内より露ハれ出けるとなん、前に載せたる帖佐士人安樂氏に藏めし弘安元年戊寅八月再建の銘に、庄衙の御願として、當寺を仁安二季歲次丁亥尋譽聖人造立之大願主當檀那伴朝臣兼高也、と記せるにも能く符合し、疑もなき當寺開基の時造れる仁王の躰内に銘し納めたる小板の古物にて、細字なれとも、仁安丁亥より今とし天保癸巳まて六百六十七年、尚文字も大概よまれて、當寺の什寶となるハ、寔に珍奇ならすや、但し板に三年とかきしハ二年の誤なるべし、

46

『写本在臺明寺』

(外題)「下　留守所

件佛聖燈油析田貳町陸段検田入部、永可令免
除之狀如件、　　大介中原朝臣(花押)」

臺明寺住僧等解　申請　國裁事

請被殊蒙　鴻恩、永停止當山二季彼岸勤并燈油析田貳
町陸段毎任検田入部子細狀、

右、謹検案内、臺明寺者、無依無怙往古靈堀、山修山學
聖跡、精廬草創以來、不知幾許、但神武天皇御宇之時、
被定箆竹貢御所、根本大伽藍也、住僧等雖邊鄙、顯也崇
持天台教迹、瑩四教三觀利劍、密也傳授眞言秘術、挹三
密五瓶智水、惣者奉祈　聖朝外朝天長地久之由、別者奉
禱當國當任万歳千秋之誇、而代代検田使等、於不幾田地、
致勘益勘出、時時云煩住僧等之條、難堪之愁也、仍且爲
佛法、且爲祈禱、始自當御任、限永代令停止件検田入部
給者、正理憲法之聞、遙施朝野山里焉、就中間傍例尋舊
跡、當郡止神御領田者、号居執而從昔以來、被停止検田
入部、於彼社既有此事、於此寺何無免判乎、望請　鴻恩、
且奉爲玉躰安穩、且奉爲壽命長遠、近者爲現世、遠者爲
後世、令停止件検田入部給者、捧恒例不退佛事之功、忝
奉祈　府國安穩之由、靜念誦讀經勤行之心、高奉仰　正
理憲法之貴、以解、

嘉應元年十月九日　　臺明寺住僧等謹上

大法師「春有」
大法師「行西」
大法師「良兼」
大法師「安源」
大法師「弁禪」
大法師「覺心」
大法師「教意」
大法師「勝賀」
大法師「源豪」
大法師「遍覺」

47　『比志島氏文書』正本家蔵

入道西念譲渡

□(薩)摩國満家院内限四至字八郎大藏義平處分事

四至

東限由須乃木乃中尾大路　南限土土呂木限満家迫
西限面松并結松行元頂乃藤山　北限千加尾峯頂

右、件所領田畠、入道西念之相傳譜(ママ)諦私領也、然而其内子
息等三人、令處分之内、自土土呂木上、限四至阡陌、限

永代可領掌之由、大藏義平所讓与也、以此手次讓狀、調備公驗、無他人之妨、可領知也、子息等各一味同心、任處分帳、可領作之狀、所讓渡如件、

承安二年十二月八日　　本領主入道西念在判

48

『写本清水臺前寺文書ニアリ』

（外題）「代々國判明白也者、早可停止件坪々検田入勘之狀如件、勘濟使散位藤原（花押）」

臺明寺住僧等解　申請　國裁事

請被且依代代國判、且賜當任御判、備後代證文、停止當山二季彼岸田并燈油析田等坪坪検田使等入勘子細狀、副進代々御判等

右、謹検案内、當山者、是無依無怙往古靈堀、山修山學聖跡、精蘆草創以來、不知幾許、但神武天皇御宇之時、被定箆竹貢御所、根本大伽藍也、住僧等雖漫鄙、顯也崇持天台教迹、瑩四教三觀利劍、密也傳授眞言秘術、挹三密五瓶智水、惣者奉祈聖朝外朝天長地久之由、別者奉禱當州代代國吏千秋万才之誇、而代代検田使等、於不幾田地、致勘益勘出、時時云煩住僧□（等之）條、難堪之愁也、仍且爲佛法、且爲祈禱、代代國吏御□（判）明白也、因之、限永代令停止件坪坪入勘給者、正理憲法之聞、遙施朝野山里焉、就中問傍例尋舊跡、當郡止神御領田者、号居執而從昔以來、被停止検田入部、於社（彼脱カ）既有此事、於此寺何無免判乎、望請　鴻恩、且奉爲玉躰安穩、且奉爲壽命長遠、近者爲現世、遠者爲後世、令停止件検田入部給者、捧恒例不退佛事之功、忝奉祈　府國安穩之由、靜念誦讀經勤行之心、奉仰　正理憲法之貴、以解、

承安三年十一月十五日

大法師「安覺」
大法師「春有」
大法師「良兼」
大法師「弁禪」
大法師「辨勝」
大法師「辨海」
大法師「勝賀」
大法師「源豪」
大法師「源耀」
大法師「遍覺」

49

「正文在長谷場氏」

僧兼賢謹言

改書字房前小田子細事

右件田、寄猴之詫宣云、依令耕作前田、本師香禪御房、成怨弖令付病悩給也、件田尼上渡進給ハヽ、日内令平喩病患弖、不可有害云々、仍書渡文弖、尼上尓雖渡進、不加證判、其故波、令除喩病悩、命生給畢波、加證判永可渡進、虚言奈良波無益也登思故也、而其後雖經數月、不令平喩病患、於今者決定必死也者、死去畢波、兼賢之門跡之中、可令耕作件田、尼上之所持之渡文、全不可用處也、付中彼渡文者、只名許波雖書付、不加證判、仍不能證文者云(之カ)狀如件、

承安三年閏十二月七日　　僧在判

50　「富山氏文書」

「御使下家司源(花押)」

□(御カ)庄政所下　百引村

定遣弁濟使職事

勾當僧安兼

□(右)人、爲彼職殊致勸農、爲令勤仕庄國□之課役、所定遣如件、住民等宜□(承知)□、用之、故下、

承安五年八月十四日

別當伴朝臣

別當伴朝臣

別當伴朝臣(花押)

別當柒嶋宿祢(花押)

別當藤原朝臣(花押)

別當藤原朝臣(花押)

別當藤原朝臣

別當執行藤原朝臣(花押)

別當柒嶋宿祢(花押)

別當執行伴朝臣(花押)

51の1　「加治木桑波田氏藏」

右近衛府牒　薩摩國衙

欲被早任先例并傍例、停止相撲人大秦元光先祖相傳所領田畠、爲家道・重綱并國吉等、以非道致妨事、

使番長和氣光里　　火長二人

牒、得彼元光解狀偁、於件郡者、元光先祖元平去康和二年依貢節之功、始賜本府牒、補郡司之後、迄于元重、帶代代府牒并宣旨等、知行郡務來之間、去應保年中、敵人家道構取國司廳宣、知行僅四箇年也、然而任道理、元重

如元還補畢、其後元永請継彼職知行之間、去承安二年比、敵人重綱以野心致濫訴之刻、以問注狀、被問法家時、法家勘判明鏡也、絶家道・重綱愁緒之處、今又國吉出來、名田之致妨之條、無其謂、何況元光去年依貢節功、任手継相傳代代文契理、注子細訴申本府之時、同九月日賜府牒、同十月十九日賜　宣旨之後、郡内田畠山野併無相違可知行郡務之處、郡内云親云疎、濫行爲先之輩有其數、因茲元光于今不安堵之條、愁緒之至、無道之甚、何事如之、然則賜本府御下文、任道理停止件家道・重綱并國吉等乱行、元光如本欲遂安堵計焉、望請府裁、任道理賜御使、停止親疎横妨等、無相違知行郡務、遂安堵者、弥仰奉公之貴矣者、府加覆審、所申有實、任先例、早被留家道并重綱乱行、早被停止國吉田畠相論之妨、元光如本任先祖相傳理、令領知件田畠、且任先例并宣旨、同代代證文等理、可知行牛屎郡司職之狀、依　大將宣、牒奏如件、以牒、

安元元年八月　日　　正六位上將曹惟宗「清景」

正六位上將監多「好方」

正六位上將監秦「兼頼」

正四位下行權少將皇大后宮權亮藤原朝臣（花押）

（「右近衛印」三アリ）

51の2

「伊地知季安考」

上東門ノ脇ニアルヲ左近衛府ト云ヒ、上西門ノ脇ヲ右近衛府ト云コト、拾芥抄ニアリ、此府ニ大將・中將・少將・將監・將曹・府生・番長等ノ官員アルコト職原抄ニ見ヘタリ、斯テ膂力之士ヲ領ル掌ナリシニヤ、　仁明帝ノ時ニ當テ、左近衛ヨリハ阿部ノ根継、右近衛府ヨリハ伴ノ氏長ト云モノ相撲ノ最手ニテ、天下無雙ナルコト、三代實錄四十九ニ出タリ、又隼人等カ相撲ヲ天子覧玉ヒシコトモ歴史ニアレハ、大秦元光ハ右近衛府ニ属キタル相撲人ナリト見ヘタリ、此安元元年ヨリ二十三年アトナル建久八年薩摩ノ圖田帳ニ據レハ、牛屎院三百六十町ノ内、永松二百四十町ノ下院司元光トアレハ、其町員ヲ領知セシモノナルヘシ、又同院ノ内、幸万五十五町島津御庄弁濟使トアルモ、元光領知セシカ、文治三年五月御下文ニテ併セ知ルヘシ、如此元光カ高祖元平カ時、依貢節功康和二庚辰年　堀河帝ノ御宇、右近衛府ヨリ牒ヲ賜テ、此牛屎郡司ニ補セラレ、其子左衛門尉元包、其子元重迄、代々ノ府牒并ニ宣旨ヲ以テ職ヲ襲キ來ケル内ニ、應保元年ヨリ三年迄ノ間ニ、家道ト云モノ國司ニ手ヲ入レテ聽宣ヲ申請テ、僅カ四ケ年許ハ知行シタレトモ、道理ニ叶

ハヌコトニテ、本ノ如クマタ元重ニ補セラレ、其子大夫判官元永其職ヲツキ勤ケル時ニモ、承安二壬辰ノ頃、重綱ト云モノ、又道ナラヌ訴ヲ申立タレトモ、明法博士ニ御吟味アリシニ勘ヘテ、重綱カ非據ノ申分ナルコトヲ明ニ申上ラレタレハ、元永ガ利運ニ究レリ、左アリテ其子民部元光モ亦貢節ノ功アリ、且先祖代〻手ツキノ證文ノ赴キヲ細〻カキ立テ、承安四年近衛府ニ訴申ケレハ、其年九月府牒ヲ賜ヒ、十月十九日宣旨迄モ賜テ、郡内ヲ相違ナク知行セシニ、院内ノ光武五十町ヲ領セシ名主九郎大夫國吉、田畠ニ相論シテ元光モ安堵スルコトヲ得ザレバ、如此申分ヲセシト見ヘタリ、所謂元光カ解狀トハ此ナリ、本文ニ元光先祖元平云〻ヨリ、奉公ノ貴矣ト云迄カ解狀ノ文ナルヘシ、者府加覆審ヨリ以牒迄ハ、右近衛ノ少將ナル人、右近衛ノ大將ノ下知ヲ受テ、此成ユキヲ高倉帝ニモ奏聞シテ、一先ツ右近將監兼賴等ヲシテ、糺方ヲ右近衛府ノ番長セシ和氣姓ノ光里、其頃府使トシテ、火長二人ト薩摩ノ國衙ニ下リ居レルニ仰セ渡サレシ牒ナルベシ、御朱印ヲ朱印牒ナドカケルカ如シ、但シ家道ハ山門院司ニモアルカ、秀忠曽孫ニ家泰ノ家忠ノト云アリ、重綱ハ小城八郎重道也、菱刈六郎重俊等カ族類カ、光里詳カニ聞合セテ、弥元光カ申通リニ實ナラハ、家道抔カ乱行ヲ差トメ、國吉カ田畠ノ論モ停止シテ、元光ニ先祖代〻證文ノ牛屎ノ郡司ヲハ、本ノ如ク知行セヨトノ赴ナリ、右近衛府ノ番長ハ、近衛舎人ノ内ヨリ撰ミ用ヒラル、コト職原抄ニアリ、火長ハ令義解ニ、凡役丁匠皆十人、外給一人充火頭、火頭ト云ハ斷丁也、炊爨ノコトヲ執レハ、火頭ト云、斷ハ使ノ如シ、左右衛門式ニ凡左京ノ非違ヲ検使スルモノ、佐一人、尉一人、志一人、府生一人、火長九人ト云リ、

52

「仝家蔵」

右近衛府政所下　薩摩國牛屎郡相撲人大秦元光并府使光里等

可早任道理、停止國吉妨田地并刈取田貳拾伍町參段事、

右、得去二月日元光并府使光里等解狀偈、云〻具、而件元光田地、以去去年可停止國吉妨之由、被　宣下畢、而彼國吉或相語國衙在廳官人等、或相語嶋津庄官等、恣去年秋刈取作田毛稲之由、有其聞、事若實者、且任道理、且任先日下知之旨、停止彼國吉妨、早可糺返件刈取稲之狀、依　大將宣、所　仰如件、敢勿違失、故下、

「安元元年ナラン」

安元三年四月　日

權中將藤原朝臣（花押）

將曹惟宗朝臣「清景」
將監藤原朝臣「定經」
番長中臣宿禰「近成」

（「右近衛印」三アリ）

53　「富山氏文書」

□（御カ）庄政所下　百引村

定遣弁濟使職事

勾當僧安兼

□（右人）爲令執行一事已上、所□（定）遣如件、部内宜承知用之、

□（故）下、

安元元年十二月　日

別當伴朝臣（花押）
別當伴朝臣
別當伴朝臣（花押）
別當柴嶋宿祢
別當藤原朝臣（花押）
別當藤原朝臣（花押）
別當藤原朝臣（花押）
別當執行藤原朝臣（花押）
別當柴嶋宿祢（花押）
別當執行伴朝臣（花押）
目代散位伴朝臣（花押）

54の1　（本文書ハ五一の一号文書ト同文ニツキ省略ス）

54の2　（本文書ハ五二号文書ト同文ニツキ省略ス）

54の3　（本文書ハ一一六号文書ト同文ニツキ省略ス）

54の4　珎敷古文書拜見被仰付、誠ニ御蔭を以得と巻舒仕候、訓点之事蒙命候へ共、浅陋中〳〵難解、御受も難申上、然共玩古之僻不顧御笑、如愚按眞文字寫取、点付且愚考之あらまし標注にして、誤のミ可有御座乍存、備御笑覧申候、匆〻書ちらし、御覧ニも御煩敷御座候半、清寫差上度奉存候へとも、師走取込此成上候、相良前史翁なとへ御吟味御頼被下、御正教可被下様御取計、此冊ハ早目又御恵返し可被下候、外ニ摸寫不調候まゝ、可成ハ別紙も拜領仕度ものニ御座候、縷〻拜眉可申上候、不具、

季安拜

55 「富山氏文書」

（伊集院）兼誼先生
玉几下

□嶋津御庄
補任百疋村弁濟使職事
勾當僧安兼
（右カ）□人任相傳文書之理、補任彼職畢、庄衙宜承知、敢勿違
失、故下、
安元二年七月　日
（守カ）□沙弥（花押）

56 『写本在清水臺明寺』

謹言
起請
臺明寺四至内不可狩由事
右、任先祖親父起請之旨、重令起請了、若違背此旨、於
令狩之輩者、召誡其身、可行過怠之狀、起請如件、
安元二年八月廿九日
權掾藤原篤持
散位藤原篤道在判

57 「八十高倉帝」

治承元年丁酉、平判官康頼・丹波少將成經・僧都俊寛流
于鬼界島、

58 『權執印文書』

御判有
納　新田宮所司所課染絹内事
合貳段内　一段紺矢汲絹文　覺遇進
一段紺中星文　從秀進
右、件宛廻色〻絹内、且所進検納如件、
治承元年十一月五日　權寺主大法師
散位藤原御判

59 「權執印文書」

（秀カ）大乃謹言
渡進相傳從女字乙前身事
右、件從女、牟木次郎貫首殿仁、限永年所渡進也、可令無
他人妨服仕、仍不可有後日□（ママ）化四府検校友次娘也、
爲後日、以解、
治承元（ママ）十二月十三日

検校僧靜秀判

治承四年庚子四月廿七日壬申、一院第二之宮、三條高倉御所、賜令旨於頼朝、今日到著于伊豆州北條館、八條院藏人行家所持來也、爰上野介平直方朝臣五代孫、北條四郎時政者、當國豪傑也、以爲其壻專顯無二忠節、故招時政所以披令旨也、其令旨曰、

下東海東山北陸三道、諸國源氏并群兵所、

應早追討清盛法師并從類叛逆輩事、

右、前伊豆守正五位下源朝臣仲綱宣、奉　最勝王勅儛、清盛法師并宗盛等、以威勢起凶徒、亡國家、悩乱百官萬民、虜掠五畿七道、幽閉　皇院、流罪公臣、断命流島、沈淵込樓、盗財領國、奪官授職、無功許賞、非罪配過、或召釣於諸寺之高僧、禁獄於修學僧徒、或給下於叡岳絹米、相具謀叛粮米、断百王之跡、切一人之頭、違逆　帝皇、破滅佛法、絶古代者也、于時天地悉悲、臣民皆愁、仍吾爲一院第二皇子、尋天武皇子舊儀、追討　王位推取之輩、訪上宮太子古跡、打亡佛法破滅之類矣、唯非憑人力之構、偏所仰天道之扶也、因之如有　帝王三寶神明之冥感、何忽無四岳合力之志、然則源家之人、藤氏之人、兼三道諸國之間、堪勇士者、同令与力追討、若於不同心者、準清盛法師從類、可行死流追禁之罪過、若於有勝功者先預國之使、兼御即位之後必隨思可賜勸賞也、諸國宜承知、依宣行之、

治承四年四月九日　　前伊豆守正五位下源朝臣仲綱

治承四年庚子八月十七日丁酉、三島社神事也、遣藤九郎盛長、爲奉幣之使社參、無程歸參矣、未時佐々木太郎定綱・次郎經高・三郎盛綱・四郎高綱兄弟四人參著曰、依洪水遲參也、各依遲參今暁佳時所空過也、雖然非可期明日、將今夜擧試義兵、北條時政率勇士、子時往山木、追討判官平兼隆及後見堤權守信遠也、

同月廿三日癸卯、頼朝自將率于三百騎、陣于相模國石橋山、當國住人大庭三郎景親・俣野五郎景久・河村三郎義秀已下率于三千餘騎精兵、同在石橋山邊、兩陣之間、只隔一谷而已、又伊東二郎祐親法師率於三百餘騎、陣於後山、已迄黄昏攻我者甚急、是以我之軍敗、至暁天逃于杉山中、而後同廿八日、自土肥眞名鶴崎、棹扁舟至安房國平北郡獵島、而後上總介廣常・千葉介常胤已下勇士悉以催促、

各候旗下、則同年十月六日乙酉、入于相模國、先陣畠山次郎重忠、後陣千葉介常胤、扈從軍士不知幾千萬也、未及營作沙汰、故以民屋假定宿館也、

治承四年十月十五日甲午、營作已成、入于鎌倉亭也、

61の1

一嶋津忠久御記云、忝も源之頼朝之御子頼家・實朝者、北條四郎時政息女二位殿之御腹當腹御事候、三男忠久と奉申は、比企判官義員之御妹、丹後之御局之御腹之御子なり、然ニ二位殿御妬深ニより、八文字民部太輔と申人ニ丹後之御局を給、妻として忠久をも養父八文字民部太輔か宿所に育ひ奉る云々、

文明拾四年卯月十八日　沙弥聖榮　年八拾五

61の2

「伊地知季安考」

一按聖榮姓山田氏、名忠尚、稱出羽守、五世祖忠継稱式部少輔、得佛公庶孫也、忠尚生於應永五年、多述舊聞著先古事、世所謂聖榮自記也、其記云、山城守殿馬飼所とて鹿兒嶋和泉崎ニ佐多殿近所へ御入遁候而、法名道聖と申、子息彦三郎殿同居住、夫よりして屋形も就折節御志し候也、伊集院彈正も當家之一道を山城守殿細ニ御存知之事候程嗜候事候、常々被參候、聖榮若時者鹿兒嶋へ參上仕、御奉公之際ニ和泉崎ニ參り、山城守殿へ御意を受、御恩を蒙る、如此雜談ニ付候而茂、此物語之所ヲ申候也、據此考之、聖榮所著多道聖之説也、道聖名忠朝、乃六世定山公之孫也、

62

「大成武鑑巻之二」

一嶋津清和源氏、本国薩摩、賜松平御称号、家紋丸ニ十文字、牡丹桐、

右大将頼朝男
源忠久三郎左衛門尉　大夫判官
従五位下　豊後守

母者比企判官能員妹、稱丹後局、文治二年正月賜嶋津(庄脱カ)御之總地頭職、八月築城薩摩國出水郡木牟禮住之、三年九月自頼朝將軍被與十文字紋、爲薩摩大隅日向三箇國守護職、以島津爲家號、嘉祿元年敍從五位下、任大夫判官、後爲豊後守、安貞元年六月十八日於鎌倉卒、號法名得佛、室者畠山次郎重忠女、

63の1

一酒勾安國寺云、童部之時分承候し程ニ、さたかならす候得共、存知之分令申候、抑當家御先祖忠久と申ハ、右大將頼朝之御子三男にて御渡候、御母ハ丹後之御局、比企の藤四郎かあねにて御渡候、懐妊候時、頼朝之御

臺二位殿と申ハ北條四郎時政かあね(ママ)、仍此二位殿之御はからひに、謀叛をもくわたて、天下ををし取て何事も二位殿之おほしめさるゝまゝにて候處、丹後の御つほねの御腹ニ御子有へきよし、其聞へ有ニよつて殊外御そねミにて、彼女房海ニしつむへきよし頻ニ被仰ける間、日向國へなかし被申へきにて、鎌倉を出させ給けるに、若男子ニ而あらハ道より御左右を申へしと、頼朝被仰下けるに、攝津國住吉にて御腹氣つかせ給ふ間、御宿を借候得共、住吉之習にて不淨之人ハ久しくいむ所にて候間、更ニ宿をかさす候程ニ、折節大雨にて候けるに、道の邊ニ平き大石候ニ御こしをかきすへ、軈而御産候ニ、男子にて御わたり候間、鎌倉へ飛脚を立此由を申、住吉之神主此由承、いそき御所をあけ候て入申候、御産候間ハ大雨にて候に、ミやうふ殿其あたりにそひ申て居て候ける間、當家ニハ野干殿と大雨を吉事ニせられ候由承候、彼石を御産の石とて此邊よりのほられ候年來之人ハ拜し申けるよし、老者共被申候し、然間男子之由頼朝被聞召候而被召返、八文字の民部太夫惟宗の廣言あつかり申て養育申候、同丹後の御局をハ被給候て妻愛候云ミ、

63の2

「伊地知季安按」

一安國寺本姓酒勾氏、稱次郎、又稱右馬、事　恕翁公、年二十一、爲老名職、後削髪、事佛於薩州安國寺、薩摩守持久之相節山也、數問古事因著此書云、治承四年庚子十二月、營御所於鎌倉、局之妊、則在頼朝謫居豆州、時此云鎌倉、酒勾追書誤也、

64

「本朝武家系図諸氏部」

一藤原氏

遠宗

比企掃部允

頼朝卿伊豆御座時朝夕ヲ進セシ人也、

- 能員
  - 時員　比企弥四郎与市兵衛尉
  - 宗員　比企四郎
  - 女子　笠原十郎左衛門親重妻
  - 女子　中山五郎為重妻
  - 女子　糟屋藤太兵衛有季妻
  - 女子　頼家将軍妻
- 朝宗
  - 比企藤四郎新判官
  - 北條時政殺能員、
  - 比企藤内
  - 女房者御臺所ノ召遣
  - 越後局、
  - 若狭局　一幡君之母也、

65

「正統系図」

忠久

號島津、元祖也、左兵衛尉、宗兵衛尉、左衛門尉、大夫判官、豊後守、從五位下、惟宗朝臣、其後改惟宗氏、爲藤原氏、委曲所記于左條者也、

治承三年己亥誕生於攝州住吉、御母丹後局也、雖爲頼家・實朝之兄、不補家督以生他腹也、

傳稱、比企判官能員妹丹後局幸於頼朝卿、而有懐孕、頼朝卿妻平政子妬忌以遂之、丹後局畏其害、而治承三年己亥出關東赴上方到于攝州住吉、夜求旅宿、里人不許、時大雨甚暗、忽有産氣、乃入于社邊籬傍（西北之隅）、蹲踞于石上、會狐火之照暗、遂生男子、即忠久也、至今號其石稱産石、住吉末社有稲荷、蓋其夜狐火者、此神之助也、故號島津稲荷、島津家以雨爲嘉瑞者此故也、其後丹後局潜下向關東、以嫁惟宗民部大夫廣言、故忠久亦冒惟宗氏、然實頼朝卿之子也、廣言系圖粗有之、記左、未知是乎否、

惟宗民部大夫廣言者、嘗嗜敷島道云〻略ス、

頼朝初製十文字以爲旗幕之紋、而賜忠久、累世相傳、旗地白而其中黒書十字、幕地搗塵而白書十字、

當家文書未泯、而存者悉以載焉、毎書欲伸事理、而書數繁多、以故省焉、雖然不記其理、則有難覺知者、以言其理者亦間有之、共以如左、一門宗子枝葉譜亦僉以準之、

66

「島津國史」

得佛公（名忠久 姓島津氏 源頼朝長庶子也 幼字三郎 歴左兵衛尉 左衛門尉 大夫判官 任豊後守 叙從五位下 法名得佛道 阿彌陀佛）

初丹後局得幸於源頼朝有妊、夫人北條氏聞之怒、使人潜殺之、頼朝乃宣言、流局日向州、陰使其兄比企判官能員奉之以逃、而属焉曰、所生女也、則惟汝所處、男也、則以報於我、（拠山田聖栄自記）、行至攝津住吉社下、生男、實爲 得佛公、是歳治承三年也、會藤原基通謁社、因取公及局而歸、使告頼朝、頼朝名 公曰三郎、出局、嫁八文字民部大輔惟宗廣言、故 公從母畜於惟宗氏、（拠島津系図、島津譜略、市来次左衛門系図文書云、惟宗廣言者、惟宗親王之裔孫也、大父孝言、四品掃部頭施薬院使、以文章稱、本朝續文粋所謂散位惟宗孝言朝臣者也、廣言位至五品、善和歌、見千載玉葉集、按大日本史、源頼朝伝注、引島津家伝云、所作和歌、其為惟宗廣言壻冒姓惟宗、拠吉見系図、則某廣言之子、蓋公生、生髪未乾、從母氏畜於惟宗氏、冒惟宗姓、是以、頼朝下文及島津氏蔵東鑑、皆稱惟宗某、鎌於廣言之子、而吉見系図、遂以公為廣言之子、誤也、且島津氏家伝、殊無公為廣言壻之説、而大日本史、引島津家伝以為云云、則益繆矣、諸家大系図、藤原基通、大織冠鎌足十八世孫、大系図、大日本史皆言、基通天福元年薨、稱為近衛、又號普賢寺、

文治元年乙巳（是年八月改元文治、自七月以前猶是元暦二年、）夏六月十五日、源頼朝召 公於鎌倉鶴岡而見之、於是 公生七年矣、乃令

島山重忠加之元服、名曰　忠□、初任左兵衛少尉、拠島津譜略、前史氏謂、源頼朝開府時、愛惜名器、不妄仮人、且如北條時政、和田義盛、島山重忠、梶原景時之徒、並為當時功臣、而時政稱四郎、義盛稱小太郎、重忠稱次郎、景時稱平三、皆未叙爵、乃若公則今年纔七歳、即叙左兵衛少尉、蓋頼朝所以寵異公者、固非他人之可比矣、此説得之、是日、下文以　公為伊勢國須可御荘、波出御厨地頭職、拠得佛公旧譜、此響先題花押、造端便有下字、故稱下文、大日本史所謂授地領邑、或用花押者也、其説見下建久八年注、秋八月十四日改元、拠大日本史、十七日、下文以　公為島津御荘下司職、拠得佛公旧譜、按下文云、元暦二年八月十七日、蓋是年八月十四日、改元文治、而其事未達鎌倉、故下文仍稱元暦二年、諸國始置守護地頭、大日本史大江廣元伝、文治元年廣元議曰、世既澆季、姦宄日熾、東海道以幕府鎮壓、寧静無虞、他道遼遠、坐難防禦、屢起壞征、差發東兵、則軍需不已、民戸凋弊、不如及今國衙置守護、莊園置地頭、随發逮捕、則不労而自治矣、頼朝従之、後鳥羽天皇本紀、文治元年、法皇以頼朝請、置守護於諸國、以備盗賊、常賦之外、計畝課兵糧、自是兵權一歸頼朝、大平記云、自是守護重而國司軽、地頭強而領家弱、竊謂此事實係王室盛衰、世道升降之機、故特書之、續本朝通鑑、文治元年初置守護地頭、注、國衙荘園有國司領家、頼朝奏請初置守護地頭、掌國衙者曰國司、鎮護之者曰守護、領荘園者曰領家、巡按之者曰地頭、拠後漢書、所謂地頭銭、始有此名、貞永式目解云、領家謂公家領地者、亦称本所、按此云公家者謂簪纓家、与左伝謂公室為公家者異矣、是歳、

後鳥羽天皇即位之二年也、拠大日本史、

67

「西藩野史巻之二」

忠久公

父は源氏頼朝、長子也、頼朝年三十二にして公を生む、三十六にして頼家を生す、母は比企氏判官能員か妹なり、丹後局と稱す、治承三年己亥、公攝州住吉ニ生る、初頼朝伊豆國に在るの時、北條四郎時政か女政子を娶る、又丹後局を悦ふ、遂に孕む事あり、政子甚是を妬む、局其害を恐れ、従者數人と竊に豆州を出て丶遁る、攝州住吉に至る、日既に暮たり、宿を求む、邑人曰、羈旅の人を留むるは、邑の大禁なり、於是住吉明神に至る、忽兒を産せんとす、社傍西北の隅に石あり、是に踞して生む、治承三年なり、月日を詳にせす、或云十二月廿九日、是則忠久公なり、時に雨頻に降て東西を弁せす、適狐火前後を照し、其便を得たり、住吉の末社稲荷神あり、衆以為神狐火をして此兒を護する也と、於是稲荷を以て氏の神とす、伝云、稲荷神能く狐を役仕す、故に云爾り、按に此故を以て　忠久公封に就て、稲荷神神を嶋津庄島戸の邑元村也、に祭る、命婦殿と称す、今猶存す、後に山州紀伊郡三峯神社を薩州鹿児嶋に勧請し、稲荷大明神とす、倉稲魂神・瓊々杵尊・伊弉冊尊三神を合せ祭る、故に稲荷を以嶋津氏の鎮護神とし、雨を以瑞とす、後住吉神官等此石を嶋津誕生石と号し、墻垣を以是を圍ミ祭祀すと云、　夜既に明て関白近衛基通公近衛氏伝義弘公伝ニ在り、住吉神に詣て兒の啼を異しミ、人をして是を問しむ、局告るに實を以す、公是を憐ミ兒を收て歸る、以て頼朝に聞す、頼朝人を遣し兒を三郎と名付く、近衛氏に在る事數年にして、局竊に東州に還り、八文字民部太輔惟宗廣言に嫁す、伝云、廣言か妻ハ島山庄司重忠姉也、早く卒す、故に局を以て継室とす、局又一男を生む、三方兵衛尉忠季と稱す、忠久公若狭國を讓り、且島津氏を冒さしむ、故に若狭嶋津と云ふ、故に三郎君も又母に従て廣言か家に長す、因循して惟宗姓を冒す、

伝言、後に廣言薩州に来り、日州庄内に居す、子孫在り、又薩州に来り卒す、満家院厚地邑に葬る、又土佐國ニ移居す、子孫るの日、國分友成を養て子とす、友成市来氏の女を娶る、男を生む、政家と稱す、市来氏其先大藏政房、宝亀年中始て封を市来に受く、仍て氏とす、友成嗣なし、故に市来を政家に讓る、政家讓を得て市来を領し、且市来氏を冒す、立久公の時叛して除せらる、○又云、忠久公京を出て東州に之の日、近衛基通公忠久公着る所の直衣の菊閉を解き留て記念とす、後に政子忠久公廣言か家に在る事を聞き、見んことを欲す、公衆諸侯の児と嘗中に詣る、政子侍臣に問ふ、侍臣曰、菊閉なきの直衣を着の児是なり、後に忠久公奥州を撃つの日、頼朝公菊閉を加んとす、畠山重忠諫て云、近衛公是を解く、公ハ春日明神の冑緒也、　文治元年乙巳實に明神の解くか如し、加ふへからす、於是止む、

治承五年七月十五日改て養和元年とす、二年四月廿七日、寿永元年とす、三年四月十六日改て元暦元年とす、二年八月十四日、文治元年とす、

六月十五日、頼朝鶴岡八幡宮相模州鎌倉郡松岡に在り、祭る所の神石清水と同し、に詣る、三郎君を召て元服之禮を行わしむ、時に七歳、聖栄記に十三歳とするハ非なり、皇山重忠加冠す、己か名字を授て忠久と稱す、此日左兵衛尉に任す、頼朝鳩作短刀を賜て是を賀す、今猶存す、且伊勢國波出御厨須可御庄地頭に任す、又重忠か女第六の女也、母ハ本田二郎親恒か女、薨して二年寺僧寂翁追號して貞嶽院殿元光明一房と云、をして公の夫人たらしむ、八月十七日、頼朝忠久公をして嶋津御庄下司職に任す、　伝云、薩摩大隅日向を島津御庄と云、○按に三州ハ往古一國にして、日向國也、是を日向と號する事、日本記云、景行天皇十七十七年春三月幸子湯県、遊丹裳小野時東望謂左右曰、是國也直向於日出方故號其國曰、日向也、又按に神書久々天津彦々火瓊々杵尊崩地神三代、因葬筑紫日向可愛之山陵と云ハ、薩州水引郷八幡新田宮是也、元明帝和銅六年日向國を割て大隅國とす、○私云、三州を以て島津庄と云事、正史拠を知らすといへ共、我國の伝る所誣へからす、田中國明曰、文治二年四月三日頼朝公御教書嶋津庄の文に片紙を付て云、薩摩大隅日向の惣名也、字紙共に御教書の字紙に同し、是を以我國伝説の拠とす、愚謂頼朝公島津を以忠久公の氏とし、三州に封すか故に、初て嶋津を以て三州の名とするなるへし、

68

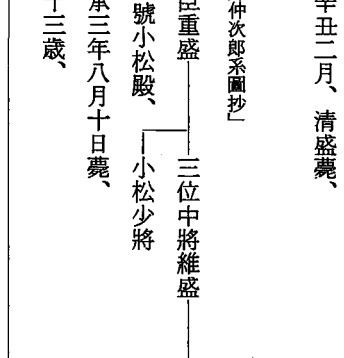
一治承三年己亥、島津忠久攝州住吉ニ生ル、母ハ比企氏、丹後ノ局ト云、初丹後ノ局幸ヲ源頼朝ニ得テ妊ムコトアリ、時頼朝伊豆ニ謫居ス、

一四年庚子八月、頼朝義兵ヲ伊豆ニ擧、十月鎌倉至、

一五年辛丑二月、清盛薨、

69

「佐多西方仲次郎系圖抄」



70

「忠久公御譜中」

小松七郎

賜大隅國祢寝郷地頭職、

平氏旗下士卒充満於伊勢志摩兩國矣、又爰熊野山衆徒等、

匪賊悪平相國禪門之煩驕奢、且偏所以關東繁榮之致懇祈也、以故先是、治承五年辛丑（即養和元年也、）正月五日以後、悪僧等亂入于夫兩國、爲合戰及度々、至于同十九日、浦七ヶ所悉以追捕民屋、由是平氏家人或捨要害之地、或無利而遂戰死、或被傷者多矣、衆徒乘勝、同廿一日、放火二見浦人家、攻到于固瀬河邊之際、平氏一族關出羽守信兼、姪伊藤次已下、相逢船江邊防戰移刻、于時悪僧之長戒光（字大頭八郎房）中信忠之箭、仍丁衆徒等引退二見浦之時、搦捕下女及少童三十餘人、同船解纜歸熊野浦云云、

71 「東鑑」

治承五年辛丑（七月十四日為養和元年、）十月十七日甲寅、御臺所并若公自御産所入御營中云云、比企四郎能員爲御乳母夫、奉御贖物、此事、雖有若干御家人、義員姨母（号比企尼、）當初爲武衞乳母、而永暦元年御遠行于豆州之時、存忠節餘、以武藏國比企郡爲請所、相具夫掃部允下向、至治承四年秋、廿年之間、奉訪御世途、今當于御繁榮之期、於事就被酬彼奉公、件尼以甥義員爲猶子、依擧申如此云云、

72 「全」

養和二年壬寅（五月廿七日為壽永元年、）三月九日己卯、御臺所御着帯也、常胤妻依仰、以孫子小太郎胤政爲使献御帯、武衞奉令結之給、丹後局候陪膳、

73 賴家

左衞門督　從二位　征夷大將軍

壽永元年壬寅八月十二日誕生、（字萬壽公、）母北條遠江守時政女、從二位平政子也、

74 『入來院永利氏文書』

（外題）「於件山田村者、任相傳之理、可令領掌信明之狀如件、

前越中守平（盛俊カ）（花押）」

嶋津御庄別當散位伴信明解　申請　留守裁事

請被殊任且解狀之旨、且依先祖相傳之理御裁許、御庄御領薩麻國薩麻郡内山田村者、信明先祖相傳之所領也、然不慮外信明父信房時、同國住人忠景企（マヽ）無本尅、被押領取以後、不領知不當愁狀、

右、謹檢案内、件所領者、信明先祖相傳所領也、然代代領掌間無他妨、隨無異論人、然薩麻國住人故忠景、企無

本、權門御領云、御庄國衙召物云、押取尅、忠景舍弟忠永件所領押取間、如此依無本、被宣使(專カ)失了、其後字仁六郎大夫兼宗彼郡爲弁濟使職、有限地頭職違指無雜怠、不蒙本(家カ)裁、不知地頭、恣押領条、言語不及事也者、恩裁被停止兼宗非道沙汰、依先祖相傳之理、爲被御裁判、子細言上、以解、

壽永二年八月八日　　別當散位伴信明上

75

『頂峯院文書』

□(『文字闕ル』)冠武住僧等所

可早東谷山主職事

右、以成賀聖人補任件職畢、仍山内住僧等、隨彼命、月並恒例佛事懃行之次、可奉祈國吏莊方并地頭息災安穩之由、如(加カ)之於開發田之所當者、充行五節供料畢、後〻將來全不可相違之狀如件、

壽永二年八月　日

地頭掾大前宿祢在判

（表紙）

忠久公　自元暦元年　至正治二年

前編　舊記雜錄　巻二

76

「島津家譜中　頼朝公傳」

壽永三年甲辰、四月十六日為元暦元年、正月廿日庚戌、使蒲冠者範頼・源九郎義經等、率數萬騎入洛追罰木曽義仲、今日範頼入於勢多、義經入於宇治、義仲使三郎先生義廣・今井四郎兼平已下於兩道致防戰、皆以敗北、範頼・義經相具東士、馳参六條殿、警衛仙洞、此間勇士等競走于諸方、遂於近江國粟津邊、相模國住人石田次郎誅戮義仲、其外錦織判官等逐電矣、

同年二月七日、範頼・義經率七萬六千餘騎精兵、向攝津國一谷、範頼向大手、義經向搦手、摘其中七十餘騎、而登于一谷後山鵯越、見城郭、石巖高聳、澗谷深幽而駒蹄難通、人跡既絶、雖然下巖石從前後競戰者甚急也、以平氏等敗走、于時生虜於本三位中將重衡、誅戮於越前守通盛卿・薩摩守忠度・若狭守經俊・武藏守知章・大夫敦盛・藏人業盛・越中前司盛俊・但馬前司經正・能登守教經・備中守師盛、其外梟首於一千餘人也、

壽永三年三月廿七日敍正四位下、義仲追罰賞也、同日、梶原平三景時相具本三位中將重衡、而到于伊豆國府矣、

元暦元年甲辰去月十六日改寿永、如此、五月十六日癸酉、誅一條次郎忠頼於營中、振威勢之餘、挾欲亂世之志、其事既露顯、由是如斯、

同年十二月七日壬戌、平氏左馬頭行盛、率五百餘騎勇士、構城郭於備前兒島、欲使佐々木三郎盛綱追討之、已雖行向其地、更難凌波濤、扣轡於濱潟、行盛朝臣頻以招之、仍盛綱不待求乘船、不改騎馬、相具六騎郎從、渡三町餘藤戸海路、追落行盛云云、

爲追討平家之在西海、元暦元年九月二日、三河守範頼率東士出京而在中國、雖然無船粮絶、徒送日月矣、

77

「御文庫三番箱中」

平家没官領内
京家地事
未致其沙汰、仍雖一所不宛賜人也、武士面々致沙汰事、全不下知事、所詮、可依院御定也、於信兼領者、義經沙汰也、

壽永三年四月十一日　　頼朝（花押）

（吾妻鏡、元暦元年九月九日条ニ見ユ、但、本文書疑フベシ）

78

「御文庫三番箱中」

書狀二（ママ）巻ハ、遠江四郎、又額田判官代許へ、即可有送越之由を申遣ニ候、額田判官代をは、きうの判官代とも申候也、達（ママ）間々至極不審ニ候へ、御馬（ママ）なとも致對捍所共こそ候し欤、さゝめ先度事ニもさつき、

十月二日　　（源頼朝）（花押）

惠眼御房

「此一通年間詳かならす、此ニ載て考ヘ」

（本文書疑フベシ）

79

「御文庫三番箱中」

僧觀覺申、河内國古市郡内壺井堂通法寺敷地同浮免等事、解狀并證文等案進之候、可然之樣可令計沙汰給候、如此事一切不可執申之由、雖相存候、且御功德候之上、大切思給候者也、恐々謹言、

十一月三日　　（源頼朝）（花押）

池大納（平頼盛）言殿

「此一通年間知れす、此ニ載て考ヲ俟」

（本文書疑フベシ）

80の1

「山田聖榮系図目安」

一　忠久拾三歳元服、畠山庄司次郎重忠を烏帽子親とかふして、忠之字を得而忠久と名乗也云々、

一　嫡子頼家・次男實朝雖御座有ト、當腹ト云、遠國なれは二位殿思召煩而御吟味之處ニ、有人申樣、比企判官の妹丹後之御局の御腹に、頼朝御子男子御座有、二位殿御妬深きにより忍ましまし、十三に御成候、押立殊更他に勝給る、是尤可然と而頼朝に披露有り、猶も二位殿を憚有りけるか、夫者重忠はからひと仰下る、仍御烏帽子如何と申されけれは、畠山親として男になすべし、此時は斟酌も入ましきと而、左折之御烏帽子

源氏恒例として召せ、名乗をも忠久と申、此字は重忠の忠之字を上申さる、賴朝の御免有る上ハとて聟に取申候云々、

伊勢ニ者御親類御座候事ハ分明存不申候間、閣所也、御内之人ニハ長野方ハ此時より之事ニ候云々、

80の2

一伊地知季安按、

令重忠加公元服、爲文治元年事、聖榮爲五年征奥州時誤也、五年公年八歳、此云十三亦傳聞誤也、若從十三説、公生亦應在治承元年丁酉也、不審、

80の3

一古今戰云、抑薩摩之國ノ太守嶋津殿ト申ハ、賴朝之三男忠久之後院(胤)也、去程ニ(比企)ヒキク藤四郎義カスノ姉ニ丹後之局ト申テ、天下無双之遊君也、内々賴朝之御手ヲカケサセ給間、程無ク懐人ニ成給御叉、北條ノカミ様聞召、御弟ノ安時・吉時ナトヘ仰セケル様ハ、此局如何成淵瀬ニモ沈ヌハヤト有ケレハ、彼兄弟三人計イにて、君之御心中者ヲソロシケレトモ、姉ノ心ヲ休メン爲ニ、日向之國ヘ流ス由申ケリ、乍去、賴朝ヘ此由申上、偏ニ暇ヲ御出シ候得かしと申、若左様無御座候ハヽ、御外聞悪敷事モヤ出來候ハんト申上ケレハ、其時迄ハ賴朝モ未流人之御事成レハ、彼北條カ心ニ不任シテハ如何トヤ思召ケン、兎モ角モ北條計ヘトノ御返事也、乍去、今程只モナキ由申候、何處ヨリモ産之紐ヲ解給タル御左右可申上ト仰ケリ、左有テハ都之如ク上せ、便リ次第日向國ヘ流ントテ、攝津之國住吉野原迄列下リケルニ、彼住吉之松原にて俄ニ産之紐ヲトキ給、サレハ不思儀之(奇瑞)キスイ多カリケリ、先何人共無キ女房達之出來ラセ給而カイシヤク仕給、中ニモイトクラカリケレハ、火ナトヲ燈シ色々養生仕玉フ、明朝者、我々ハ鎌倉之若宮也、三嶋也、伊豆也、箱根也、木船・岩船・春日・住吉也ナトトテ、聲〳〵ノ玉ヒテ、カキ消スヤウニウセ給、見ル人聞人モ不思儀成トソ申ケル、中ニモ稲荷ハ未立歸リ給ハス居給、折節大雨降リて、住吉ノ不淨ヲ洗キケレハ、彼狐女ノ姿ニ身ヲ成シテ、若君ヲネムリカハラケナトシケリ、扨社御稲荷トハ知レケリ、此由鎌倉ヘ御内意申上ケレハ、當時平家繁昌之折ナレハ、我子ト不知様モテナシ、母ヲ誰ニモ遣セト仰下シ給、其比八文字之民部太夫トテ、漢ノカウソノ後院成人御座マスガ、モトヨリ彼局者天下無又

之女也、我モ能上臈成レハ此女房ヲ給リ、都之カタ原ニ住給、然者彼君ハ生サセ給時ダニモ、神〻ケ様之キズイ有ケル故、本トヨリモ只人トハ見得玉ハスハヤ、勢程モ次第〳〵ニ乙名敷成せ給ヘハ、頼朝モ天下之將軍ニ成セ給、我カ子トシテハ則御恥有シトテ、時之攝政ニ而御座ス程ニ、近衛殿ニ奉ル、去程頼朝、程無クセイ將軍成せ給テ御祝限リ無シ云〻、

81

一元暦元年甲辰正月、範頼・義經、頼朝ノ命ヲ奉シ、木曽義仲ヲ追討ス、二月範頼・義經、平家ヲ一ノ谷城ニ討、三月頼朝鎮西ニ下知シテ、九ケ國ノ住人早御家人ト爲リ、本領ヲ安堵シ、平家ヲ追討ス、

一二年乙巳三月、平家悉西海ニ滅フ、傳稱ス、小松中將資盛・少將有盛・左馬頭行盛、種子・屋久ノ南海ニ漂歴スト、四月、頼朝從二位ニ敍ス、六月十五日、島津忠久元服シテ左兵衛尉ニ任ス、忠久ト稱ス、伊勢國波出御厨・須可御荘地頭職ニ補セラル、八月十七日、島津御庄下司職ニ任ス、十一月、地頭守護ノ事ヲ奏聞ス、

元暦二年乙巳二月十八日、義經爲在四國之退治平家、昨日欲解纜於渡部、暴風俄起、舟船多以破損、義經迄丑時、乘從軍中百五十騎於五艘解纜、卯時、着阿波國勝浦、召當國住人近藤六親家、爲指南向八島、同十九日到八島内裏向浦、放火牟禮高松民屋、由是先帝出内裏、率一族等、已浮海上、于時使實基之猶子新兵衛尉基清、燒失内裏已下舍屋、黒烟聳天、白日蔽光、丁此之時平氏家人、越中二郎兵衛尉盛継・上總五郎兵衛尉忠光等、下船而陣宮門ノ前、合戦移刻之際、義經家人佐藤三郎兵衛尉継信見射殺矣、義經悲歎之餘、解一口之衲衣、葬千株之松本、以秘藏名馬号大夫黒、行幸供奉之時、仙洞賜之、毎向戦場駕之者也、畀其僧云〻、

元暦二年三月廿四日丁未、源平大軍、相逢於長門國赤間関壇浦海上、而競戦甚急、及午時、平氏悉以敗傾焉、二品禪尼持寶剣、按察局奉抱先帝春秋八歳、共以没海底、雖然按察局存命、建禮門院・若宮今上兄御存命、前内府宗盛・右衛門督清宗者爲生虜、其外皆没水死畢、賢所神璽無異儀云云、

元暦二年四月十一日、義經西海所進之一巻記、今日鎌倉到着、其記曰、

去月廿四日、於長門國赤間關海上、浮八百四十餘艘兵船、平氏亦漕向五百餘艘合戰、午時逆黨敗北、

一先帝没海底御、入海人々、

二位尼上

門脇中納言教盛　新中納言知盛

平宰相経盛先出家也、　新三位中將資盛

小松少將有盛　左馬頭行盛

一若宮并建禮門院無爲奉取之、

生虜人々

前内大臣　平大納言時忠

右衛門督清宗　前内藏頭信基　被疵、

左中將時実同上、　兵部少輔尹明

内府子息六歳童形字副將

此外

美濃前司則清　民部大夫成良

源大夫判官季貞　攝津判官盛澄

飛驒左衛門尉経景　後藤内左衛門尉信康

右馬允家村

女房

帥典侍先帝御乳母　大納言典侍重衡卿妻

帥局二品妹　按察局奉抱先帝雖入水存命、

僧

僧都全眞　律師忠快

法眼能円　法眼行明熊野別当

爲宗分交名如此、此外男女生取事追可注申、又内侍所神璽御坐、寶劍紛失、愚慮之所覃奉捜求之云云、

元暦二年四月廿七日敍從二位、是亦所召進前内府之賞也、

同年五月十日、加藤太光員之郎從於志摩國、搦捕平氏家人上總介忠清法師、傳京師也、同十六日、於六條川原、所梟首云々、

義經相具前内府父子、有至于酒勾驛之告、即使北條殿往其地、同十六日、迎取鎌倉、義經留置其地邊、不入鎌倉中也、

元暦二年六月九日、義經此間留滯酒勾邊、今日相具前内府歸洛矣、于時相副關東勇士數輩於囚人也、

同月廿一日、於近江國篠原宿、誅前内府宗盛、至野路、梟前右衛門督清宗、重衡卿今日召入花洛、明日遣東大寺、依衆徒請也、廿三日、持向前内府父子首於六條川原、檢非違使等受之、而懸獄門前樹、重衡亦今日於南

都所梟首也、

頼朝攻平逆徒、而後密遂奏聞曰、欲建立一伽藍、安置先考廟於其地、所以起工也、

法皇叡感勲功之餘、文治元年八月十二日、使判官尋出故左馬頭首於東獄門邊、相副鎌田兵衛尉政家之首、以江判官公朝爲勅使、同月晦日下着鎌倉、遺骨者文學(寛カ)上人門弟之僧懸頸來格、同九月三日子時葬先考主從遺骨於南御堂之地、唯武藏守義信・陸奥冠者頼隆、遂供奉於郭内、盡忠功於先考故也、同十月廿一日安置本佛丈六阿彌陀於南御堂、同月廿四日遂供養、號勝長壽院也、

83

一島津譜略ニ、元暦二年忠久七歳ニシテ頼朝ノ命ニ應シテ鎌倉ニ至ル、六月十五日頼朝蜜ニ忠久(時幼字三郎ト云、)ヲ鶴岡若宮ノ寶前ニ召シテ、初冠ヲ爲ス、左兵衛少尉ニ任ス、畠山莊司次郎重忠加冠ヲ勤ム、是ニ於テ頼朝鳩作ノ脇刀ヲ以テ忠久ニ與フ、且重忠ト舅婿ノ約ヲ結フ、重忠ニ命シ、忠久幼稚之間輔翼スヘキノ旨ヲ以ス、乃忠久ニ補スルニ勢州須可御莊、同國波出御厨地頭職ト爲シ、手自花押ヲ書シ、以下文ヲ授ク、

一文治元年乙巳、諸國始テ守護地頭ヲ置、

84

「雜抄」

一元暦二年三月廿四日、頼朝追討平家至長門赤間關壇浦、

85

「忠久公御譜中」

壽永三年甲辰七月十九日、平氏與黨襲攻大内冠者惟義於伊賀州、于時逆徒敗走斬戮者九十餘人也、前出羽守信兼之子息及忠清法師逃亡于山中云云、同年八月十日源義經在京師、招信兼之子息左衛門尉兼衡・次郎信衡・三郎兼時等於宿廬、誅戮之、同十一日信兼、被下解官宣旨云云、而後平家悉没西海、故賜信兼黨徒領地於忠久、(于時七歳、)在頼朝卿自判下文、記左、

86

「在嶋津安藝守久雄」

「頼朝卿」(花押)

下　伊勢國波出御厨

補任　地頭職事

「左兵衛尉惟宗忠久」

右、件所者、故出羽守平信兼黨類領也、而信兼依發謀反、令追討畢、仍任先例、爲令勤仕公役、所補地頭職也、早爲彼職、可致沙汰之狀如件、以下、

元暦二年六月十五日

（付札）「此六月十五日二通原書ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ中ニアリ」

87 『全』

（源頼朝）（花押）

下　伊勢國須可御庄

補任　地頭職事

「左兵衛尉惟宗忠久」

右、件所者、故出羽守平信兼黨類領也、而信兼依發謀反、令追討畢、仍任先例、爲令勤仕公役、所令補任地頭職也、早爲彼職、可致沙汰之狀如件、以下、

元暦二年六月十五日

88 東鑑元暦元年八月廿六日壬午、源廷尉飛脚参着、去十日招信兼子息左衛門尉兼衡・次郎信衡・三郎兼時等、於宿廬戮之、同十一日、信兼被下解官宣旨云々、九月九日乙未、出羽前司信兼入道已下平氏家人等京都之地可爲源廷尉沙汰之由、武衛被遣御書云々、

89 「在嶋津安藝久雄」

（源頼朝）（花押）

（押紙）「日向大隅薩摩三箇国惣名也」

下　嶋津御庄官

可早任領家大夫三位家下文狀、以左兵衛少尉惟宗忠久爲下司職、令致庄務事、

右、件庄下司職、任領家下文、以忠久爲彼職、可令致庄務之狀如件、庄官宜承知、勿違失、以下、

元暦二年八月十七日

（付札）「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ内ニ在リ」

90 奉寄　三井寺御領事　在若狭國玉置領壹處

右件所、依爲平家没官之領、自院所給預也、而今爲崇當寺佛法、所令寄進也、但於下司職者、從鎌倉所沙汰付也、不可有相違之狀如件、

元暦元年十一月廿八日　　前右兵衛佐源朝臣

91 （本文書ハ八九号文書ト同文ニッキ省略ス、但季安注記ノミ掲グ）

（頭注）『三位家トアルハ高倉三位局ナレハ、領家基通公ノ御母堂トハ從母姉妹ノ御属キナリ、左アリテ高倉王ノ御実母也』

92 「玉海」

文治元年乙巳十一月十三日壬辰、天晴、關東武士多以入洛云云、十四日癸巳、傳聞三條宮息、年來被坐北陸之宮、生年十九、雖加元服、未有名字、一昨日入洛也、賴朝之沙汰云云、

「按ニ三條宮即高倉宮以仁王ニテ、御母ハ高倉三位局ナレハ、即右ノ三位家ナリ」

93 『御文書』

下　嶋津御庄官等

可早任鎌倉御下文狀、以左兵衛尉惟宗忠久爲下司職、致其沙汰事、

右件人、任鎌倉御下知之旨、宜爲下司職、可令致庄務沙汰之狀、所仰如件、故下、

文治元年十一月十八日

在御判『近衛殿歟』「領家大夫三位家下文トアリ」

「右御文書愚按仕候処、文治元年乙巳八月十四日、元暦二年改元為文治元年、嶋津御庄領家基通公政所諸大夫より、三位家下文之状ニ被為応、鎌倉江御執達有之、賴朝公茂被任其御状、同月十七日右通以」

94 「伊地知季安考」

元暦二年八月十七日下文に、領家大夫三位家下文とある旨趣、むかしより史館にても能く解せさる事の由にて、季安が從兄本田親孚史職に居れるの日、彼職原に精き赤井清兵衛・伊木某等に訪ひ糺したれとも、竟に其詳なるを得すとの物語を、季安も竊に聞ことあるに与れり、爾來意を注ゐたるに、伴氏の譜を改撰するわさを賴まれ、近ころ博く史籍ども捜覧せしに、幸にして島津御庄の開發を言上したる文書を、鹿屋氏か藏書に見あたり、彼此と稽へ糺せしに、實に本立て道生の心地して、此御下文なとも、愚か心におひてハ解釋せらるゝやうにおほへ侍れは、斯く漫に和訓を注たり、その恐誠に鮮なからすといへとも、只識者に訪て惑ひを解かん爲のミなりき、因て此に其和訓したる愚意を註おけり、夫レ島津御庄とは、近衛家代〳〵領し給ふ庄園の名号にて、領家とは今俗に領主の意にて、その比の近衛殿下基通公を指し云へるなり、大夫とは近衛家に使令せらるゝ諸大夫にして、尚通公・稙家公の時など進藤筑後守長美と云へる類と考られたり、三位家とは、蓋基通公の北政所從三位位子を謂ふなるべし、然あれハ賴朝公より忠久公を我子と遊はしてハ恥給ふよしにて、時の攝政近衛殿に奉られしこと、古

今戰にいひ、また奥三ヶ國は近衞殿の御分國たる間御讓あり、或は公を近衞殿御養君となど、御當家由來に書おける赴きにも能く符合し、基通公とその北政所の三位家は、御養父母のおほん親しミましませは、其頃公は御七つ、なほ庄務なと知しめす御年ならねは、只其俸を分ち給ふ例にて、御養料に此下司職となしまいらせよと、北政所の三位家より大夫に仰せたりけんを、下文をもて鎌倉へ告たる狀に任せて、賴朝卿より則御判をすへられ、御下文を島津の御庄官等に下され、斯く公を下司職となし、庄務を致さしめ給ふによりて、その以前より領家譜代の庄官たる富山・梅北の輩なとよく承知して、聊も此御下文の旨をハ違失すること勿れとの御判物ならん、則御當家由來に、公より一年さきに本田が下りてとあるも、此年の事に符合し、公は僅御七つの時なれは、右職の御名代に先つ下國しけんには疑あらし、類聚國史仁壽元年十一月乙亥、進右大臣藤原朝臣良房階正二位、加其家夫人正四位下源朝臣潔姫從三位、是にて基通公從一位昇進の時、その夫人平位子も從三位と爲り給ふも例して知るへし、尤その從三位たる事は大系圖に見ゆれとも、年月考ところなし、

二年丙午、春正月八日、下文以　公爲信濃國塩田莊地頭職、拠得仏公旧譜、其後又以　公爲島津御莊總地頭職、因賜姓島津氏及十字家紋、拠島津系図、島津譜略、十字家紋者、一縦一横交午如十字形、島津譜略、又按大玄公旧譜、元禄十三年、菊池藤助対林祭酒曰、昔清和天皇賜六孫王經基源姓及升降竜云者、画二字紋、往々見於公族家譜、抹以象之、所謂二疋竜者是也、島津氏家紋、蓋二疋竜之変様云、藤助少受学林道春、仕寛陽公為儒職、而対林祭酒云云、其説蓋有所拠、故録之以備異聞、然言二疋竜象升降竜、則二抹皆応竪画、而後世図其様者、並作横画、字亦作二引両、豈本同而末異者欤、抑原自有両様欤、又後世画十字家紋者、皆於圏中為十字形、嘗観武庫所蔵得佛公甲冑十字紋、真鎗為之、形如大銭、貼十字於其中、微与今世圏中十字異、然亦不可謂全無圏也、而島津系図、島津譜略、豈其略言之乎、抑別有所拠乎、以上二説並俟後考、菊池藤助事、詳見後第二十七巻寛文元年、

島津御莊者、　薩摩・大隅・日向三州之總稱也、　島津譜略云、筑前・肥前・豊前、称前三箇国、筑後・肥後・豊後、称後三箇国、日向・大隅・薩摩、称奥三箇国、島津御莊、合為西海道九箇国、日本書紀、景行天皇幸子湯県、東望謂左右曰、是国也、向於日出之方、因名之曰日向、統日本紀、文武天皇既平薩摩隼人、唱更国司等言、於国内要害之地、建柵置戍、註云唱更、今薩摩国、元明天皇之時、割日向国肝坏・贈於大隅・始羅四郡、置大隅国、子湯県、蓋児湯郡、和名類聚、日向国有児湯郡、　薩摩十三郡、曰出水郡、曰高城郡、曰薩摩郡、曰甑島郡、曰日置郡、曰伊祚郡、曰阿多郡、曰河邊郡、曰頴娃郡、曰揖宿郡、曰給黎郡、曰谿山郡、曰鹿兒島郡、大隅八郡、曰菱刈郡、曰桑原郡、曰囎唹郡、曰大隅郡、曰姶羅郡、曰肝属郡、曰馭謨郡、曰熊毛郡、日向五郡、曰臼杵郡、曰兒湯郡、曰那珂郡、曰宮埼郡、曰諸県郡、凡二十六郡、拠和名類聚、伊祚郡一作伊作郡、　當是時、封内有寺社邑、有領家邑、有國

人邑、蓋與　公之所食、犬牙相錯、拠得佛公旧譜、領家見上、国人邑、如肝属氏領肝属、蒲生氏領蒲生、渋谷氏領山北之類、其事皆見於後、国人謂旧居三州者、方言呼曰久仁于止、按王制、公侯田方百里、伯七十里、子男五十里、不能五十里者、附於諸侯、曰附庸、陳氏祥道曰、三等之地、百里、七十里、五十里正封也、五百里、四百里、三百里、二百里、一百里五等、則包附庸、広封也、孟子言、周公封魯百里、明堂位言、封周公方七百里、葉氏夢得曰、詩云錫之山川土田附庸、附庸挙其虚封言之、所謂七百里也、土田挙其実封言之、所謂方百里也、汪氏克寛曰、周礼大司徒論公侯伯子男之地、各以封疆言、而其食者、或半、或三之一、或四之一、孟子王制所言、専主田禄、正周礼所謂食者也、其食者、魯頌所謂錫之土田、其封疆、魯頌所謂錫之附庸也、今拠此諸説而論之、公為薩隅日三州守護職者、錫之封疆者也、虚封也、広封也、所食在三州之内者、錫之土田者也、実封也、正封也、而寺社邑、領家邑、国人邑、猶附庸云、陳氏祥道以下三説、見欽定礼記王制通論、而武士國人往往有拒命者、夏四月三日、頼朝下令島津御荘曰、前日以　惟宗某為地頭、撫荘民、徴田租、今聞武士國人多不従命者、甚非也、而今而後、宜遵地頭要束、同上、某者　公名也、原文本書公名、今諱曰某、資治通鑑王莽始初元年、哀帝見葬居摂、即作銅匱為両、検署其一曰、天帝行璽金匱図、其一署曰、赤帝璽某伝予皇帝、金策書、某者、高皇帝名也、今用某字本此、又使本田左衛門尉貞親之薩摩觀變、貞親還報、於是遣　公之國、拠本田信次郎家蔵文書、本田氏之先、出自高望王七男村岡五郎良文、伝至信濃守親幹、始称本田氏、伝三世至貞親、鎌田氏之先、出自藤原秀郷、伝至権守通清、始称鎌田氏、伝三世至政佐、酒勾氏出自梶原太郎景久、景久生刑部丞朝景、朝景領相州酒勾邑、因氏焉、景貞、朝景之子、猿渡氏之先、出自高望王、伝至藤三郎信元、信元領武州猿渡邑、因氏焉、信元二子、長曰太郎信景、次即實信也、秋八月二日、公至薩摩、　按得佛公旧譜、公始就国、或云文治元年八月二日、或云文治二年八月二日、或云建久七年八月朔日、而島津系図曰、蓋有所拠、今従之、初本田貞親之至薩摩也、擇於山門院木牟禮城而取焉、披草萊、剪荆棘、以為税駕之所、拠本田信次郎家蔵文書、廟堂要覧、郡村高辻帳、山門院今出水郡野田・高尾野地、木牟礼城遺墟在出水野田接界処、東去出水別館二里十二町、又建鎮國山感應寺於山門院、　御当家由来曰、本田貞親之始至薩摩也、建感應寺於山門院、廟堂要覧従之、感應寺故牒建於建久五年、不知何拠、　至是　公入木牟禮城、拠廟堂要覧、三日、頼朝下令島津御荘官曰、千葉介常胤為島津御荘寄郡郡司職、是宜慎守其職、従國司命、而縦其代官字紀太清遠為暴、下民苦之、且常胤以清遠為端人、而擧用之、今乃如此、宜加禁止、若不用命、處以重刑、拠得佛公旧譜、按当時、有寄郡之称、其義未詳、是歳創建稲荷大明神社於山門院、拠島津譜略、　公之生於住吉也、暮夜暗甚、忽有一狐持火照之、其形若擁護者然、蓋稲荷大明神之顯靈云、拠山田聖栄自記、故　公之就國也、即建稲荷大明神社、以為島津氏主、主言所主祭、和俗謂之氏神、左伝公賂尹氏、而薦於其主鐘巫、杜預註、主尹氏所主祭、而住吉社側本有稲荷小祠、號為住吉末社、自此時人呼為島津稲荷云、拠得佛公旧譜、稲荷社即狐王廟也、蓋狐之依稲荷、猶鳩之依八幡、猿之依叡山之類、以理論之、雖不可解、然諸書所記、時有霊異、非浅見寡聞者所窺云、狐王廟、見名物六帖、

96

「西藩野史」

二年丙午正月五日、忠久公信濃國塩田庄地頭職に任す、

又大隅・日向・薩摩三州地頭職に任す、續て三州の守護職に任す、是より子〻孫〻相續て無窮に傳ふ、私云、封を受る日月を

詳にせず雖、封内牛屎氏に伝る書を以考るに、今年三月の比なるへし、其書に云、下島津御庄可令早停止旁濫行、従地頭惟宗忠久下知、安堵庄民、致御年貢已下沙汰事、右、諸国諸民地頭成敗之条者、鎌倉進止也、仍件職、御先日以彼忠久令補任畢、而今殿下依令相替給、雖無領家之定、至于忠久地頭之職者、全不可有相違、随令安堵土民、無懈怠可令致御年貢之沙汰也、兼又為武士并国人等、恣致自由之濫行、或打妨御年貢物、或背忠久之知、毎事令対捍之由、有其聞、所行之旨、最以不当也、自今以後、停止彼等之濫行、令安堵住人、以下、文治二年四月三日、頼朝花押書の発端に在り、此書牛屎氏に蔵る事数十(百)年、後に邦君の文庫に納む、○或説曰、三州は鎌倉を去ること数十里、殊に西国ハ平氏の故国なるか故に、頼朝我子を封して其乱に備ふ、

於是、頼朝、忠久公に命して嶋津を以て氏とし、

伝云、三州は島と津と多し、故に、頼朝公毎に忠久公を以嶋津殿と称す、

十文字を以帷幕之紋とし、

伝云、頼朝二引両を紋とす、故に是を縦横し、十字として紋と賜ふ○或云、頼朝公泰衡を征するの日、食に就の時、箸を取て十字の形とし、是を紋とせしむ、又云、旗の紋は地を白くし、十字を黒書し、幕は地を掲塵色にして十字を白書すと云、

重器許多品を賜ふ、所謂大十文字の太刀

剣工の名を詳にせす、頼朝公常に帯す、

小十文字の太刀

伝云、光世作、源氏重代膝丸是也、○又云、多田満仲の時、筑前国三笠郡土山邑剣工あり、自言、異国より来ると、満仲命して二剣を作らしむ、工八幡に祈りて造る、長こと弐尺七寸、罪人の首を斬るに、一人は髪を加えて斬る、故に蟹切と名く、一は膝を加て斬る、故に膝丸と名く、其子頼光に当て、渡邊綱、蟹切を以て鬼形の妖を斬て鬼丸と改む、頼光、膝丸を以て土蜘蛛丸を切て蜘蛛斬と改む、二剣を次子出羽守頼基に与ふ、頼義、貞任を伐の日、勅して頼義に賜らしむ、然て義家に伝へ、義忠・為義に伝ふ、時に二剣声あり、鬼切を獅子の子、蜘蛛切を吼丸と改む、熊野別当教真ハ為義の甥也、故に為義、吼丸を与ふ、教真是を熊野権現に献す、為義又播州の工に命し、似せ作て小鳥と号す、嘗て獅子の子と并へ立、獅子の子倒れて小鳥を切る、仍て友切と改む、二剣を義朝に与ふ、義朝夢に因て友切を膝丸と改め、頼朝に伝ふ、小鳥ハ義朝死後平氏に伝ふ、教真か子堪増、吼丸を取て義経に与ふ、薄緑と改む、頼朝と善からさるに及て、箱根権現に献して頼朝怒の解んことを祈る、後に箱根別当曾我時宗に与て祐経を撃しむ、時宗捕れて頼朝に帰す、又膝丸と改む、太平記を按に、二剣頼朝より伝て新田義貞に到り、義貞死後足利高経取て尊氏に献すと云、愚謂、膝丸既に伝て忠久公に賜ひ、今に存する時ハ、所謂尊氏に伝ふる者は蟹切と小鳥なるべし、

八幡大菩薩の旗

僧文覚、八幡大菩薩と書す、

八景の釜

銀を以て八景の図を鋳る、

五指量愛染明王

伝云、弘法大師、嵯峨帝の勅を奉して作る、故に谷渡愛染明王と云ふ、又五指量と云ハ、頭より蓮台に至て、五指を以て量るが故也、頼朝公常に是を信、後に忠久公、平等王院を立て本尊とす、今や鹿児府城中護摩所に祭る、

等是なり、共に今猶存す、

八月初て封に就て薩摩國山門院に入、木牟禮城に居す、

按聖栄自記、建久四年八月、忠久公鎌倉を出て京師に入る、後白河法皇見て以為、先に薨する高倉宮に似たりと、以て深く憐む、留て京師に在しめん事を欲す、近衛基通公及ひ群公卿、忠久公を悦て其西州に到る事を欲せす、故に京に留ること数年、建久七年六月朔日、京を出て、八月廿三日山門院に入る、○按寺院足不、此時山内寺を祈願寺とし、感應寺を菩提寺とす、山内寺亀翁山西性院と号す、性空上人開基、江州比叡山の末寺也、○按本田氏伝記、文治二年忠久公西州に赴、先京に在り、本田親恒、薩州に入り、国の形勢を見る、賊起て拒む、親恒是を攻撃、国定て帰る、然して公国に入る、其子左衛門尉貞親従て来り執柄たり、隅州の守護代と為て清水に居す、一寺を野田に立つ、感應寺是也、○伝言、薩州ハ王城を去ること遠し、故に頼朝公暦学士を属す、故に世〳〵国中に暦在て是を用ゆ、本朝暦士在て行ふ、京師、東都、伊勢及ひ我国のミと云、○按酒勾氏記、其先刑部丞朝景、忠久公に従て国に入る、頼朝公幌を忠久公に賜ひ、朝景に告て曰、是我吉例の幌也、今也忠久幼稚也、汝か家に収めよ、於是酒勾氏に伝ふ、後以為、狎侮へからす、竊に天の幌と号し頼朝公に擬す、天吉大権現菩薩と号し、又忠久公を祭て一宮大明神と号す家に并祀る、今猶如此す、府下中村邑ニ在り、

後に日州堀内に移居す、

都城南郷の内也、按に都城南郷・北郷・中郷あり、安永川東を北郷とし、上長飯・下長飯・鷺巣・寺柱・木前・後久・永丸・田部・安久を中郷と云、○伝云、自是木牟礼ハ忠時公・久経公・忠宗公・貞久公に至て猶居、

五年己酉、先是伊豫守源義經、頼朝公、讒を以て罪を頼朝に得たり、

伝云、義経平家を討し、屢奇功を樹つ、遂に矜て士を侮る、士恨る者多し、嘗て平氏を讃州に討つ、梶原景時船に逆櫓を設け進退に備んとす、義経是を鳥辱む、景時怒憤して遂に頼朝に譖す、

逃亡して陸奥守秀衡に寓て、去年秀衡卒し、其子泰衡封を襲、頼朝に奏し、義經を撃ん事を乞ふ、於是泰衡に勅して撃しむ、頼朝亦使を遣して泰衡に令す、四月泰衡、義經を攻撃つ、義經妻子を殺

し自殺す、年三十一、於是頼朝、泰衡か久しく義経を庇す事を悪ミ、兵を起し罪を問ふ、軍を分つこと三ツ、一ッハ千葉常胤・八田知家を將とし、常陸・下總の軍を屬し、東海道より奥州に至る、一ハ比企能員を將とし、上野の軍を屬し、北陸道より入る、一軍は頼朝自諸軍を督し、東山道より向ふ、畠山重忠先鋒たり、重忠將を請ふ、於是忠久公を以て先鋒の將とし、（按に東鑑重忠先鋒たることを記すと雖、忠久公の將たる事を載せず、顧に公年譜に十一、人其重忠が衆を統るを見て、公を記せさる歟、）重忠をして是に輔相せしむ、（按に、此時頼朝親ら書を作りて重忠に賜て曰、我子三郎を助て功名させよ、按に三郎ハ忠久公の小字也、其書邦君最上の宝也、今に存して世〳〵伝授く、嘗て林大学信篤春斎の子是に後序して是を褒称し、国史田中国明五右衛門と称す句解一巻を作る、三年にして成る、）八月西木戸太郎國衡（泰衡庶兄、）阿津賀志山（奥州）に逆戰ふ、利あらす、九月頼朝進ミ、平泉壘（泰衡是に居す、）を攻撃つ、泰衡狼狽して厨河に走る、其臣河田次郎、泰衡を弑して頼朝に降る、頼朝其不義を悪ミ、河田を斬て軍中に徇へて歸る、（清衡初て奥州に牧たりしより、基衡・秀衡相続て四世九十余年にして亡ふ、）頼朝將士の功を論して賞を給ふ、忠久公をして若狭國守護職を兼しむ、忠久公異父弟三方兵衛忠季を以、守護代とす、（聖榮記、忠久公御時三州の守護に任すとするは非也、○伝云、自是忠季を以て若狭嶋津と称す、東鑑に若狭兵衛尉忠季と称するハ是也、其子浅間兵衛次郎忠経と称す、後鳥羽帝に仕て北面の士たり、承久乱官軍に属し、宇治川に戰死す、後子孫を見る事なし、寛永中嶋津久通東武に在て、若州の有司に会して其子孫を問、有司帰て国中に求む、三方郡伊崎村の農民九左衛門、五世祖を嶋津八郎左衛門と称す、世〳〵嶋津を以て氏とす、子孫に至て、氏を三方及井崎と改む、是忠季の支流余裔ならぬ歟、）

97 「正文在手鏡」

（付札）「此文書ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ内ニ在リ」

（源頼朝）（花押）

下　信濃國塩田庄

補任　地頭職事

左兵衛尉惟宗忠久

右人、爲地頭職、從行庄務、御年貢以下、任先例、可致其勤之狀如件、以下、

文治二年正月八日

98 一島津譜ニ文治二年丙午正月八日下文シテ、公ヲ以テ信濃國塩田荘地頭職ト爲ス、三月頼朝六十六國惣追捕并地頭ニ補セラル、忠久島津庄惣地頭職ニ補ス、四月三日御下文ヲ賜リ、八月入部ス、

99 山田聖榮自記云、三年九月十九日奥三ヶ國守護職ニ補セラルトアリ、

100 東鑑云、文治二年丙午正月廿六日乙巳、攝錄事、早可被

宣下之由、二品令申京都給、當執柄依伊豫守義經謀逆事、有雜説等之故也云々、○二月廿七日乙亥、安達新三郎爲飛脚上洛、被申條々、可被下攝政詔於右府之事、在其内欤、右府者法性寺殿三男也、和漢才智頗令越人給云々、當攝政殿本自爲平氏縁人、關東有御隔心之處、去年義經顯逆心之時、給追討宣旨、偏依彼御議奏之由風聞、仍可被擧申之趣、内々被啓右府、而不可叶時宜之旨、右府雖有御猶豫、遂被申之欤云々、○三月一日乙卯、諸國被補惣追捕使并地頭、内七箇國分、北條殿被拜領畢、七日乙酉、左少辨遣奉書於帥中納言「正三位藤原経房ナリ」、其一條云、

時政申狀　奏聞了、

一地頭辞退事、爲人愁停止之條、尤爲穩便欤、

一惣追捕使事、雖替其名、只同前欤、但義經・行家不出來以前、二位卿不申行之外、一向可被止之由難被計仰、世間不落居之間、每國置惣追捕使、若又廣博庄園許計補者可宜欤、最狹少所々皆悉被補者喧嘩不絶、訴訟不盡欤、且令散萬人之愁、可爲尋出兩人之術欤、

十二日前内大臣基通停攝政、右大臣兼實爲攝政并氏長者、

廿四日壬寅、前攝政殿家領可被付當攝錄御方欤之由、二品内々有御存案、前攝政家聞此事、以狀被愁　奏、仍今日、帥中納言被仰聞其子細於北條殿、早可申達關東之由被申御返事云々、

101

「忠久公御譜中」

小臣某謹承　高命、編集於此記錄之際、誦於諸家系譜、其中有阿多氏・鮫島氏・川田氏・鎌田氏・石塚氏・高江氏・吉峯氏・有馬氏等之系圖數卷、其文曰、文治或元年、或二年、八月二日、忠久着御于薩州山門院也、又島津家之古譜曰、建久七年忠久十八歳、薩隅日三州入國之時、八月一日下着于薩州山門院云云、兩説未知孰是、俟後知者而已、予以私知推之以為、文治元年之春三月下旬平氏之同族悉攻亡、而後頼朝卿兼諸国荘園守護地頭矣、由是補任日隅薩三州於忠久公則文治年間入国是乎、

102

「頼朝卿」
（花押）

下　嶋津御庄

可令早停止旁濫行、從地頭惟宗忠久下知、安堵庄民、致御年貢已下沙汰事、

右、諸國諸庄地頭成敗之條者、鎌倉進止也、仍件職先日以彼忠久令補任畢、而今殿下依令相替給、雖無領家之定、至于忠久地頭之職者、全不可有相違、慥令安堵土民、無懈怠、可令致御年貢之沙汰也、兼又、爲武士并國人等、

恣致自由之濫行、或打妨御年貢物、或背忠久之下知、每事令對捍之由、有其聞、所行之旨、尤以不當也、自今以後、停止彼等之濫行、令安堵住人、不可違背忠久沙汰之狀如件、以下、

文治二年四月三日

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ内ニ在リ」

103

「正文在手鏡」

（本文書ハ一〇二号文書ト同文ニツキ省略ス）

104

東鑑云、文治二年四月十三日庚申、北條殿自京都參着、京畿沙汰間事、條々有御問云々、次前攝政殿被仰家領等、難被付渡當執柄方由事、加潤色詞被計申、廿日丁卯、攝錄御家領等事、二品令申京都給、其趣前攝政殿稱白河殿領、「基通ナリ」除氏寺社領等外者、皆御押領云々、尤以不便次第候、攝政家爭無御家領候哉、平家在世之時、号中攝殿後室白河殿悉所領掌候也、「基通父基実」「平清盛女」松殿纔氏寺領計知行給、其時、事極無道邪政候哉、代々家領、新攝政家可令領掌給候、只知足院殿御附属高陽院之御庄五十餘所云々、以其、前攝政家可有御領掌候欤、最任道理、可被仰下候欤者、又今日行家・義經猶在洛中、叡岳悪僧等同意結構之由、有其聞之間、殊可被申沙汰欤、不然者、差登勇士於彼山、可捜求件悪僧等之由、被仰下帥中納言許、依之、源刑部丞爲頼知盛卿侍爲使節上洛云々、五月十八日乙未、前攝政御家領事、去月之比被下委細勅答、帥中納言奉書今日所到來鎌倉也、

105

「正文在手鏡」

（源頼朝）（花押）

下　嶋津御庄官等

可令早停止千葉介常胤代官字紀太清遠非道狼藉事

右、當御庄寄郡五箇郡者、以常胤（千葉）令補郡司職了、而守其職許、可隨國司下知之處、件清遠猥乱入庄家、致種々非法、苛法狼藉之間、土民不安堵、不及預所并地頭等沙汰之由、有其聞、事實者、清遠之所行、甚以奇怪也、以郡司職、何可打妨預所地頭之下知哉、自今以後、早可停止件非道狼藉、若尚令違背者、召取其身、可處重科也、且常胤下遣正道者之由、令言上畢、而此条尚以不當也、早停止非法、爲郡司職代官、可致國司本家所役勤之狀如件、以下、

文治二年八月三日

「此正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ中ニアリ」

106

「以下御家譜増補中ニ有リ」

(の1) 山田聖榮系圖目安云、

一忠久　文治二年秋之比、三ヶ國さいこく候欤、

(の2) 聖榮自記云、忠久御誕生之時、産神稲荷を嶋津ニ御祝御申候、秘事条々此内ニ有リ云々、都城古書云、島津之稲荷之御遷宮文明七年乙未八月廿一日、武久公御代官ニ宮丸殿孫子之鶴丸殿御幣取申サレ、顕娃諸事取ナサレ候云々、

(の3) 安國寺申狀云、忠季と申ハ民部太夫か子にて候、忠久一腹の御兄弟にて御渡候、隨而初ハ惟宗氏、承久三年ニ改姓ありて号藤原と、民部太夫ハ日向國司にて候ける間、嶋津に居住候、比木の判官民部太夫も承久兵乱のむほんの人數にてうせ候ぬ、其子孫土佐のはたのしやうニ、ひきなり、「比企カ子孫ヲ云ナラン」むらさかいひら岡とて今もあひ残り候云々、

(の4) 嶋津忠久御記云、爰西國之末、日向・大隅・薩摩こそ地頭御家人強し國なり、伯父鎮西八郎爲朝、鎮守府將軍として打隨、其儘三ヶ國に住居有りし其國なれハ、忠久か自力に持へしとて御讓と云々、御領之國は七ヶ國、伊勢・若狭・信濃・越前・薩摩・大隅・日向、國々の御本領六拾七ヶ所旱、丹後之御局之折〳〵に、大膳太夫廣元齋院司官親能御口入に付而御申候様子者、同者天下に應せさらん遠國を忠久に知せ給度之由被仰候、依而奥三ヶ國御入部也、先薩州山門に御下、夫より嶋津之御庄と申者、日州庄内三ヶ國を懐たる在所とて、庄内嶋津之庄南郷之内、御住所堀之内ニ御所作有り御座候訖、御養父八文字民部太夫殿も、始は嶋津に居住、其跡に御座候故嶋津殿と申也云々、○又一本云、三ヶ國へ御入部也、先薩摩山門院ニ御下、夫より嶋津之御荘ニ御移、嶋津之庄ハ庄内也、三ヶ國を庄内爲懐依在所也、去程庄内南郷内御住所堀内ニ嶋津御所作有て御座候訖、御養父八文字民部太輔殿も始ハ嶋津ニ居住有欤、嶋津殿と奉申、其後八文字殿土佐國へ御移、中村なとへ御座候由、其末には御座候と申傳也云々、

107

「御家譜増補中」

嶋津と云ふ事ハ、元來薩隅日三州之惣名也、然るに御元

祖忠久公八歳ニ被成、雨洩不知、頼朝公薩隅日之守護職に封せられ、文治二年薩州山門院江御下向被成、三州を御領知被成候ニ付、三ヶ國之惣名嶋津を以御家号ニ御定被成候、忠久公ゟ以前嶋津と号候家ハ無、亦雨漏不可読、三州之惣名ニ而候、證據元暦二年八月十七日以忠久公被任下司職候節、從頼朝公嶋津御庄官ニ被下候御下文ニ、嶋津御庄官と有之候、肩ニ同筆ニ而、同紙を以押札ニ、日向大隅薩摩三ヶ國惣名也と有之候ニ而無疑候事、

108 「全」

弘安七年七月一日駿河守平朝臣下知状云、嶋津庄三箇國日向大隅薩摩内云々、

109 「全」

康安二年六月嶋津上總入道道鑒謹言狀云、日向大隅薩摩三ヶ國者、爲嶋津庄内國々之條、御下文明鏡之間、名字之庄内國々也云々、

110 「全」

抑當家ハ忠久受關東讓、去建久三年壬子有下向、拜領三ヶ國、仍薩摩大隅日向孕御庄之間、島津御庄三ヶ國ト申也、然者代々ノ相續無別子細云々、

111 『國分寺文書』

下　安樂寺所司神人所

可早任下知旨、停止武士狼籍、爲宗佛事神事、當寺御領庄園等事、

右、當寺者、天滿天神御在所也、不可准他社、仍可爲宗佛神事旨之由、自鎌倉殿所被仰下也、然者、停止武士違乱、令安堵所司神官等、加寺家修造、可勤修佛神事也、且下向武士其旨下知畢、更以不可違乱者、所司等宜承知、不可違失、故下、

文治二年十二月七日　『北条時政』平御判

112 「島津國史」

文治三年丁未夏五月三日、下文以大秦元光、領薩摩牛尿院郡司辨濟使如故、拠得佛公旧譜、元光或作基光、渕辺弥兵衛系図文書、大秦氏之先、出於平維盛、伝至薩摩守信基、信基領牛尿院、伝三世至元光、元光有瑞夢、以大秦為氏、子孫或為牛尿氏、或為渕辺氏、郡村高辻帳頭書、牛尿院、即今伊佐郡大口郷・山野郷・羽月郷、凡三郷也、秋九月九日、下文以　公爲薩隅日三州守護職、得佛公薩隅日三州守護職下文、及封拝年月不見旧譜、而島津譜略、島津系図、並以為文治二年、按道鑑公旧譜、康安二年六月、上足

利幕府書云、右大将家封吾祖豊後守某於島津御荘日隅薩三州、事具文治三年九月九日下文、其言足徴、故今書於此日、下文云云、然按道鑑公書、当時尚有下文存、蓋先是、藤内遠景使者、矯稱總追補使遠景之命、侵暴島津荘、至是、頼朝降下文以止之、又以公為押領使、拠得佛公旧譜、押領使、猶言鎮撫使、大日本史源頼朝伝文治二年十二月、以天野遠景為筑紫奉行、今遠景使者矯称総追補使遠景之命者、由是爾、和事始引筑後風土記云、古者筑後・筑前両州之間、有峻坂、行人所乗馬鞍轡為之磨尽、因名之曰鞍轡尽坂、而筑紫之称自是始云、

四年戊申、事缺不書、

113

「清水寫明寺蔵」

座主僧覺源謹辞

沽渡進傳領田地事

在噌於郡

内取条壹里

字花牟礼田肆段佰捌拾歩

内二段半者南峯副、字藤二郎作

内二段者北東峯脇、字矢伴太作

右、件田地者、自講泉(衆カ)故常圓房之手、所傳領得也、雖然、依要用天、相副沽券、限永年、宮主應蓮房所沽渡進實也、但於本役等者、除畢、彼沽券之狀仁明白也、仍為後日沙汰、沽券如件、

文治三年二月廿五日　　座主僧在判

「在ロウラ」

「花牟礼田文□等案」

「在裏」

「晩了代郡領　(花押)」

114

寄進

先祖相傳所領三ヶ所事

在管薩摩國内伊作并日置北郷同南郷外小野

副進次第調度文書等

右、件所領田畠等者、年來嶋津御庄寄郡也、而天下騒動之間、公私為軍地、人民百姓併逃散畢、然間庄國両方課役、如何可令勤仕哉、於于今者、令寄進一圓御庄御領、致安堵計畢、有限於年貢所當物等者、為重純沙汰、追年無懈怠可令運上京都之狀如件、但為後代證文、於下司・郡司・惣公文職者、重澄以子々孫々、不可有相違旨、為被成下御下文、勒狀以解、

文治三年三月　日　　平重澄判

115の1

「清水寫明寺蔵」

「ロウラニ」

「萩原田本證文案文」

散位檜前篤平謹言

渡進　先祖相傳私領田地字萩原田事
在曽野郡内糸丸名壹町伍段事
但内薗貳段　加石本壹段在判
右、件田地、依奉憑現世後世之師匠と、限永年、所假名大樂、所令渡進實也、但除万得御名ト公田之内畢、於所當物者、依爲止上居取内、不可弁濟之、兼又於本役雑公事、付本名畢、仍爲後代之證文、渡文如件、
文治三年四月十一日
嫡子僧在判
地頭散位檜前

115の2
「伊地知季安考」
攝津檜前忌寸、坂上大宿祢同祖石占忌寸同祖、火撫直、後漢靈帝四世孫阿智王之後也、

115の3
『全』
姓氏錄檜前舍人連、火明命十四世孫波利那乃連公之後也、季安云、火明命ハ瓊々杵尊ノ兄ニテ、其子ハ天香山命ト云ヒ、此檜前舍人連・笛吹連等ノ祖ト言ヘレハ、今國分郷ニ在ル鹿子山モ此命ノ由縁カ、冨ノ隈テフ地モ、此乃玖麻ヨリ訛レルノ遺名カ、此ヨリ上ノ承安三年十一月ノ解狀ニ云ル、神武天皇ノ御宇、笛竹貢御所ニ定ラレシト傳ヘタルモ、笛吹連ラカ由縁ノ遺跡ニ寺ヲ創セシ乎、又酒井姓モ大隅ニ上古ハ繁昌ス、火明命八世孫邇倍足尼之後トテ、坂合部宿祢ヨリ此レヲ後ニ酒井トツヽメタルカ、皆瓊々杵尊ノ御兄ノ流也、又右京神別ノ坂合部宿祢、則火闌降命八世孫邇陪足尼之後也トモアリ、

116
『正本在加治木桑波田氏』
（源頼朝）
（花押）
下　大秦元光
可早如元令安堵薩摩國牛屎院事
右、件所相傳知行、至于去年云々、而小城八郎重道依申有證據、仰嶋津庄惣地頭惟宗忠久左兵衛尉、宛給郡司弁濟使訖、然而重道已無相傳之由欽、早停止重道之沙汰、以元光如元可令安堵院内、但云庄方、云國衙、任先例、無懈怠、可令勤仕課役之狀如件、以下、
文治三年五月三日　「此文書御譜中ニ在リ」
「薩摩國牛屎院司　右大将源頼朝御判也、前ニ在、大秦元光ノ代安堵御下文也」
（張紙）
「此正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ内ニ在リ」

117の1

文治三年未五月、基光・元能就牛屎院之訴訟、頂戴本領安堵之御教書、如薩摩令歸國之時、鎌倉之公事奉行平五盛時、被遣鎮西守護天野藤内遠景、其書狀曰、

117の2

（花押）「頼朝公御判」

薩摩國住人大平基光并舎弟後平二元能、企参上入見参、所被歸國也、可被存其旨給者、仰下如此、悉之、

（文治三年）五月三日　（平）盛時奉

（天野遠景）伊豆藤内殿

「大平ハ薩州伊作郡ノ内祁答院ニアリ、凡大平家ノ子孫牛屎・羽月・山野・鳥越・淵邊・太田・青木・入山・屋代・入田ノ十一家皆同姓ナリ、内大平・鳥越ハ其村祁答院ニアリ、余ノ八家ハ牛屎ノ院ニアリ、後平二元能ハ基光ノ弟也」

118の1

（本文書ハ一一六号文書ト同文ニツキ省略ス）

118の2

「伊地知季安考」

大秦氏ノ古來ヨリ牛屎院ヤ大隅桑原郡ナトニ居テ、織モノヲ弘メシコトハ、行脚僧雑錄ノ註ニカキ置タリ、忠久公ハ、本院三百六十町嶋津御庄寄郡ノ地頭ナリ、左アリテ、郡司領永松二百四十町カ國衙ニツキ、弁濟使分ノ幸万五十五町カ島津御庄方ニツクナラン、圖田帳ニ見ヘタリ、

119

（頼朝）在御判

自近衛殿被仰下嶋津庄官訴申、爲宰府背先例、今年始以押取唐船着岸物事、解狀遣之、早停止新儀、如元可被付庄家也、適爲被仰下事之上、如狀者、道理有限事也、仰旨如此、仍執達如件、

「文治三年カ」五月十四日　（平）盛時奉

「遠景コトカ」伊豆藤内殿

120

『入來永利氏文書』

（外題）「可依先例、又有子細者、可言上之狀如件、

彈正忠三善（花押）」

薩摩國住人大藏種章解　申請　留守所裁事

請被殊任且解狀之旨、且依先祖相傳之理御裁許、御庄御領薩摩郡内山田村者、故信（件）明先祖相傳所領也、然種章妻依爲信明嫡女、所領田畠皆以所讓得、且證文明白之間、御外題被成賜之狀、

右、謹檢案内、件所領者、故信明先祖相傳所領也、而代

代領掌間、無他妨、隨無異論人、且仁六大夫兼宗、彼郡爲弁濟使職、有限地頭職、暫之程令押領之許欤、同高城郡内車内村弁濟使御下文明鏡也、然字富山四郎太夫則忠カ近代無御下文令押領之条、言語道断者也者、任相傳之理、件職欲被御外題成賜者、將仰　憲法貴之(ヤヽ)貴之旨、仍勒在狀、言上如件、以解、

文治三年七月　日　　大藏種章上

121

「在嶋津安藝守久雄」
(源頼朝)
(花押)

下　嶋津庄

可早停止藤内民部遠景使入部、以庄目代忠久爲押領使、致沙汰事、

右、号惣追捕使遠景之下知、放入使者、寃凌庄家之由、有其聞、事實者、甚以無道也、自今以後、停止遠景使之入部、以彼忠久爲押領使、可令致其沙汰之狀如件、以下、

文治三年九月九日

「此文書、御譜中ニ在リ」

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ中ニ在リ」

122

「東鑑」

文治三年九月九日丁未、比企尼家南庭白菊開敷、於外未有此事、仍今日迎重陽、二品并御臺所渡御彼所、義澄・遠元以下宿老類候御共、御酒宴及終日、剰献御贈物云云、

123

『清水臺朗寺蔵』

宮主僧壽覺謹言

渡進水田肆段佰捌拾歩

在噌於郡

内　取条壹里

字花牟礼田内肆段百捌拾歩

内二段半者南峯副　字藤二郎作

内二段者北東峯脇　字矢伴太作

右、件田地ハ、自故成円房之手、被免除本役、當座主買取之了、而壽覺自座主之手、猶買得之了、而相副本主等之證文貳通、千部讀誦法花經内百部布施新、義雲房限永年、所渡進之實也、仍爲後日證文如件、

文治三年九月十九日　　宮主僧在判

124 「延時氏文書」

□子謹言

譲渡所領田畠等坪〻并羽嶋田嶋壹曲事

合

薩摩若松名内拾参町　但加羽嶋浦定

字尋田五段　口町壹町

畠田三段　垣尻三段

又平田一丁　海町一丁

中腹比七段　川口五段

加治目迫五段　小峯本二段

川良田七段　早水尻四段

赤早水二段　桑木丸七段

柳田五段　智聖房作七段

石本五段

羽嶋浦坪〻

正原田一町　大苗代五段十

西原田一町五段十　秦三郎作七段卅

右、件於名田等子細者、父故大目伴信明朝臣先祖相傳之所領也、然各〻所被處分也、但於本公験手次者、嫡女所譲得也、於于今者、依爲妹女、所譲如件、但爲不知嫡女、有他人沽与者、本主返付、可致沙汰、以解、件文請取了、

文治三年十月廿五日　伴三子（花押）

125 「國分宮内澤氏蔵」

下　公文所

定補田所職事

僧永耀

右以人、補任件職畢者、可隨彼所堪之狀、所仰如件者、神官等宜承知、不可違失、故以下、

文治四年正月十二日　――判　――判

126 『入來永利氏文書』「此文書伊作家久長譜中ニ在リ、写在巻本トアリ」

立券

言上薩摩國寄郡内殿下新御庄四至事

在

伊作郡加外小野定

四至　東限谷山境　西限海

南限小桃崎并上毛夜木瀬任下塩道大牟礼

北限外小野北波多邊目置峯波多々尾上黒河戸淵

弥勒寺領

自余略之、

右、依平重澄寄進證文、被成下政所御下文并國司廳宣畢、隨任庄國施行等、宜立券言上如件、

文治四年十月　日　　下司平在判

書生散位藤原代在判

使藤井在判

「此写、伊作家文書中ニアリ、文保參年六月ノ文書次ニ載セタリ」

127

「管窺愚考中」

文治四年十月日立券狀案云、薩摩國寄郡内殿下新御領四至事、右伊作郡日置北郷除弥勒寺庄、右依重澄寄進證文、被成下政所下文并國司廳宣訖、任庄國施行之旨、立券如件云云、取要、又建永・嘉禎手継狀云、日置庄領与弥勒寺爲各別云云、日置者島津庄也、其内弥勒寺者、八幡宮領也云云、

128

『島津家譜中』「頼朝譜中」

文治五年己酉閏四月晦日、伊達次郎泰衡任勅定、襲陸奥國衣川館、誅源義經畢、

文治五年七月十九日丁丑、爲征伐奥州泰衡、巳時進發鎌倉、八月七日甲午、到于伊達郡阿津賀志山邊國見澤、泰衡日來聞頼朝發向之故、築城壁於阿津賀志山、堀亘五丈堀、堰入逢隈河流爲柵、以異母兄西木戸太郎國衡、爲大將、置金剛別當秀綱已下勇士二萬騎、山内三里之間健士充滿、同八日乙未、先試遣畠山次郎重忠・小山七郎朝光・加藤次景廉・工藤小次郎行光・同三郎祐光等、始箭合、秀綱等雖防戰、及巳時賊徒退散矣、又泰衡郎從信夫佐藤庄司継信忠信之父、陣石那坂之上、堀隍、懸入逢隈川水於其中、引柵張石弓、相待寄手、爰常陸入道念西子息常陸冠者爲宗・同次郎爲重・同三郎資綱・同四郎爲家等潛進出株中、到伊達郡澤原邊、稱先登飛羽箭、佐藤莊司等爭死競戰、爲重・資綱・爲家等被傷、然而爲宗忘命攻戰、爲宗兄弟獲莊司已下十有八人之首、梟于阿津賀志山上經岡也、莊司此時不死委曲末条有之、

同十日丁酉、越阿津賀志山、攻寄國衡之所守城壁、闘戰響山谷、動郷村、而未決勝負之際、勇士等攀登國衡之城門上後陣山、揚鬨飛箭、由是城中騒動、已稱搦手襲來、國衡已下悉以逃亡、和田小太郎義盛射國衡、而駕駿馬逃去、畠山小次郎重忠之從軍大串小次郎追後、獲其首也、

八月廿一日戊申、甚雨暴風、雖然追泰衡、向岩井郡平泉之

路、雖有兩所要害共敗績、故已到于津久毛橋、于時梶原平二景高、詠一首和歌曰、

陸奥乃勢ハ御方につくも橋渡して懸ん泰衡か頸

祝言詠歌所以催感、

八月廿二日己酉、入平泉館、主者已逐電、家者又化烟、累跡郭内寂寞無人、只颯々秋風有入幕之聲耳、當于坤角有一倉廩遁餘焰難、使人開之、則所藏七珍萬寶、非言得而摭所也、

同廿六日癸丑、日出之程、四夫一人推參旅館、投入一封之書忽然逐電、其書表云、進上鎌倉殿侍所、泰衡敬白云云、狀中云、伊豫國司事者、父入道奉扶持訖、泰衡全不知濫觴、亡父之後請貴命奉誅訖、是可謂勲功欤、而無罪而忽有征伐何故哉、依之去累代在所、交山林尤不便也、兩國已可爲御沙汰之上者、於泰衡蒙免除、欲列御家人、不然者被減死罪、可被處遠流、若垂慈惠有御返報者、可被落置于此内郡邊、就其是非歸降、可走參之趣載之、

九月二日己未、發出平泉、欲赴岩井郡厨河邊、尋捜泰衡隱所、且復曾祖父將軍爲追討朝敵、十二箇年之間雖所々之致合戰未決勝負、遂於厨河柵、獲貞任等之首、依曩時佳例、欲泰衡之得首也、

九月三日庚申、泰衡欲逃夷狄島、而到于肥内郡贄柵之際、累代郎從河田次郎弑泰衡、而持參其首於陣岡也、

九月四日辛酉、到于志波郡、泰衡之親昵俊衡法師、周章驚動、燒失比爪館逐電、北陸道追討使比企四郎能員・宇佐美平次實政等靡出羽國狼戾、而今日參加共軍士廿八萬四千騎也、

九月十五日壬申、樋爪太郎俊衡入道并五郎季衡爲降人、參厨河也、

同月十八日乙亥、秀衡四男本吉冠者高衡爲降人、下河邊莊司召進之、又泰衡一方後見熊野別當上總介義兼召進之、凡残黨今日悉以獲焉者也、

同月廿七日甲申、歴覧安倍頼時之衣川遺跡、郭土空残秋草鎖兮、數十町礎石何在、舊苔埋兮、百餘年、頼時掠領國郡之昔、點此所構家屋、男子者井殿盲目厨河次郎貞任・鳥海三郎兼任・境講師官照・黒澤尻五郎正任・白鳥八郎行任、女子三人共八人、男女之宅并簷、郎從等之屋、西界於白川關爲十餘日行程、東據於外濱又十餘日行程、當其中央遙開關門、名曰衣關、宛如函谷、左隣高山、右顧長途、南北同連峯嶺、産業亦兼海陸、三十餘里之際並殖櫻樹、至于四五月残雪無消、仍號駒形嶺、麓有流河而落于

南、是北上河也、衣河自此流降、而通于此河、凡官照小松橋、成通（真任後見）琵琶柵等舊跡、在彼青嚴之間云云、

九月廿八日（乙酉）、敗泰衡之邊功、掌俊衡等已往、欲還向鎌倉、所召具之囚人於諸所放免者多矣、

十月二日（戊子）、囚人佐藤莊司・名取郡司・熊野別當厚免各歸本處也、

十月廿四日（庚戌）、申時歸着鎌倉也、

十一月三日（己未）、京都飛脚參着鎌倉、賜御感　院宣曰、（去九月在奥州之際、遂言上、其御返答也、）

羅索事、御不審之處、委聞食訖、不廻時日追罰之條、古今無比類事欤、返々感思食之由、　院御氣色也、仍執啓如件、

十月廿四日　　太宰權帥

源二位殿

奥州降人事

只可計沙汰也、但於可爲　公家御沙汰者、雖不進京都、可被下流罪　官府欤、可隨重申狀、

勸賞事

征罰早速、猶々感思食、隨計申可有勸賞、按察使有闕、被任如何、郎從之中、有功之輩可注申、尤可被行其賞也、

129

「島津國史」

「文治五」五年己酉、春、源頼朝徴兵諸國、二月九日、遺　公書、令引兵會鎌倉、（拠得佛公旧譜、島津譜略、）秋七月十九日、源頼朝自將東擊陸奥押領使藤原泰衡、以畠山重忠爲先鋒、（拠東鑑、）軍士咸請萬壽君、爲先鋒總督、萬壽君者頼家也、時年八歳、其母政子不肯、會　公率兵至自薩摩、重忠乃言於政子曰、蓋言此人於幕下乎、政子曰、吾亦聞之久矣、今且欲見其人、可乎、重忠曰、可也、因與政子約曰、著左折之烏帽子、衣直垂之背縫綻者是也、於是、令　公與諸將子弟俱坐于廷上、政子隔簾見之、於是、乃重忠俱請於頼朝、不許、固請、乃許之、因使重忠奉　公爲先鋒總督、　公時十一歳、（拠島津譜略、）八月十二日、頼朝至多賀國府、（拠東鑑、）十五日、賜畠山重忠手書曰、明日當宿陣原、爲我調護三郎、且戒軍士、毋得爲寇掠、（拠島津譜略、此書原文以国字為之、纏纏数十言、今撮其大旨而叙次之、）三郎者、公小字也、（同上、）二十日、頼朝發玉造、如平泉、戌刻發書、徧諭三浦十郎・和田太郎・小山小四郎・畠山次郎・和田三郎及武藏黨云、卿等進至津久毛橋、敵必於平泉完聚、以待之、卿等愼勿以寡兵邀之、宜整衆軍以擊殘寇、（拠東鑑、本府国史館藏此書、書尾曰、八月二十日戌刻、月日刻与東鑑、吻合、但書用仮名、而辞加詳、蓋当時所下文也、抑書辞偏告畠山重忠等、殊無及公者、然当此時、重忠奉公為先鋒総督、則告重忠等者、乃所以告公云、）頼朝既滅泰衡而歸、以

公爲若狹國守護職、其後　公以其外弟兵衛尉忠季爲守護代、拠島津譜略、東鑑正治元年十月二十八日、連署六十八人、忠季預焉、書曰若狹兵衛尉忠季、按丹後局適八文字民部大輔生男、即忠季也、外弟、見左伝成公十一年、冬十月三日、賴朝使盛時遣　公奉書曰、北郷弥太郎兼秀、求襲辨濟使職、此人有軍功、亦可賞也、十一月下文命　公曰、征奥之役、日置兼秀有功、宜補北郷辨濟使職、拠得佛公旧譜、市来人北郷新兵衛家蔵文書、日置氏、祖曰兼久、為日向方北郷・薩摩方日置南郷等処弁済使職、由是、子孫或為日置氏、或為北郷氏、兼秀、兼久之玄孫也、方猶言地方、郡村高辻帳、荘内有南郷北郷之称、木前村、後校村、安久村、田邊村、梅北村、屋敷村、中裏村、大裏村凡八村為南郷、安永村、前川内村、横市村、金田村、今平村、石寺村凡六村為北郷、而木前村至屋敷村、安永村至石寺村合十二村、今属都城、中裏村、大裏村、属末吉郷、日置亦有南郷北郷之称、永吉村、吉利村凡二村為南郷、日置村、山田村凡二村為北郷、而永吉村即今永吉郷、吉利村即今吉利郷、日置村、山田村、今属日置郷、又日州飫肥有南郷北郷之称、其地今属他国、

130

「御家譜増補中」

(の1)

舊譜云、奥州之太守伊達二郎泰衡者、扶持欲爲叛逆企錯乱天下之義經、違背所受　天明命撫育四方之　勅命、其罪無由欲宥、是以俟秋涼之佳時、將往以討焉也、於茲乎、文治五年己酉之春二月上旬、豫達勇士催促於遠方、忠久素在領國而受件之　御教書、因茲、使日隅薩三州中勇士量時節、帶兵器、經海陸、到關東、則七月十九日、賴朝卿自將從中路向奥州、東海道北陸道共三道伐入陸奥出羽、而未經幾程、先誅太郎國衡、次獲二郎泰衡之首、且迄黨徒悉以退治去、而後十月廿四日、還著于鎌倉也、累世相傳所記左方之下文、其時軍士催促之書也、未知是乎否、竊附己意、推以按之、則時節與文理殆乎符合、顧夫是欤、

(の2)

譜略曰、文治五年二月、右大將爲泰衡追討之催、故下書於忠久、而徵島津兵士、且爲謁見招忠久、於是乎、父子之恩情見文詞者可見也、

131

「義經傳中」

一文治五年己酉閏四月三十日己未、於陸奥國衣川館、爲伊達次郎泰衡所襲、自殺於持佛堂、享年三十一、

132

「賴朝公傳中」

一文治五年己酉七月十九日丁丑、發鎌倉、征伐伊達次郎泰衡・西木戸太郎國衡於奥州、十月廿四日庚戌、還着鎌倉、

133

「忠久公御譜中」

（本文ハ一三〇の一号記事ト同文ニツキ省略ス）

134

（源頼朝）
（花押）

下　嶋津庄地頭忠久

可令早召進庄官等事

右、件庄官之中、足武器之輩、帯兵杖、來七月十日以前、可參着関東也、且爲入見參、各可存忠節之狀如件、

文治五年二月九日

135

嶋津庄〻官等、不隨惣地頭忠久下知之条、庄官等之企、尤以奇怪、有對捍之輩者、可令注申給者、前右大將殿仰如此、仍執達如件、

七月十日　　（盛時）平（花押）

「宗ハ則惟宗也、兵衛尉ハ則忠久也」

宗兵衛尉殿

「以上二通ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニ在リ」

「右二通ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニ在リ」

136の1

「御譜中」

忠久已發遣軍士、而自亦爲拜謁慈顔至鎌倉、當家舊史曰、右大將奥州發向之前、命先鋒於畠山重忠、時諸軍士等僉曰、使若君爲副將、總統先陣是所希也、然萬壽（頼家卿之幼名）、君僅八歳、母夫人平政子不容之、於是重忠（時重忠政子之妹婿也）、告政子曰、右大將通丹後局所生之子、居於惟宗廣言之宅、盍擧彼人以代若君乎、政子甚喜曰、吾亦聞有此人、未知其器、速欲見之、然蜜妾之子何面覲之乎、重忠宜謀之云云、忠久時十一歳、重忠使之着左折右總之烏帽子、（此法烏帽子之工人相伝至今、謂之島津折）、綻直垂之背縫以爲標、與諸大名之子弟等同列、而坐于營中、政子隔簾見之、與重忠俱擧于右大將、右大將以其幼故不許可之、重忠頻請不措、右大將不得止遂以忠久爲副將、託重忠以補翼事、於是忠久率薩隅日之兵士、而總轄于先鋒之軍、（東鑑脱漏此事、故世不知之）、既而右大將發多賀國府、而赴於玉造口、八月十五日賜自筆教書於重忠、而告明十六日可軍次於陳原之事、且此日從軍之兵有乱入神社濫妨佛閣者、而惟先軍之兵無敢犯者、是以書中或褒之誡之、其文曰、

136の2

（源頼朝）
（花押）

あすは、こふのこなたに、ちむのはらといふところニ御すく候へし、いくさたちにハ、こふにはすくせすと申なり、かまへてひか事すな、あかうそ三郎を、やう〳〵ニせんニこひたるものゝついふくしたるなり、たうしハほうてう、庄司次郎ハ、けふのひくわんニいらす、しむへ

うなり、このくにハきはめてしむこくなり、かまへて〳〵らうせきすな、くしたるものともニみなふれまわすへし、けふらうせきしたるものともは、こさたあるなり、けふのひくわんニいらぬほとに、あすのすくにていりなんハ、ゐこんのことにてあるへきなり、

（文治五年）八月十五日　　盛時奉

庄司次郎殿

137の1

「御家譜増補中」

賴朝公御書註解

夫島津家之舊史曰、文治五年秋七月

右大將賴朝卿爲征伐泰衡發向奥州、預命畠山重忠以先陣、

時軍士等僉曰、使

若君爲副將總統先陣之軍、是所希也、然

萬壽（賴家卿之幼名也）公僅八歳、母夫人平政子甚愁幼子之遠別、

於是、重忠使人告夫人曰、先是同居于惟宗廣言（八文字民部太輔）、

之宅若人者、

右大將通丹後局、（比企判官能員妹）而所生之御子也、盍擧彼人以

代若君之行乎、夫人甚喜曰、諒有其儀乎哉、吾初聞有

此人、未知其器、今速欲見之、亦驀直乏對顔、尚不許

之、重忠宜謀之、繇焉、使忠久（一時十歳）着左折烏帽子、（此法烏帽子之工人相傳于今、是謂島津折）至直垂之背縫以爲目標、與諸大名之子弟

等同列、而朝謁營中、夫人隔簾見之、以擧

右大將、重忠亦雖擧之、以忠久亦幼故不可之、重忠頻請

不措、

右大將遂不得止、密以忠久爲奥入副將、託重忠以輔翼之

事、且與結舅婿之約、因忠久率薩隅日之兵士、總轄先

鋒之軍、既而於

右大將發多賀國府、而赴玉造之途、八月十五日、

右大將賜自筆教書於重忠、而告明十六日可次陣之原之事、

且此日從軍之中、有乱入神社濫妨佛閣而作狼籍者、惟

先軍之中無敢犯者、

右大將感重忠之能翼忠久而無過失、或褒之、或誡之、忠

久將先鋒之事、雖不載東鑑、

右大將之御書中昭晰也、是以此御書、自昔時當家相傳、

深藏笥底、以爲稽古證、今之文献矣、

あすは（明日者也、是指文治五年八月十六日言也、）こふの（国府之也、按東鑑曰、文治五年八月十三日二品令休息多賀国府、同十四日泰衡在玉造郡之由風聞、自多賀国府経黒河、令赴彼郡云云、）こなたに（此方仁也、仁者助語也、）ちむのはらと（陣之原止也、止者助語也、嘗聞伊予守頼義朝臣・陸奥守義家朝臣父子相共承命、討阿部貞任・宗任、後義家再承命、討武衡・家衡、因奥羽両州之間処々構張陣営、其旧蹟平原・高岡随地形而称之陣之原・陣岡者多矣、今是所謂陣之原亦其一乎、按

東鑑、自是後九月四日有二品令陣于陣岡蜂社之事、又按八月廿日令赴玉造郡給、則囲泰衡多賀波城云々、然則自多賀国府経六日之行程、而至于玉造之間所在之陣原乎、いふところニ云所仁也、者助語也、御すく候へし御可候也、寸久者修理亮をすりのすけといふの類、寸志者五音相通也、古今集東歌之部甲斐歌曰、甲斐かねハさやにも見しかけかれなくよこほりふせるさやの中山と、いくさたちにハ軍仁者也、こふにハ国府此等気も亦以相云也、

仁者也、すくせす不宿也、と申なり止申也、止者助語也、かまへて構而也、謂大軍之行次者国家之大事也、故預能慮定而無為不合義理之事也、ひか事すな無為僻事也、源氏爪印ニ、ひか以僻字為之、訓解謂背義理之事也、あかうそ若所也、安和共音相通、京極黄門仮名文字遣十三宇之部曰、わかうて、以幼少若弱稚之五字為之訓解、又源氏夕顔巻ニ、見くるしからぬわかうとなり、則若人也、又箒木巻ニ、あこはしらしな、爪印ニあこハ以吾子訓解、加古之音亦通ス、以宇為助語字、則あかうハ吾子也、今世亦家僕・乳母之類、称主人之若子、或曰若人、或若上、都鄙通用之言辞也、然則あかうハ二品対重忠、指御子忠久言之、御詞可見、所者方也、如某方也、古文書之中多有之詞也、偏言若所則指所不定、故三郎名則指所已定、是可言若三郎所上下文、三郎を三品之長庶子島津之元祖従五位下太乃古之文法乎、三郎を夫判官兼豊後守忠久幼名也、治承三年己亥誕生、母比企藤四郎能員之妹丹後局、二品之蜜妾也、此時忠久十一歳、を者助語也、先是元暦二年九歳而雖任左兵衛尉、二品尚以幼名三郎呼之者東鑑中其例多、源九郎義経者二品之令弟也、元暦元年八月六日任左衛門尉、同二年正月、二品賜九国之御家人等下文曰、三河守向九国、以九郎判官所被遣四国也云云、二品於忠久以義為君、以恩為父、子礼君前不言字之儀、又唐玄宗皇帝尊雖為天子猶以三郎称之、此例亦可併見也、やう〳〵ニ仮名遣十三宇之部、やう〳〵し以徴字訓解言、忠久以幼故、今度之役使忠久為先陣之総轄之義、初二品之御意無之事也、然亦以重忠専一乞焉、せんニ専ニ也、故難黙止漸徴許焉之謂也、或様々之字亦可通也、ニ者助語也、専字彙考也、誠也、擅也、独也、自是也、純篤也、言ハ重忠独抜群、老以誠意自是請之謂也、詮之字亦可通也、又一説せん者先也、先字彙前先也、然指先陣而言亦可通也、こひたるものゝ為請者之也、是指忠久言之御詞也、者、ひ者比也者、

ついふくしたるなり為付副也、仮名遣七以部、ついて以就付為訓解、以幾音相通、忠久付副于二品而総轄而在先陣也、又一説二品已命先陣於重忠之後、応諸軍之需而使忠久為副将、而在先陣則追副之義亦通也、たうしハ当時

者也、言当今之時也、ほうてう北条也、奥州之役供奉之人数交名見于東鑑、其中北条四郎・同五郎有之、庄司次郎ハ畠山荘司次郎重忠也、けふの今日之也、則文治五年八月十五日也、此日軍勢甲乙人之中、鹿妨神社仏閣而有背二品之御素願者也、ひくわんニ悲願ニ也、ニ者助語也、二品之御素願自配蛭島之時、尊神敬仏読経且亀、治承四年揚義兵以来、建立神社仏堂、或寄進神領或寄進仏餉田之事挙備東鑑、就中越奥州之前日、召伊豆山住侶専光坊仰曰、為奥州征伐潜有五願、汝持戒住侶也、候留守可祈精、将又進発之後、計七箇日、於此亭後山可草創梵宇、自立置柱許、於営作者以後有沙汰者、専光申領状云云、如此則鹿妨神社仏閣之事、於二品之御心非願可知也、いらすしむへうなり不入神妙也、褒美之詞也、このくにハ此国者也、是指大倭日本国言乎、又指奥州亦可通也、きはめて極天也、天者助語也、しむこくなり神国也、かまへて〳〵註見上、再言者叮嚀反復之情可見也、らうせきすな無為狼籍也、韻会狼所臥草皆披離雑乱貌、又蘇子前赤壁賦曰、殺核既尽杯盤狼籍矣、くしたるものともニ為具者共ニ也、ニ者助語也、みなふれまわすへし皆可触廻也、けふらうせきしたるものともは今日為狼籍者共者也、こさたあるなり有御沙汰也、此時最可有爾也、後九月九日二品称徳天皇逗留蜂社、而其近辺有寺、曰高水寺、是為勅願諸国被安置、一丈観自在菩薩像之随一也、彼寺住侶禅修房已下十六人、参訴于此旅店事、其故者御野宿之間、御家人等僮僕多、以乱入当寺、放取金堂壁板十三枚畢、冥慮尤難測、早可糺明者、二品殊驚難給、則可相尋之旨召仰景時、景時尋糺之處、宇佐美平次僕従所為也、仍召進之、於衆徒前加刑法、可散彼鬱陶之由、重被仰出之云々、此等之事可併按也、けふのひくわんニ註見于上、ニ者助語也、いらぬほとに不入程ニ也、あすの明日之也、則指八月十六日也、すくにて宿ニ而也、ニ者助語也、いりなんハ入南者也、者助語也、言可入也、ゐこんの遺恨之也、之助語也、ことにてあるへきなり事ニ而可有也、ニ助語也、

八月十五日八月十五日也、

庄司次郎殿荘司次郎殿也、畠山重忠也、

「頼朝公之右筆平民部丞」盛時奉盛時奉也、武衛託名所下也、

右之教書、文詞古雅にして間難通處有之ニ付、手前爲覺書付置候、句解茂一所に相添進之候、

元祿十三年十月　日　　薩摩守源綱貴

137の2

「季安補」

東鑑文治四年五月十七日、今日被定云、御忿劇之時、御教書不可被載御判、可爲掃部頭判、若故障之時者、可爲盛時判之由云々、

137の3

季安按、東鑑文治三年十月廿五日、盛時奉　因幡前司殿ト宛タル狀ノ章云、仰盛時被遣御書於廣元許也トアレハ、此例ナルヘシ、

137の4

大玄公舊譜曰、元祿十三年之冬、從五位下林大學頭信篤之曰、島津家元祖豊後守忠久者、　右大將賴朝公之長庶子也、然而是皆在世之稗説、未知其證之明實也、因請搜當家之藏、求所自出之源、於是綱貴聞之、文治五年之秋　大將軍奥州時、賜先鋒于畠山重忠、乃依重忠之求、使忠久爲副將、重忠輔翼之、是時　大將自書教書賜于重忠、其書存當家也、雖然文詞古雅而以難辨別、故句解之且摸寫、薩隅日三州守護職之下文併書當家之譜略、而家臣田中五右衞門國明（時国明為記録官司）、達信篤、信篤閲之大賞嘆曰、大將之後胤既決矣、何爲豈疑之也、乃信篤下筆而書教書之跋、又爲譜略之序、而授于綱貴、以笥藏之爲家珍、於是書寫教書・句解及譜略而莊潢（装）之、寄捨武州之聖堂、詳見于左、

覺

一嶋津家之舊記ニ相見得候者、右大將賴朝卿泰衡を爲征伐、文治五年秋七月奥州ニ御發向候、其以前畠山庄司次郎重忠ニ先陣を被仰付候、然處、諸軍勢承之、願者右大將御子之内御一人先陣之大將ニ而、御進發被成度由、一同ニ申候得共、其時萬壽公（賴家卿之幼名也）之八歳ニ被爲成候故、御母儀平政子御納得無之由、

一重忠者、政子之爲ニ妹婿其縁を以被申上候者、此より以前、八文字民部太輔惟宗廣言之許におハしまし候つる若人社、右大將之蜜妾丹後局之腹に出生爲被成御子ニ而候、何とそ彼人を御吹擧候而、萬壽公之御代ニ、奥州江被向候而者如何可有御座哉と候つれは、政子悦喜被成、誠ニ其人之儀者兼てより被聞召及候、さりなから其器量をいまに無御存ゆへ、御覧し度ハ思召候得

共、蜜妾之子驀直之對面難叶間、たゝ物越ニ御覧被成度旨被仰付、重忠か計にて政子之御目標として、忠久此時十一歳、幼名三郎、元暦二年於頼朝前初冠す、于時重忠加冠を勤、忠久と号し、且又重忠と臍帶之契約を結はしめ給ひ、忠久幼少之間、重忠能可致輔翼旨被仰付候、に左折之烏帽子 此法烏帽子之工人相伝候 而、今以島津折と唱候、を着せ、直垂之背之縫めを綻せ、諸大名之子共と同しく出仕をなさせ候處、政子者簾を相隔被爲見候由、

一左候而、忠久を奥州先陣之大將ニ可被仰付旨、政子右大將江被爲申候得共、忠久未幼少之事ゆへ、御許容不被成候處、重忠頻ニ申上、無止事申請候ニ付、難黙止思召、則忠久を副將に命せられ、先陣之大將として重忠に能〻輔翼可仕旨被仰含、依之忠久薩隅日之兵士を引率し、重忠に補佐せられ、奥州先陣之大將として、副將軍を相勤候、

一右大將多賀國府を御進發被成候由、玉造ニ被爲赴候途中ニおゐて、八月十五日右大將御自筆之教書を重忠ニ被下候、其趣者、明十六日陣之原ニ御宿被成へし、軍たちニハ國府にハ不宿之条、幼少之三郎忠久先陣ニ總轄として有之候間、僻事無之様ニ能〻輔佐すへし、今日すてに從軍之中ニ神社乱入し、佛閣を濫妨し、様〻致狼籍者共有之候得共、先陣之中ニ計狼籍者一人茂無之者、重忠か能忠久を致輔翼候故を以無過失事御感被成、或褒之、或被誡之候文詞ニ而御座候、

一忠久、奥州先陣之大將として副將ニ被命候儀、東鑑ニハもれ候へとも、忠久右大將之長庶子として奥州進發之節、副將を相勤候事家傳分明ニ候、其上右大將家自筆之御教書代〻つたへ來り、于今致笥藏候當家珍藏之文書ニ候得共、此度不違字畫左ニ令摸寫、他日之參考に備ふる耳、

「御教書句解見于上故略之」

138の1

題

鎌倉將軍右大將公手書後、

古曰、皐陶之後封於英六、衆國已滅而英六独存、是知積善之家必有餘慶也、從五位下豊後守源忠久者、鎌倉幕府右大將頼朝公長庶子也、其系譜連綿、家寶授受、明證遺美、口碑傳銘、原夫、文治五年幕府征伐奥州、以忠久都督諸軍、然齢未成童、以畠山莊司重忠、爲之監護、幕府授手書於重忠、以達于忠久、手澤現存、教諭丁寧、二十世孫、薩摩羽林綱貫、裝潢緹襲、而爲家珍之最、且作句解以貽孫謀、嗚呼赤刀大訓和弓垂矢者、周之至寶也、然東

遷之後失其傳也、羽林継其系統、保其家祿、傳其寶器、藏其手書、則列侯雖滅、独存其國者、積善所致而猶祝餘慶于後裔、因爲之跋、

元祿十四年辛巳春三月嘉辰

從五位下守大學頭藤原信篤謹作書

138の2

薩摩羽林源君綱貴者

鎌倉右大將頼朝公之裔也、其家藏　大將手書、距今五百年餘、字畫不消、手澤猶新、羽林錦緹襲之、彩匣蓄之、余作跋書以爲後證、此一巻者乃所摸臨也、羽林裝之、筥之、奉納於武州昌平坂　聖堂、而貽後鑑、因書巻尾以祝將來、云爾、

元祿十四年辛巳三月嘉辰

從五位下守大學頭藤原信篤識

139

一譜略曰、然後八月二十日戊時、右大將手自書和字檄文、而廻先陣之軍中、忠久以爲總轄之、故此書存于當家、嗚呼惜乎、書端朽損而今存其半、然其文詞與東鑑吻合者也、

140

これにもつかせ給はんするに候、ほうてう・みうらの十郎・わたの太郎・さうまの二郎「小二郎師常」・おやまたのもの・おくかたせんち「先陣」したるものとん、わたの三郎ひとりももれす、むさしのたう〳〵のものとも、このけちをたかへす、しつかによすへし、廿一日にひらいつみへつかむといふことあるへからす、さうなをはせても、かたきをおいなひけても、いかてかをいつくへき、たゝつくもはしのへんまてをいつくことやあるとてこそ、おゝせたひつれ、かまへて、せい二万きを、まかりそろうへし、あんない「案内者」さ「共」とも申せはとて、あふなきことすへからす、いかさまに「馳」も、ものさはかしく、こゝろ〳〵にはすることあるへからす、この御ふみをひとりみてハ、したいニやり〳〵して、おの〳〵御返事を申へし、かさねて二万きをまかりそろうへし、

「文治五年」八月廿日　　いぬのとき

141

東鑑曰、文治五年八月二十日丁未卯尅、二品令赴玉造郡給、則圍泰衡多賀波々城給之處、泰衡兼去城逃亡、自残留郎從等束手歸降、此上者、出于葛岡郡、赴平和泉給、戌尅被遣御書先陣軍士等中、所謂三浦十郎・和田太郎・

小山小四郎・畠山次郎・和田三郎、至武藏國黨々者、面々取此御書令拜見之、得旨趣、可廻合戰計之由被載之、其趣、各追敵到津久毛橋邊之時、凶徒等避其所、於入平泉者、泰衡構城屯勢相待欤、然者僅率一二千騎、不可馳向、相調二萬騎軍兵、可競至、已敗績之敵也、雖侍一人無害之樣、可致用意者云々、

142

「御譜中」

忠久從奥州還、補若狹國守護職、數年領掌之、使異父弟兵衞尉忠季爲守護代居於彼國、若狹国守護職之下文今不伝、然按東鑑、文治元年十月二十八日六十人連署以来、書若狹兵衞尉者見於処々、以是可併証、

143

一安國寺申狀云、忠季と申ハ民部太夫か子にて候、忠久一腹之御兄弟にて御入候、又言、忠季と申ハ若狹之みかたにて候云々、又西城戸の太郎追罰之時、畠山大將として奥州へさし向られ候時、重忠申されけるハ、昔貞任・宗任追罰之時、源平兩家の大將にて候重忠か先祖義家之御供仕候、いつれも同白幡にて候間、我等か先祖黒かわ一文一たけに切て付て候先例を、をハれへく候覧と申ける間、忠久十三歳にて越前國を給、奥の大將ニ御向候、重忠とり聟ニ取て、餘々の賞翫ニ大勢うちこミにて候間、自然忠久の御手の人ニ無禮をいたし候ハん事憚入候由申されける間、直衣のミぬいをとき、烏帽子の右ふさなと定られけるよし、老名とも申候し、か樣の事共書付進上申候も憚不少候へ共、重々得其意候之間、後難を不顧、心底を不残申入候、在京候し人々をめしあつめ、京都之樣當家之樣共物語をさせられ候し、今ハ思々の儀とも承候ほとに、か樣ニ申入候云々、

144

一聖榮自記云、越前嶋津一族名字越前國者、忠久奥攻之御大將御向之時、賴朝ゟ始御給候云々、又云、忠久御元服にて賴朝ニ御對面、軈而陸奥國御征伐御大將ニ御越候、去ニ依て越前之國を始て御給候、其後伊勢・信濃・若狹拜領候云々、又云、越前ニハ忠久之御子二男忠綱被差遣云々、若狹ニ者忠久一腹之御舍弟忠季被差置、三方殿ト云々、

145

「写市來士北山新兵衞藏」

（頼朝）在御判

北郷弥太郎兼秀訴うる弁濟使職事、これにハ子細を不知候之間、解狀をつかハすところ也、申所相違なくハ、安堵せさすへし、且奥入の御共なんとして、奉公ある物なり、あなかしこ〳〵、

「文治五」十月三日　盛時(平)奉

宗兵衛尉(忠久)殿

146

下　嶋津御庄政所

補任　北郷弁濟使職事

日置兼秀

右以人、依今度奥入御共之奉公、所補任彼職也、御庄官等宜承知、更不可違失之狀如件、以下、

文治五年十一月　日

前左兵衛尉惟宗(忠久)御判

「以上二通ハ御譜中ニアリ」

147

「写在國分平次郎」

頼朝判

薩摩國かこしまの藤内康友ハ、奥州へ御共して給暇、所令歸國也、かつハかこしまの郡司職、もとより知行さうゐなきよし申、可存其旨、依仰旨如此、仍執達如件、

「文治五年」十一月廿四日　盛時(平)奉

伊豆藤内(天野遠景)殿

148

古今戰云、然處ニ奥州之安平、関東へ朝敵トナラセケル、其時頼朝之御子壹人、東之御大將可然、左モ候ハヽ、東ヲ沈メ玉ハント有ケルニ、御カミ様我腹ノ頼家・實基未幼少ニ御座シマスヲ、爭陸奥迄御下シモ上セモ如何有へき哉と被思召、頼朝へ被仰候ハ誠ヤラン、御子壹人都へ御座有之由候、此君ヲ呼下シ東之御大將可然と仰ケリ、其時頼朝御嬉敷被思召、聽テ迎ヲ上セ玉フ、近衛殿名残惜ミ給テ、直垂之菊トチ一ツ形見ニ留玉フ、去程ニ鎌倉へ御下向之時、北條之カミ様より、猶〻此若君我子ニてハナシ、ホン〳〵ノ御參會ハ不可然由堅仰ケレハ、只何ト無ク御出仕之若侍之中ニ打紛テ凡御參會有ニ、誰ヲタレトモ見知セ給ヘキト有ケレハ、人〻申ケルハ、爰ニ一ツ之御記シ候、都御立之時、近衛殿ヨリ直垂之菊トチ一ツ形見ニ留給ヘハ、余之者共カ□ニ一ツ事タラス、是ヲ記ニ見玉ヘト申ケレハ、其時右シルベにて、早ク御見初給ケリ、此由御カミ様聞召テ、今者早ヤ實基之御舎弟ニ

免シ玉ヘ、左候而、直御子ニセサセ給ヘトノ玉ヘハ、頼朝一入思ひ子ニ而御座マセハ、御悦不斜、然處若宮之扉ニ虫喰シケル叟有、其故ハ、頼朝之木曽義□(高)御カミ様成セ給ニ、頼朝ゟ彼義高ハ後謀叛ヤ有ントテ、御婿成レトモ誅シ玉フ、其恨ニ親ナカラモ頼朝ヲ恨ミ申ヘシ、乍去御曹子三郎ハ、其内ニ名乗ヲ替給ヘシ、長□頼朝之カミノ子ト成セヲハスヘシ、其如クナラスハ、先三郎殿之命ヲ召シ玉ハントノ虫喰ト沙汰シケル、此由別當ヨリ申給ヘハ、頼朝大キニ驚キ、我身同頼家・實基之身之上ヲ御違ヘ有リ、様々ノ御祈念召レケリ、夫ヨリ若宮ニ御参リ有テ、武藏之國畠山秩父殿ヲ召寄、此三郎ヘ烏帽子ヲ着セ、御身之子ト名付候ヘと仰ケル、忝トテ軈而烏帽子ヲ奉リ、御名ヲ則又三郎殿ト号、御名乗ハ自身重忠之忠ト云字ヲカタ取、忠久ト定被申ケリ、其時頼朝ヨリ未主定マラヌ國ナレハトテ、越前・信濃・伊勢・若狭四ケ國ヲ給セ給、頓而東ヘ御打立被成候、其時千々部殿・本田次郎親恒娘ヲチウアヒ仕給、其腹ニ姫壹人御座候ヲ、彼又三郎殿ヘ奉リ、執婿ニ社申サセ給、去程又三郎殿御年十三歳ニて東之御大將召レケリ、畠山殿幅(副)將軍ニ而御供仕給、頼朝菊トチ一ツ付添玉ヘト有ケレハ、重忠被申ケルハ、近衛殿留給□則春日大明神御留給ニ是同、殊東之軍ニモウ勢打込ナレハ、自然見違ヘナト申サン時モ、此菊トチヲ記ニ御無沙汰申マシケレハトテ、本ノ如クにて立せ給、是ヨリ幾重召ルヽモ其如ク、扨程無ク奥ヲ沈メ、鎌倉ヘ上リ給ヘハ、頼朝大き悦給テ、又大隅・薩摩・日向三ケ國ヲ先之四ケ國ニ加ヘ七ケ國ヲ給ハラセ玉フ、其時頼朝仰ケルハ、四國・九國者平家之本領也、殊鎌倉ヨリ余遠國成故、只心遣ハ筑紫ニ有、彼三ケ國ニ我子壹人下シ給ハヽ、末代迄モ心安、惣テ九州ハ関東ヨリ諸職人下シ給ハントノタマヘハ、何レモ此事可然と申サセ給、去程ニ建久四年富士之牧狩過ケレハ、鎌倉ヲ打立下リ給、然者其先ニ薩摩ハ嶋ト津ナト多キ由聞召、嶋津殿トソ仰ケル、其如ク于今モ如斯、又御幕ハ、東ヘ下リ給刻、御打立御會尺ノ時、頼朝被仰ケルハ、我將軍ニ成ラヌ先ハ、二ツヒキリヤウ我幕ノ紋也、此二ツヒキリヤウ打違ヘ、十文字ヲ幕トセヨトテ、御箸ヲ打違ヘテ見セ給、是モ御心有テ十文字トハ定給ひケリ、其如ク建久四年八月一日鎌倉ヲ立セ給ヘ共、都ニ而近衛殿ヲ始奉リ、公家・天上人御名残ヲシタヰ御座マス、殊法王御エイ覧有テ、扨モ不思議や三井寺ニテ合戦シ、奈良ノ如ク落給　高倉之宮ニ大

方似サセ給ゾ不思議也、殊彼者ハ頼朝之子ナカラ生レ出ケル折節、神〳〵是ヲカイシヤク仕給、菟ニ角ニ只物トハ見得サリケリ、今者都ヘ留置、大内ヘ出仕ヲモサセハヤト綸言有ケレ共、頼朝ヨリハヤ可被罷下ト被仰、建久七年薩摩之如ク下ラセ給、建久四年ヨリ七年迄ハ都ヘヲハシ給ケリ、去程、其中ニ本田次郎親恒ハ薩摩ヘ下リ、様躰見ホウセテ、又御迎ニ上リ、同七年ニ御供ニ而下リ給、先出水之山戸(門)ヘ御座有リ、其後庄内ヘ移セ給、サレハ志布志其比高橋之中將一門仁禮殿トテ在之、鹿兒嶋ニ矢上殿トテ御座マス、ケ様之人〻引募リ嶋津殿ウケ候ハヽ、其時〻外山(宮)ヲ父トセヨ、梅北ヲ母トセヨ、其外三ケ國之者共可爲御家人と御教書ヲ下シ給、彼梅北・肝付・北原ナト、申ハ、大友之王子ノ後院ナレハ、仁禮殿トモ無余儀一門ニ而在之、サレハ、右大將之仰ニ隨ひ、彼仁禮殿モ矢上ヲモ三ケ國□一身ニ而絶亡ひ給ケリ、其後鹿兒島ヘ御坐所ヲ定玉イテ今モ如此云〻、

149 「島津氏譜中　頼朝公傳中」

建久元年庚戌十月三日庚申、有上洛之企、而進發於鎌倉、

同十一月七日丁巳、入洛、秉燭之程入六波羅新亭、同月九日己未、將　院參聽直衣、申時出六波羅先參　仙洞、直衣網代車也、大八葉文、於　六條殿仙洞也、昇中門廊候公卿座端、戸部卽被奏之、　法皇出御常御所南面廣廂緣敷疊、依戸部引導參其座矣、　勅語移刻及理世御沙汰欤、他人不候此座、臨昏黒退出也、次直參　内閑院、自弓場殿方候鬼間邊、頭中宮亮宗頼朝臣奏事由、　主上出御晝御座、摂政殿御北座、依召參簀子、小時入御、次於鬼間對面殿下、子一刻歸六波羅也、次戸部被下　院宣云、

依勲功賞、所被任權大納言也、度々雖被仰遣、依令謙退申、于今無其沙汰、而忽有上洛、爭背先規哉、參入之時、先欲被觸仰之處、令早出給之間、無左右所被行除書也、於今者不可有異儀、可令存其旨給、兼又可聽　勅授之由、同被宣下畢者、　院宣如此、仍執達如件、

十一月九日　　民部卿

謹上　新大納言殿

同十一月十九日己巳、參　仙洞、左武衛能保被參會、

法皇御對面、及數刻、

同月廿二日壬申、可被任大將之由　院宣能保奉、到來也、

同月廿三日癸酉、参　仙洞、終日候御前、又長絹百疋・綿千兩・紺絹三十端進内慶盤所也、

同月廿四日甲戌、入夜被行除目、藏人右少辨家實　宣下、

右近衛大將源頼朝

上卿別當通親卿、執筆右宰相中將公時卿、頼朝之外無任人矣、

同年十二月一日辛巳、右大將拜賀也、申一刻参　仙洞矣、

本舞蹈之後有御前召、参進透渡殿（トワタリ）即退出、秉燭以前参

内裏閑院、於弓場殿令奏慶、右中將伊輔朝臣申次之、舞

蹈畢、頭中將實明朝臣召之、参進畫御座前也、

同月二日壬午、直衣始也、藤丸薄色、堅文織物（カタハミノ）、奴袴（ヌカ）出薄

色紅梅褂（ウチキ）、野劔持笏（レウチク）、檳榔毛車、先参　仙洞、入東門候

西作會廊、依召参御前、移刻退出、次参　内、今日上下

裝束皆所以自　院調賜之也、

同月九日己丑、駕半部車、参　仙洞、件車自　院所被調下

也、

同月十一日辛卯、参　院内移刻也、

十二月十四日甲午、辞京都赴關東、前後隨兵以下供奉人等

皆如入洛時也、

同月廿九日己酉、還着鎌倉者也、

建久二年辛亥正月十五日甲子、行政所吉書始、先是諸家人

浴恩澤之時、或用判形、或用奉書、今也備羽林上將則召

返彼狀、改古書將用下文也、

政所

別當

前因幡守平朝臣廣元

令

主計允藤原朝臣行政

案主

藤井俊長　鎌田新藤次

知家事

中原光家　岩平小中太

問注所執事

中宮大夫屬三善康信法師　法名善信

侍所

別當

左衛門少尉平朝臣義盛　治承四年十一月奉此職、

所司

平景時　梶原平三

公事奉行人

前掃部頭藤原朝臣親能　筑後權守同朝臣俊兼

前隼人佐三善朝臣康清　　文章生同朝臣宣衡
民部丞平朝臣盛時　　左京進中原朝臣仲業
前豊前介清原眞人實俊
京都守護
右兵衛督　能保卿
鎭西奉行人
内舎人藤原朝臣遠景（号天野藤内左兵衛尉、衛門）

「島津國史」

建久元年庚戌、（是年四月改元建久、自三月以前猶是文治六年、）夏四月十一日改元、（拠大日本史、）初平氏時、救二院平八成直領救二院、其弟安樂平九郎爲成奪之、賴朝已滅平氏、乃收救二院、以還成直、既而成直有罪、没入之、（拠得佛公旧譜、救二或作救仁、即今志布志地、按盛時遺公書云、薩摩国救二院平八成直、為救二院地頭弁済使、志布志属日向、而云薩摩国救二院平八成直者、豈謂薩摩国人成直乎、）

二年辛亥冬十二月十一日、賴朝賜　公救二院、（拠得佛公旧譜、）

三年壬子秋七月十二日、源賴朝任征夷大將軍、（拠大日本史、）

幕府收薩摩國住人阿多四郎宣澄所食谷山郡・伊作郡・日置南郷・北郷、宣澄者平氏之黨也、冬十月二十二日、以　公爲谷山・伊作・南郷・北郷地頭職、（拠得佛公旧譜、学山録、皇朝称某国住人某、亦有所本、沈存中筆談載随州大洪山住人李遙殺人云云、是也、）

四年癸丑、初

後白河帝詔、賜進士判官重妙大隅州菱刈院、是歳、幕府又賜下文、（拠菱刈孫太郎系図、古者謂牛屎院・太良院、為菱刈両院、見系図、牛屎院見上文治三年、太良院見下、）

五年甲寅春正月十二日、重妙始居菱刈郡太良院、領本城・馬越・湯尾・曽木・大口・入山・羽月・平泉・山野等地、因以菱刈爲氏、重妙者宇治悪左府賴長之曽孫也、（拠菱刈孫太郎系図、按郡村高辻帳頭書、菱刈郡本城・馬越・湯尾・曽木称太郎良院、平泉、今属大口郷、又大口郷有入山城遺墟、）

六年乙卯、事缺不書、

七年丙辰、是歳創建淨光明寺於鹿兒島、迎宣阿上人於鎌倉、以爲寺主、（拠淨光明寺文書、按原書云、公始之国、創建淨光明寺、又云、建久七年宣阿上人始為淨光明寺主、建保元年遷化、自建久七年至於建保元年凡十八年、拠前説則淨光明寺建於文治二年、拠後説則淨光明寺建於建久七年、其説自相矛盾、今、繫是年、姑從後説、淨光明寺在今府城北十町余、）

八年丁巳夏六月、權樣藤原朝臣在判、權樣伴在判、大目大藏在判、權大前在判、目代右馬允藤原在判、注進狀稱、薩摩國地某所若干町係公領、某所若干町係寺領、某所若干町係社領、某所若干町係某官領、某所若干町係某人領、如是者凡百五十餘條、末云、舊有圖田注文、文治年中、亡於豊後冠者之乱、（拠得佛公旧譜、様字衰是據字、在判、猶言押字、注進猶言報知、図田注文、謂島鱗図冊、日向国真幸院郡司草部重兼、文治二年正月十五日進上状云、謀反人豊後冠者義實、大夫義祐、所謂豊後

冠者、蓋謂義實也、進上状、蔵於宮城家臣柿木原平右衛門之家、

冬十二月三日、政所下文、命　公誠薩摩・大隅御家人奉行人曰、毋闕内裏大番、毋略賣人、毋擅殺人、毋爲横逆、同上、内裏大番、謂王城宿衛、大日本史源頼朝傳云、建久二年正月、置政所、以大江広元為別当、初頼朝褒賞功臣、授地領邑、或用花押、或以奉書、至是換以政所下文、然観是年政所下文命公云云、則当時幕府号令率称政所下文、不特褒賞功臣、授地領邑也、

九年戊午春正月十一日、

後鳥羽天皇傳位於

土御門天皇、拠大日本史、二月二十二日、幕府賜　公飫肥南郷郡司名田、鹿屋院辨濟使名田、眞幸院郡司名田、滿家院郡司名田、穆佐院郡司名田、南郷辨濟使名田、宮里郡司名田、及前掃部頭惟澄舊邑、拠得佛公旧譜、飫肥南郷見上、按郡村高辻帳、鹿屋院即今大隅州肝属郡鹿屋郷地、真幸院即今日向州諸県郡吉田郷・馬関田郷・加久藤郷・飯野郷・小林郷凡五郷地、滿家院即薩摩州日置郡東俣村・西俣村・郡山村・川田村・小山田村・比志島村凡六村地、而東俣村・西俣村・郡山村・川田村今為郡山郷、小山田村・比志島村今隷鹿児島郷、穆佐院即諸県郡倉岡村・有田村・小山田村・蔵永村・高浜村・樋渡村凡六村地、而倉岡村・有田村今為倉岡郷、小山田村・蔵永村今為穆佐郷、高浜村・樋渡村今隷高岡郷、南郷蓋日置南郷見上、宮里即今薩摩郡限之城郷地、建久図田帳、称宮里郷七十町、蓋当時自為一郷、其後隷限之城郷、今限之城有宮里村、又按原文云、前掃部頭知行、惟澄所領、蓋前掃部頭与惟澄、各一人云、

正治元年己未、是年四月改元正治、自三月以前猶是建久十年、春正月十三日、征夷大將軍源頼朝薨、年五十三、嫡子頼家嗣位、拠大日本史、

夏四月二十七日改元、拠大日本史、

二年庚申春二月二十六日、頼家謁鶴岡八幡宮、後隊供奉二十人、　公預焉、拠東鑑、

151 （本文書ハ一六二号文書ト同文ニツキ省略ス）

152 （本文書ハ一六三号文書ト同文ニツキ省略ス）

153 「写本有之」

在御判

薩摩國救二院平八成直ハ、奉公之由申也、而件救二院地頭弁濟使職事、自平家之時、舎弟安樂平九郎爲成ニ被妨取、而今爲成謀反第一之者也、早以成直(ママ)以彼地頭弁濟使、無相違可令安堵給者、鎌倉殿仰旨如此、仍執達如件、

五月九日　　盛時(平)奉

宗兵衛尉(忠久)殿

「右ノ写御譜中ニアリ」

154 「雑抄中」

頼朝判

御教書頂戴、御一門人々被開悦眉候哉、仍先年於瀬多之忠節専一候也、爲其賞江州二郡一荘可被成知行之旨、被

仰出候旱、然實秀薩摩江下向、公私滿足此事候、殊者已帶御議之諸(ママ)候事、一族末代功勲不可過之候也、恐惶敬白、

建久二年辛亥三月廿三日　(梶原)景時

進上　新宮豊前守殿

「此文書、真偽疑アリト雖、載置俟後考」（本文書疑フベシ）

155

「島津譜ニ建久二年辛亥冬十二月十一日、頼朝忠久ニ救二院ヲ賜フトヽ云ヽ」

在御判

嶋津庄住人不隨忠(惟宗)久下知之由、有其聞、尤不當事也、慥可相從件下知、兼又、救二院平八成直殺僧了、所行之至不敵事也、於件所知者、可爲忠久沙汰之狀如件、

「建久二年」十二月十一日

「此正文、御文庫三番箱中宝鑑ニアリ、御譜中ニモアリ」

156

「島津氏家譜中　頼朝譜中」

建久三年壬子七月十二日壬午、任征夷大將軍、同月廿五日(六カ)丙申、勅使廳官肥後介中原景良・同康定等參着鎌倉、所持參征夷大將軍除書也、兩人各著衣冠、任例列立于鶴岳廟庭、以使者可進除書之由申之、遣三浦義澄、相具比企左衛門(右カ)尉能員・和田三郎宗實并郎從十人各甲冑、詣宮寺、請取彼狀也、

除書云、

右少史三善仲康　内舎人橘實俊
中宮權少進平知家　宮内少丞藤原定頼
大膳進源兼元　大和守中臣宣長
河内守小槻廣房 辞左大史　尾張守藤原忠明 元伯者
遠江守藤原朝房 元陸奥　近江守平棟範
陸奥守源師信　伯耆守藤原宗信 元近江
加賀守源雅家　若狭守藤原保家 元安房
石見守藤原經成　長門守藤原信定
對馬守源高行　左近將監源俊實
左衛門少志惟宗景弘　右馬允宮道式俊(ノリトシ)

建久三年七月十二日

征夷使

大將軍源頼朝

從五位下源信友

左衛門督通親參陣、參議兼忠卿書之、

將軍事本自雖被懸御意、于今不令達之給、而　法皇崩御之後、朝政初度殊有沙汰、被任之間故以及　勅使云云、

157

「頼朝公譜中」

建久四年癸丑四月二日戊戌、狩於下野國那須野、五月十六日癸巳、小雨、日中以後霽、子時、故伊東次郎祐親法師孫子、曽我十郎祐成、同五郎時宗推参于富士野旅館、殺戮于工藤左衛門尉祐經、又有備前國吉備津宮王藤内者、勸盃酒於祐經、同宿談話、同所屠殺、所交會之遊女手越少將・黄瀬河亀鶴等高聲號曰、祐成兄弟討父敵也、諸人暗夜迷東西之際、爲祐成多以被傷、祐成爲新田四郎被討、五郎向吾居奔参焉、頼朝取剣以將向之、左近將監能直抑留之、此間小舎人童五郎丸搦得曽我五郎、仍召預大見小平次矣、

同廿九日召曽我五郎於庭上、使人問夜討宿意、五郎忿怒云、祖父祐親法師被誅之後、子孫沈淪雖不被聽昵近、最後所存以汝等何可傳乎、直可言上、早可退去云爾、頼朝依有存念、直問其故、五郎云、祐成九歳時宗七歳以往、念報父寇、片時無忘、已討祐經雪亡父尸骸恥、遂鬱憤志者也、次参御前之條、有其故、誅祖父寵祐經、何無其恨乎、一参進遂拜謁爲自殺云云、頼朝感時宗之勇敢、内々起寛宥念、雖有猶豫、祐經息男犬房丸依泣愁訴、既亘時宗、年廿、鎮西中太令梟首之畢、

158

追仰

件所領内壹所者、可充給僧覺弁者、

又件領内於他領相交者、不能知行者、

薩摩國住人阿多四郎宣澄所領谷山郡「二百丁」・伊作郡「二百丁」・日置南郷「本地頭也」・同北郷「七十丁」・新御領名田等事、彼宣澄者、平家謀反之時、張本其一也、仍令停止件職畢、早可令知行地頭職者、依仰執達如件、

建久三年十月廿二日

平在判（盛時）
民部丞在判（二階堂行政）

宗兵衛尉殿（忠久）

「按スルニ、阿多四郎ハ本地頭ナリ、谷山二百丁、伊作二百丁、南郷ノ内ニテ、外小野十五丁、北郷七十丁、新御領ハ文治四年十月ヨリ立券ニテ、一円領ノ新庄ニ立、合セテ二百八十五丁ナリ、北郷ノ郡司下司ハ平重澄ナリ、地頭ハ宣澄ナリ、此時止ラレ、忠久地頭トナル、合四百八十五丁没官領トナリ、忠久ノ領知トナレリ」

159

「入來本田氏文書」

將軍家政所下　薩摩國山門院住人

可早以故國秀息男平秀忠領掌當院所帯職事

右人、継親父國秀之跡、可令領掌件所帯職、但於本所課

役者、任先例、可致其勤之狀、所仰如件、以下、

建久四年九月四日　　案主清原在

知家事中原

令大藏丞藤原在御判

別當前因幡守中原朝臣在御判

散位藤原朝臣

160

「島津氏譜」

一建久四年癸丑、初

後白河帝詔、賜進士判官重妙大隅州菱刈院、是歳幕府又賜

下文、（拠菱刈氏系図、古者謂牛屎院・太良院、為菱刈両院、見系図、牛屎院見上文治三年、太良院下、）

九州雖爲遠土、隅州太郎院七百餘町、爲深心一儀也、

就中、爲藤家攝政太政大臣政、訪朝家古法處、伯父

悪左府依爲崇徳院之御味方、須有清盛存旨、先應一

旦之時節、可令遠國者也、

保元元年丙子十一月朔日

161

「全」

一五年甲寅春正月十二日、重妙始居菱刈郡太良院、領本

城・馬越・湯尾・曽木・大口・入山・羽月・平泉・山

野等地、因以菱刈爲氏、重妙者宇治悪左府賴長之曽孫

也、（拠菱刈系図、按郡村高辻帳頭書、菱刈郡本城・馬越・湯尾・曽木称太良院、平泉今属大口郷、又大口郷有入山城遺墟、）

162

『正文在上町鮫島民部左衛門』

下　鮫島前司四郎宗家所

九國薩摩方阿多郡地頭并八箇所名主職等之事

右、件之所々、守先例、無他妨、不可有當知行子細處也

者、依仰下知如件、

建久五年二月　日

平（花押）

163

『全文書』

『鮫島宗家』

さめしまのむねいへ申ねんらいめんきやうのしつニより、かつハせん御下ちらのむねにまかせて、かさねたる御くゐたいらを給ハらむとおもふ、『阿多』あたのミやうしゝそのはたけらの事、

みき、くたんのあたのこほりいけのそのら、まんさうくうし・なりもつ、せん御くたしふミの狀ニめいはくなり、

さらにさうゐあるへからさる狀如件、

「忠久御判」（花押）

『正文在權執印』

八幡弥勒寺御領薩摩國新田□

弁申　参箇条

一御寶殿焼失事

右、件御寶殿焼失子細、見于先日所進解狀、件御寶殿依爲國役、令言上子細之日、被成下　宣旨并大府宣畢、因茲、付國司致沙汰之刻、至于重綱任者、令造立借殿之間、經一任畢、次親頼(藤原)任中、退本所、擬令造立新所之間、引構新所地之刻、所被謫也、次忠度(平)任加催之處、平家追討之故、任中其身已失畢、爰當國司初任、次任一兩年者、或騒動、或依飢渴、自然而馳過也、自第三四五年迄及重任七八年、追年雖致沙汰、一切所不被承引也、何況近來國土興復、人民快樂之時、不被遂彼造營者、何時哉、就中正直憲法之世、諸國七道神社佛寺破損等、注損色可令修造之由、依宣旨旨、悉所被加修復也、何當宮許于今未被遂其造營哉、而當國司重任三箇任、未曾有事也、是卽當國(司脱カ)相叶神慮欤、尤可被遂造營也、云前司、云後司、加以寄事於左右、不被遂造營者、當社及滅亡欤者、任先例、可被造營之由、欲被宣下矣、

一御立用田百八十町事

右、就同陳狀弁申云、件立用田之事、同所進解狀具也、而依豊後冠者義實追討、人民餓死之事者、一兩年之事也、何國□(土カ)興復之時、以彼例可令減合哉、且可被垂御遺迹也、但号神領、令押領國領之由、被陳申之条、無極虚言矯餝也、何郡何郷内押領哉、早可有御尋也、有限立用田者、相要郡要名、請募事既先例也、而當國司背先例、諸郡諸郷副收納使、不可令募之由、所令下知也、往古立用田尚令減合、何被押領國領哉者、任先例、可被勘合之由、欲被宣下矣、

一所司狼藉由事

右、就同陳狀弁申、云御寶殿、云立用田、并神拜沙汰、参國廳連々訴申之處、一切無裁許、被企上洛之故、爲遁自身無道、遮國司等狼藉之由、被訴申欤、但至于國廳、前櫃付封事者、前沙汰人助綱先日陳子細畢、爰付國司訴訟、所司并在廳相共企上洛、可遂一決之由、依宣下、所司等申云、所司無指誤、不及上洛、對決之時可陳申、何大乎(況カ)、自去年春比令上洛、雖相待在廳、于今未令上洛之条、非無國司理哉、何無雜怠之所司等身、可被行罪科之由、被訴申哉、是自由之沙汰欤者、任道理、欲蒙御裁下矣、

以前三箇条、就問　宣旨并國司陳狀、大略披陳言上如件、
所詮者、被遂御寶殿造營、可被勘合立用田之由、被　宣
下者、奉耀御神威、慰所司神官等愁歎矣、
建久五年五月　日　　所司等上

165

「島津家譜中　頼朝公譜中」

建久六年乙卯二月十四日庚午、有上洛企、首途於鎌倉矣、
三月四日己丑、秉燭之程入六波羅亭也、
同三月十日乙未、依東大寺供養、到于南都宿于東南院、自
石清水直所下向也、
同十二日丁酉、東大寺供養也、用乘車遂參堂、著座堂前庇
也、次　行幸、執柄以下卿相雲客多以供奉、未時有供養
之儀、導師興福寺別當僧正覺憲、咒願師當寺別當權僧正
勝賢、凡仁和寺法親王以下、諸寺龍象及一千口云云、誠
是　朝家武門之大營、見佛聞法之繁昌也、　安德天皇御
宇、治承四年庚子十二月廿八日、依平相國禪閤悪行、佛
像化灰、堂舍残燼畢、爰　法皇勅重源上人曰、訪本願往
蹠、唱高卑知識、課梓匠、而令勤成風業、代檀主、而可
終不日功者、上人奉命旨、去壽永二年癸卯四月十九日、
令大宋國陳和卿、始奉鑄本佛御頭、至同五月廿五日首尾、
三十餘日冶鑄十四度、鎔範功成畢、建久元年庚戌七月廿
七日、母屋柱二本始立之、同十月十九日上棟、而漸終其
功也、
同月十四日己亥、所歸洛也、
同十六日、及晩參宣陽門院也、
同廿七日、爲參　内、前駈兩三輩、隨兵八騎也、
同卅日、又爲參　内、殿下參會也、
建久六年四月十日乙丑、爲參　内、用車、隨兵十騎有車後
也、
同月十五日庚午、詣石清水、若子同車也、
同月廿一日丙子、參　内、又參宣陽門院矣、
同廿二日丁丑、又參　内也、
同五月十八日壬寅、詣天王寺、其路次用船也、
同月廿一日乙巳、迨晩鐘所歸洛也、
同廿二日丙午、參　内、以此次殿下對面、都鄙理世事談話
非一也、
同六月三日丙辰、息男一歳萬十四布衣、參　内、於弓場殿、賜御劔
矣、
同月廿四日丁丑、參　内、一萬織物狩衣、同參、達關東下向暇
於　天聽者也、

同月廿五日戊寅、辞京師下向關東、供奉人如入洛時也、
建久六年七月一日癸未、奉幣於熱田社也、
同月八日庚寅、申時還着鎌倉也、
此間建久七八九三ヶ年、吾妻鏡脱落、故不詳、

166の1

「島津譜中」
一七年丙辰、是歳、創建淨光明寺於鹿兒島、迎宣阿上人於鎌倉、以爲寺主、

166の2

一島津氏系圖云、建久七年八月一日、忠久年十八下向薩州、過京都、謁近衛殿、前内大臣基通公於茲、賜藤原氏云爾、

166の3

一島津譜略曰、建久年中右大將以膝丸太刀是源家重代之宝刀、長二尺七寸、冶工筑後州三池郡光世造之、波蔓幾赤銅、以銀鏤十文字、名小十文字、対前大十文字太刀、而曰小十文字也、賜忠久、珍藏以傳子孫、当家讓家督之時、以此太刀附属而為証、

167の1

建久七年創建淨光明寺於鹿兒島云々、
一名勝考云、松峯山無量壽院淨光明寺、府城の北拾町許にあり、坂本村なり、時衆宗相州藤澤山清淨光寺の末にして、開山宣阿説誠和尚、比企判官能員の二男にして丹後局弟也、鎌倉淨光明寺に住持す、建保元年癸酉五月三日遷化、
本尊阿弥陀如來立像長三尺壱寸、安阿弥作、脇侍観音勢至長弐尺、
當寺ハ得佛公相州鎌倉にありて宣阿を信し、封を受て薩摩に至給ひし時、宣阿をともなひ來り、爲に一寺を建立して、これにをくらしむ、宣阿念仏宗と見えたり、念仏宗は承安四年源空上人初むといへり、

167の2

一聖榮自記云、忠久ハ念佛宗時宗ニて御座候、法名道阿弥陀佛と奉申、御禪門名ハ得佛と承傳候、朝夕御看經被遊候、鐘題ニハ面ニ弥陀三尊御座候し、下ハ貝すり、緒ハたくほくニて候、琵琶も候ける也、御笛ニハこまも副而錦之袋ニ入、必々弓馬の道計御嗜ニあらす候、さのミに當家之事、雖難申候、世間せはきやうに篇執之謗も可有、一代たしなみ油断候ハヽ、可廢事勿論也、

167の3

一系圖云、建久七年八月一日、忠久年十八下向薩州、過京都、謁近衛殿、前内大臣基通公於茲、賜藤原氏云爾、
私曰、按當家要用歴代之私記曰、承久三年六月、忠久改惟宗氏爲藤原氏云々、又承久三年七月十二日有御下文曰、可令爲越前國守護人事、左衛門尉藤原忠

167の4

久云云、以此觀之、承久三年爲藤原氏明矣、

一酒勾安國寺申狀云、男子之由賴朝被聞召候而被召返、八文字の民部太夫惟宗の廣言あつかり申て養育申候、同たんこの御局をハ被給候てさい愛候、忠季と申ハ民部太夫か子ニて候、忠久一腹之御兄弟にて御入候、隨而初ハ惟宗氏、承久三年改姓有て藤原ト号す云々、

167の5

（本文ハ一六六の三号記事ト同文ニツキ省略ス）

167の6

一聖榮自記云、屋形延々と堺目ニ差向、無油断御心勞候とて、御慰ニ鹿兒島ゟ吉田・蒲生へ兩人之衆被申受候、左様之透を伺候而や、北原か内者城戸を持せ候者、伊集院勢を東福寺之城ニ引入、依て北原舍弟弥二郎・同太郎三郎、御重書小十文字之御太刀之御番ニ居而、兩人共打死す、御親類ニ者佐多三郎九郎、内之者ニハ天辰打死す、并式部次郎・伊地知新左衞門死す云々、

168

「菱刈重種所写旧記」

一爰ニ爲聞平家ニ小松殿末子有土佐守宗實人、是ハ源三位入道賴政嫡子伊豆守仲綱聟也、父宗實ハ打死而子共二人有ケルヲ、母是ヲ打列山林ニ隱居、軈而見出シ、此由注進賴朝ニ曰、父者雖爲平家頭領、天下有忠賴政孫也、欲助露命、建久七年下菱刈相印殿賴朝御教書曰、彼平宗實子孫雖爲朝敵、就爲源三位入道賴政孫、申請罪於　法王、露命隨被寬宥、依預下畢、

建久七年二月　日　　源賴朝判

宇□（治カ）相印殿

一右之小松子孫羽月構館居住、羽月十町・平泉五町・山野五町賄所領分、相印從重妙・重實・宗實・宗重・隆平迄四代無相違、五代子孫中絶、於是彼小松之一家繁昌シテ不名乘小松、號羽月殿、昔相印殿忘厚恩、一類共談合而大口忍落、山野・平泉手ニ付、牛屎殿ニ押成テ不隨隆平下知、正蘇・正忠・文濟・正文迄四代、押領隆平本領也、

一隆平第三子息、從十五歳發菩提心出家而上洛、坂東一成高僧、此僧爲申下使者上ケリ、折節氏寺宇治里平等院爲廢、再興而居住、使者件之子細一々申、和尚雖爲斟酌、近衞殿　帝奏聞、仍　御宥、天下無隱雖大和尚、永仁五年丁酉本城下着、請興覺寺主位、三献内鶏之女

169

「菱刈重種所写旧記」

一就京都之兵乱、牛屎之地下人赤田一黨起謀叛、執構牛屎之城櫛(柳)作敵、横領牛山、軈而頼朝爲天下之將、相良殿給求麻一郡、建久四年癸丑人吉下着、同五年甲寅相印重妙相良家ニ遣使者、牛屎之地下人赤田一類一揆起、牛山三百五十町横領、從相良家相催求麻軍兵、赤田令追罰、可預院宣、本領爲其忠恩、大口一所可捧之旨相通、同歳八月六日三千餘人立求摩人吉、其夜山泊、而七日卯刻山野之内、富氣(フケ)之川内打渡リ、山野城櫛押寄、思不寄事成レハ、我先落行、向者無一人、平泉下城ス、時刻移而不叶押寄羽月城、見山野放火、羽月軍衆馳向川崎原、揃矢崎責戦、赤田俄之事成共、連々用意之程社温(アラハレタリ)、曳具五百餘人、成羽月加勢、太良院之軍兵三千餘人、同七日寅刻立本城、竊ニ置花北山待時分、申刻勢揃而押渡花北川、古市上懸火、押寄大口城、赤田留守事成、只一時責落、赤田是見、大口被落、如離水魚、羽月川原爲拽(ヒカヘ)、求麻・太良軍兵共取籠眞中、散火煙戦、赤田無勢成、散々被散懸、一騎不残打果、牛山三百五十町只一日執返ス、大口一所其日相渡相良殿、

170

「正文在長谷場氏」

藤井正弘謹言

奉借請薗一ヶ所并少田事

右、所奉借請薗并少田者、定万(ママ)之内所領也、然　若御荘々務間ニハ、無他人所望、正弘奉借請處也、於後日者、本主可爲定方沙汰云云、仍爲後日證文、請文如件、

建久八年三月二日

藤井正弘在判

171の1

一名勝考云、稲荷大明神、郡本村に鎮座、領主假屋を距ること、子方貳拾町はかり、祭神三座、倉稲魂命・天津彦々火瓊々杵尊・伊弉冊尊、年中祭六度、正祭ハ九月十九日なり、正月元日・同初午日・三月三日・五月五日・十一月中ノ午日祭りすといふ、當社は得佛公薩隅日三州の守護職に封せられ給ひ、薩州山門院に下着し、日向方嶋津に移せ給ひて、建久八年九月建立し、氏神と崇め給ふ、社説に云、得佛公、初め摂州住吉社辺にして誕生ありし時、末社稲荷明神の擁護あり、故をもて薩隅日三州の封を受給ひ、建久七年八月薩州山門院に下着し、翌八年日州諸県郡嶋津御庄に移

り、御館造りておハしけり、祝吉の御所といふ、其年の九月稲荷社建立あり、九月七日柱立して同十九日遷宮の儀を執をこなハるとそ、此ところを嶋津といふによて俗に嶋津稲荷と呼へり、また嶋戸ともいへり、今郡本村と唱ふ、又和光寺を創建して別當職を掌とらしめらる、社司を鬼束某といふ、

一祝吉御所跡、稲荷社の辰巳方八町はかりにあり、建久八年得佛公薩州山門院より、日州嶋津の御庄に移り給ひて、御館つくりておハしましける所なり、其遺趾今に存して、いにしへの門の跡なといひて塚築きてあり、

按するに得佛公幼なくおハせし時、生母丹後局に随ひ、八文字民部太輔惟宗廣言の家に育なハれ給へり、初め廣言ハ日向国司にて、嶋津に居住し侍るといふ、されハ公の御館の嶋津にあること、そのかミ廣言の家に育ハれ給ひし時、既にこの御館におハしけるならんか、又建久中国に就給ひて後、初めてこの御館つくり給へるならんか、今詳かにしかたし、姑く土俗の伝ふるところを記といふ、

一又云、命婦山正覺院和光寺、稲荷社鳥居の左側にあり、眞言宗天長寺の末寺にして、稲荷神社の別當寺なり、開山權大僧都舜全、慶長七甲辰七月廿四日遷化、本尊十一面觀音立像長一尺七寸、作者詳ならす、建久八年十一月、得佛公創草し給ふといふ、

171の2

「伊地知季安考」

慶長十七年領主忠能、寺領八十石を寄附せしニ、元和六年四分一上地の時、二十石になりしとそ、且開山舜全ハ慶長七年に歿せしを觀れハ、建久中の開山僧に非ること明けし、天文十四年乙未十一月、領主忠相、社頭修造の頃、此寺も中興したるに非すや、其以後の僧にて中興開山なるへし、

安久村堀之内門御所跡

一忠久公御下向之初、南郷堀之内江御所被召建、一往御住居舊跡于今有之、幣を建崇敬仕候、中之郷郡元村祝吉、假屋ヨリ丑寅廿丁程、旧記ニ此處、豊後守忠久公薩州御下向後、以島津庄爲履、初号姓島津、此其遺蹤也、御館号祝吉之御所云々、而此地初曰島津、以爲御名字、中改島戸津与戸音相通、亦改郡元、按忠久公御座于日向州島津庄事、見島津家旧記、

一往古郡元を嶋津と爲申儀、旧記之通ニ御座候、然處右御所之邊へ安養院と申候廢寺御座候、右之本尊阿弥陀佛躰ニ、應永十五年戊子、日向國島津院安養寺造立と有之候、又同所上之坊阿弥陀佛躰、文明十六年甲辰、日向國島津院圓福寺造立ト有之候、庄内諸所之棟札・文書等ニ者島津之御庄と相見得、郡元ニ限リ島津院と有之候、上古専嶋津ト爲申儀、無紛相見得申候、

一右御所之跡、當分畠にて御座候、御門柱之跡と申傳、石塚二ッ兩所ニ有之、御馬乘場と申儀有之候、

東脇末社

一命婦殿　神体木坐像、長九寸、棟札云、奉建立命婦御寶殿一宇、大江朝臣匡盛并匡隆、大工黒岩丹後守、取持長友丹波守、夫大日本國者、皆我神自法性一理生起國也、就中此命婦御本地者、利剣御神也、三世覺母悲願之風勵而拂災雲、於万方ハ不顛倒、臺山之月朗而照余光於檀那而已、大檀越藤原朝臣忠相并忠親等各御武運堅、子孫繁榮、大安大急ゝ律令、天文十五年丙午十一月吉日、

元文四未五月筑後より願書付

一都之城郡元村之邊、都而往古ハ嶋津と申候處、御名字を遠慮仕、嶋戸と改、當分ハ郡元と申候、忠久公御下向被遊候砌御勸請被遊、古來より客殿棟眞鍮ニ而十文字之御紋打付御座候、山田聖榮自記云、忠久公三ヶ國に御入部、薩州山門に御下り、夫ゟ嶋津に御座候とハ、三ヶ國を庄の内に懐きたる在所に依て也と相見得候、且又忠久公御誕生の時、産神稲荷を嶋津に祝御申候、同秘事条ゝ有、此内穴賢云ゝ、不可他見者也と被記置候、旧記にも嶋津之稲荷之御遷宮、文明七年乙未八月廿一日武久公御代官に、宮丸殿孫子之鶴丸殿御へい取申され、穎娃諸事取なされ候と見得申候、天文十四乙未十一月筑後先祖北郷讃岐忠相、右社頭修造仕候節之棟札ニも、忠久公御創建之旨相見得申候、

一右ニ付而調被申出趣、相違鹿兒嶋稲荷大明神縁起ニ、治承三年己亥忠久公於攝州住吉、夜雨頻に風烈し、一狐火を燃し衛護す、御成人之後三ヶ國御安堵ニ而御下向、嶋津之庄島戸に、件之狐を稲荷大明神に御崇め、累世御氏神と定給ふ、命婦殿とて狐の社于今存せりと相見得申候、鹿兒嶋稲荷神社ハ、古代社壇依火災、御勸請之年月不詳候得共、右郡元稲荷大明神ハ古書付ニも右縁起にも相見得、無余儀事ニ而、別所同躰之神と相見得申候云ゝ、

一天文廿年三月トアリ、奉寄進嶋津稲荷大明神大檀那北郷殿息災延命云ゝ、略ス、

一天文二年辛亥三月吉日トアリ、奉寄進島津稲荷大明神立願成就云ゝ、略ス、

一天文十四年乙巳十一月二日上棟文ニアリ、謹奉再造日州島津御庄郡本稲荷九社大明神御寶殿一宇也云ゝ、大檀那北郷主君藤原朝臣島津讃州太守忠相并左金吾尉忠親并次郎忠豊・和田越中守匡盛并宮内少輔匡隆云ゝ、

前後略、

172

「延喜式二十八巻　兵部諸国器仗ノ条」

○大隅國驛馬　蒲生、大水、各五疋、　○薩摩國驛馬　市来、英祢、網津、田後、櫟野、高来各五疋、　傳馬　市来、英祢、網津、田後駅各五疋、　○日向國　長井、川辺、刈田、美弥、去飛、児湯、当磨、広田、救麻、救弐、亜郷、野後、夷守、真水俣、嶋津各五疋、　傳馬　長井、川辺、刈田、美弥、去飛駅各五疋、　鴨社人菊太夫長明入道法名蓮胤仁平三年生、少於頼朝六年而、多於得佛公二十六歳、与公同時者也、

173

「無名抄云」

つくしのしまとゝいふ所に、かよふものゝ事のつゐてにかたり侍りしハ、つくしにとりて南のかた、大隅・薩摩のほと、いつれの國とかやわすれたり、おほきなるみなと侍、そこには四五月にハ、あけくれ浪たちてしつまるまもなし、四月にたつをうなみといひ、五月にたつをさなミとなん申侍るといひき、う月・さ月といふゆへにや、いとけふある事なり、

174

「正文有之」

前右大將家政所下　左兵衛尉惟宗忠久

可早爲大隅薩摩兩國家人奉行人致沙汰条条事、

一可令催勤内裏大番事、

右、催彼國家人等、可令勤仕矣、

一可令停止賣買人事、

右、件条、可禁遏之由、宣下稠畳、而邊境之輩、違犯之由有其聞、早可停止、若有違背之輩者、可處重科矣、

一可令停止殺害已下狼藉事、

右、殺害狼藉禁制殊甚、宜守護國中、可令停止矣、

以前条々、所仰如件、抑忠久寄事於左右、不可冤凌無咎之輩、而又家人等誇優恕之餘、不可對捍奉行人之下知、惣不慮之事出來之時、各可致勤節矣、以下、

建久八年十二月三日　　案主清原

令大藏丞藤原(頼平)(花押)　　知家事中原

別當前因幡守中原(大江広元)朝臣

散位藤原(三階堂行政)朝臣(花押)

「此文書、御家譜中ニアリ」

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ内ニ在リ」

175

「江田源助蔵本云」

内裏大番之事、任被仰下旨可令参勤人(々脱カ)

川邊平二郎　　別府五郎　　鹿兒嶋郡司

穎娃平太　　伊作平四郎　　薩摩太郎

知覧郡司　益山太郎　高城郡司
在國司　牟木太郎　江田四郎
莫祢郡司　山門郡司　給黎郡司
指宿五郎　南郷万楊房　小野太郎
市來郡司　満家郡司　宮里八郎
萩崎三郎　伊集院郡司　和泉太郎

右、各守注文之旨、明春三月中令参上、可令見知役所給也、且鎌倉殿仰旨如此、早可被存其旨之狀如件、

建久八年十二月廿四日　左衛門尉在判

薩摩國地頭御家人御中

176

『長谷場氏文書』

内裏大番支、任仰下之旨可令参勤人々

麑嶋郡司　河邊平次郎　別府五郎
穎娃平太　伊作平四郎　薩摩太郎
知覧郡司　益山太郎　高城郡司
在國司　牟木太郎　莫祢郡司
山門郡司　給黎郡司　指宿五郎
市來郡司　満家郡司　小野太郎
宮里八郎　萩崎三郎　伊集院郡司
和泉小大夫

右、各守注文之旨、明春三月中令参洛、可令見知役所給也、且鎌倉殿仰旨如此、早可被存其旨之狀如件、

建久八年十二月廿四日　右衛門兵衛尉在判

薩摩國御家人御中

177

「大村市來興市左衛門蔵」

内裏大番事、任仰下之旨可令参勤人々

市來郡司　別府五郎　麑嶋郡司
河邊平次郎　伊作平四郎　薩摩太郎
穎娃平太　益山太郎　高城郡司
智覧郡司　牟木太郎　江田四郎
在國司　山門郡司　給黎郡司
莫祢郡司　南郷万陽房（楊カ）　小野太郎
指宿五郎　満家郡司　宮里八郎
萩崎三郎　伊集郡司（本マヽ）　和泉小太夫

右、各守注文之旨、明春三月中企参洛、可令見知役所給也、且鎌倉殿仰旨如此、早可被存其旨之狀如件、

建久八年十二月廿四日　右兵衛尉在判

薩摩國御家人御中

178

大隅國注進御家人交名等事

國方

税所篤用　田所宗房

曽野郡司篤守　小河郡司宗房

加治木郡司吉平　帖佐郡司高助

執行清俊　東郷郡司時房

河俣新大夫篤頼　佐多新太夫高清

弥三郎大夫近延【遠イ】　祢寝郡司

木房紀太郎良房　西郷酒大夫末能

宮方

政所守平　長大夫清道

源大夫利家　修理所爲宗

權政所良清　栗野郡司守綱

脇本三郎【六イ】大夫正平　太良大夫清直

六郎大夫高清【爲イ】　矢太郎種元【弥太郎大夫種之イ】

執行大夫助平　嶋四郎近延

姶良平太夫良門　小平太高延

新太夫宗房　弥次郎貫首友宗

肥後房良西　敷祢次郎延包

三郎大夫近直

右、件御家人、爲上覧、各交名大略注進如件、

建久九年三月十二日

諸司検校大中臣時房

田所検校建部宗房

税所検校藤原篤用

「右正文、在于隅州宮内之社家」

179

『比志島氏家蔵文書』

鹿屋院弁濟使名田

眞幸院郡司名田

滿家院郡司名田

穆佐郡司名田

南郷弁濟使名田

宮里郡司名田

右、件名田等、早可令知行、兼又前掃部頭【惟澄】(中原親能)知行信濃所領、

同可令知行給者、依　右大將家仰、執達如件、

建久九年二月廿二日

嶋津左衛門尉(忠久)殿

180

「雑抄　是ハ全文備ハレリ、可見合ナリ」

嶋津庄内郡司弁濟使等名田事

飫肥南郷郡司名田

鹿屋院弁濟使名田

眞幸院郡司名田

滿家院郡司名田

穆佐院郡司名田

南郷弁濟使名田

宮里郡司名田

右、件名田等、早可令知行、兼又前掃部頭(中原親能)知行惟澄所領、同可令知行給者、依前右大將殿仰、執達如件、

建久九年二月廿二日　　平在判(盛時)

嶋津左衛門尉(忠久)殿

「此一通御譜中ニアリ」

「右建久九年二月廿二日ノ文中、

掃部頭知行トハ、日州寄郡ノ内、臼杵郡ノ新名五十丁・浮目七十丁、新納院百二十丁図田帳ニアリ、此等ナルヘシ、掃部ハ大友氏ノ祖掃部頭親能入道寂忍ノコト也、東鑑元久元年九月ニ見ユ、惟澄所領トハ、隅州寄郡ノ入山村ハ千葉兵衛尉沙汰トアリ、此人ノ実名カ、元暦二年豊後住人臼杵二郎惟隆同カ、緒方三郎惟榮東鑑ニアリ、惟隆ト惟澄ト一人カ知レス」

181

『正本在權執印』

□(高)城新郡司豊津友安謹言

奉免　八幡新田宮新燈油料田玖段参拾代事

在高城郡字谷口田

右件田、爲本領主時吉彼燈油料田、所令寄進也、隨國免之狀明鏡也者、任件料田玖段参拾代分之後官物、爲聖朝外朝右大將家千葉御館御願成就、限永年、所令免奉如件、

建久九年三月　日　　新郡司豊津(花押)

182

『下甑島長濱村農夫惣兵衛蔵』「御文庫廿二番箱一巻中ニ在リ」

久米乃次郎家願きかい□

つき、其跡をハ子息あらハ相傳すへきに、一人の子もなきによりて、舍弟忠重にたふへきなり、奉公の物のあとをハ、御いとをしミあるへき事にてあるうゑ、證文を以□れハ、たふへきなり、いまたわかき物にて、ものに心えぬところやあるらんとおほしめせとも、ほうこうて(ママ)ゆのゆかりなれハ、かくおほせつかはすなり、當時者藤内康友知行のよし申なれハ、他所をもとらせて、家願か跡をハ、このたうし□御下文をもなしたふへけれとも、忠久かさたの所也、家願にも御教書をつかはして、たひ

たりしかハ、かくおほせつかハすなりと、おほせことなり、仍執達如件、

建久九年九月（日脱カ）　散位平（盛時）

嶋津左衛門尉（忠久）

183

「頼朝公譜中」

建久十年（四月廿七日改建久為正治元年也、）己未正月十三日薨、享年五十三也、去年重成法師新造相模河之橋、遂供養之日爲結縁渡御其地、及還路爲落馬、不經幾程而薨云云、

有所載和歌集之歌、記左、

新古今和歌集巻第十　羇旅歌

道すから富士のけふりも分さりき晴るまもなき空の氣色ハ

同集巻第十八　雑歌下

みちのくのいかて忍ふハえそしらぬ書つくしてよつほの石ふミ

續後選和歌集巻第九　神祇歌

いハし水たのミをかくる人ハみな久しく世にも住と社きけ

續古今和歌集巻第十　羇旅歌

よそにみし小篠かうへの白露をたもとにかくるふたむらの山

續拾遺和歌集巻第十二　戀歌二

まとろめハ夢にもみえぬうつゝにハ忘るゝ程のつかのまもなし

新後撰和歌集巻第十八　雑歌中

あひミてし後ハいりこの海よりもふかしや人をおもふ心は

玉葉和歌集巻第十六　雑歌三

偽のことの葉しけき世にしあれは思ふといふも誠ならめや

續千載和歌集巻第八　羇旅歌

都には君にあふ坂近けれハなこその関ハ遠きとをしれ

184

「若狭島津系図」

元祖忠季

號三方　兵衛尉　母比企判官能員之妹、母丹後局也、

島津元祖忠久一腹之弟也、以故許島津稱號、且亦令忠季、若狭州之爲守護代、仍居住于當國者也、實者

八文字民部大夫惟宗廣言之男、非頼朝卿之子也、旗幕之紋者黒十文字云云、

185

「在東鑑十六巻」

正治元年己未十月廿八日丁亥、結城七郎朝光會梶原平三景時之企讒言、而所以訴　將軍家頼家之不許、而將蒙誅戮、於茲前右兵衛尉義村者断金朋友、以之故潛語焉、義村招數輩御家人、群集于鶴岡廻廊、書於同心連署之狀、訴之於　將軍家頼家、其詞曰、養雞者不畜狸、牧獸者不育豺云云、可被賞讒者一人欤、可被召仕數輩之御家人欤、伺御氣色矣、若無裁許者直可諍死生云云、六十六人之内忠季在之、于時若狭兵衛尉忠季、

186

「忠久公御譜中」

正治二年庚申二月廿六日、中將家頼家御參鶴岳八幡宮、忠久于時島津左衛門尉、御供、御後衆廿人、束帯与布衣相交内也、宮、御後束帯與布衣相交、廿人之内忠季在之、于時若狭兵衛尉忠季、

187

「若狭島津氏忠季譜中」

「在東鑑十六巻」

正治二年庚申二月二十六日壬午、中將家頼家御參鶴岡八幡

（表紙）

忠久公　自建仁元年　至承久三年

前編　舊記雜錄　巻三

『二年忠時公生』
建仁三　元久二　建永一　承元四　『順德』　建暦二　建保六
承久三

188

「島津國史」

建仁元年辛酉、是年二月改元建仁、正月猶是正治三年、春二月十三日改元、拠大日本史、
二年壬戌秋七月、源頼家任征夷大將軍、拠大日本史、
三年癸亥秋七月三日、幕府以平清重爲大隅州禰寝院南俣地頭職、因以禰寝爲氏、清重、清盛之玄孫也、拠小松氏系図、平清盛生重盛、号小松殿、重盛生維盛、維盛生高清、高清生清重、清重始以祢寝為氏、伝二十三世、至式部清香改為小松氏、又按喜入家臣志志目正兵衛系図文書、長岡右大臣内暦之後曰五郎大夫藤原義光、亦以祢寝為氏、蓋清重領祢寝院南俣、義光領祢寝院北俣、故並為祢寝氏、祢寝院即今大根占・小根占・佐多・田代凡四郷地、然今無南俣・北俣之名、不詳其地的在何処、八月、平政子廢征夷大將軍頼家、而幽諸伊豆修禪寺、立其弟實朝、拠大日本史、九月四日　公坐比企判官能員事、罷薩隅日三州守護職、公能員之甥也、拠東鑑、大日本史、初比企判官納其女於源頼家、生一万、能員欲立之、頼家有病、政子欲中分天下、与千幡関西三十八州、一万関東二十八州、千幡者實朝也、能員聞之、不悦、陰図滅北条氏、政子知之、以告時政、時政殺能員及子宗員、親姻及党与連坐者数十人、十日　公復守護職、拠東鑑、島津譜略、得佛公旧譜、是時、公在薩摩、聞能員遇害、不自安、會實朝召　公、　公愈懼、告禱臺明寺浮圖、然後行、至則無事、反自鎌倉、即作臺明寺本堂、縦横各一丈九尺、是爲酬愿、拠得佛公旧譜、島津譜略、臺明寺在清水郷、源實朝任征夷大將軍、拠大日本史、

189

『水引執印氏文書』

薩摩國御家人麑嶋中務次郎康邦与矢上左衞門尉盛澄後家相論、當國『是ヨリ奥切テ無シ』
建仁元年　十一月廿二日
「北条殿」在御判　「北条殿」（義政）遠江守在御判

190

「忠時公御譜中」

忠時

初忠義　三郎兵衛尉　左兵衛尉　左衛門尉
修理亮　大隅守

○建仁二年壬戌誕生、母畠山次郎重忠第六女也、

○伊地知縫殿助重治系圖曰、重忠男女有七人、第一六郎重保、第二五郎重清、第三重時、第四武藏守重俊、第五女子他腹、第六女子他腹、忠久御前也、故本田次郎親常之二男又次郎持太刀以供奉矣、第七女子本腹云々、

○本田作左衛門尉宣親系圖曰、親恒有女子一人、奉嫁于大夫判官忠久也、親恒無實子之可連續家者、爰重忠二男丁二歳之時母堂早世、親恒養育之、而漸至九歳于時加首服稱重季、十三歳而爲親恒之猶子、是以改重季爲貞親、其後自　頼朝卿賜大隅國守護職、而可致忠節於忠久公、就中、稱勲功之賞、賜惣小川村於貞親云々、

「右二家之譜文未知孰是而孰非、可有再考、以別紙書焉」

191

「西藩野史」

『三年也』建仁二年壬戌、文治六年四月十一日改之建久元年とす、十年四月廿一日改て正治元年とす、三年二月十三日改て建仁元年とす、九月、比企判官能員將軍頼家と議して、實朝及ひ北條氏を亡さんとす、發覺して能員誅せられ、頼家も亦廢せらる、事ハ前ニ見あたり、此時忠久公國に在り、其事を知らすといへとも、能員か女弟の子たるを以て、坐せられて國除せらる、九月四日、幾ならすして衆議して曰、罪なきを罪するは乱の端也、於是赦して封を復す、同月十日也、○按に隅州清水臺明寺伝天智帝之直願所也、此所より笛竹を貢す、此時実朝忠久公を鎌倉に召ふ、公坐せれん事を恐る、於是願書を臺明寺に納て云、事無して国に帰る事を得ば、三間四面の堂を作て献せん、其書今猶存す、

192

『臺明寺文書』

藏人所下　大隅國臺明寺住僧等

可令早任先例、停止笛竹使新儀非法、安堵寺内事、

使

右、彼寺者、國中第一之靈地、鎮護國家之砌也、仍晝夜不断奉祈聖朝安穩御願之處、件使等、寄事於左右、致寺僧煩之間、粗企離山思之由、所訴申也、事若實者、甚以不便、自今以後、早停止彼煩、安堵寺内、且弥奉祈聖朝安穩之御願、且在廳官人相共、任先例、可令致沙汰貢御笛竹之狀、依藏人權(藤原光親)左少弁殿御奉行、所仰如件、召物使并在廳官人等宜承知、更勿違失、故下、

建仁二年十月　日

出納右衛門少志中原(花押)奉

193 『臺明寺文書』

藏人所下　大隅國臺明寺住僧等

可令早在廳官人相共、致掃除生長貢御笛竹事、

右、笛竹使到着之時、在廳官人相共致掃除、可令生長之由、所被仰下也、仍所仰如件、寺僧等宜承知、更勿緩怠、故下、

建仁二年壬十月　日

出納右衛門少志中原（花押）奉

「此文書二通共、旧御番所御文書二番箱中、臺明寺文書ノ一巻ニ正文在リ」

194 『清水臺明寺藏』

當國　貢御笛竹被切之間、爲藏人所御使、殊致其煩之由、自當寺依令訴申給、可令停止新儀非法之由、被成下藏人所御下文候畢、於自今以後者、存其旨、可令致沙汰給之狀如件、

建仁三年四月七日　　權大進藤原（花押）

臺明寺大衆御中

195 「蒲生士山内氏藏」

薩摩郡郡司平忠直謹言

讓与　平礼石寺座主職事

七男亀童丸

在四至

限東田畔、限南河、限西西山西際、限北温谷、

右、件寺者、雖爲古寺、故忠永朝臣之時令修造、爲子孫繁昌、佛事之料田被寄進畢、其後忠直差四至奉免、而今子息寺領可令配分之日、七男亀童丸分、相副調度文書等、可讓渡也、適彼寺者、無庄國兩方御公事之上、自今以後者、更郡司不可有綺沙汰之事、若令此狀之違背者、全忠直之子孫不可爲之由、捧此證文守護所、可令言上之狀如件、以讓、

建仁三年五月二十七日　　平（花押）

嫡子平（花押）

196 「見雜抄」

（顯家）（花押）

大隅國祢寝南俣院地頭職事

右使職、重延知行之處、死去之由申之、然者、以清重法師所補給也、但論人出來之時者、召問兩方、可有左右

也、前左衛門督(頼家)殿仰旨如此、

建仁三年七月三日

197

大隅國祢寝郡司入道賜御下文令下向候也、可令存其旨給候、謹言、

(建仁三年)七月廿七日　　遠江守(時政)在判

嶋津左衛門尉(忠久)殿

198の1

「忠久公御譜中」

「在東鑑十七巻」

舊譜云、建仁三年癸亥九月四日、忠久(于時嶋津左衛門尉忠久)、被收公大隅薩摩日向國守護職、是又依能員縁坐也云云、將軍家(頼家)御不例、緯危急之間、有御讓補沙汰、以關西三十八ヶ國地頭職、被奉讓舎弟千幡君、(実朝于時十歳也)以關東廿八箇國地頭并惣守護職、被充長子一幡君、(于時六歳)爰家督御外祖比企判官能員、潛憤怨讓補于舎弟事、募外戚之權威、挿獨夫志之間、企叛逆、擬謀千幡君并彼外家已下、故去二日以息女、(将軍家妾、若公之母儀也、号若狭局、)訴申北條殿、(遠江守時政)偏可追討由也、雖爲蜜事、尼御臺所令伺聞此事、告遠州(時政)給、是以、遠州招能員於私宅而所以刺殺也、依彼變事一族縁坐、被收公守護職所領等、雖然、同十日、諸御家人等所領如元可領掌之由、多以被下遠州御書、是危世上故也云云、忠久在鎮西領國之際、聞外叔父能員門族悉被凡誅、由是薩隅日三州之所收公守護職、然而與所不關能員隠謀之門族縁坐俱、如元返賜守護職、且復有關東参覲之催、吾雖無犯罪、而未須知安否、是以俯仰天神地祇、只起大願而已、

198の2

譜略云、建仁三年九月四日、因外伯父能員之罪、被收公領國日隅薩、(事見于東鑑)雖然、忠久在遠國而不與能員、故所領遂如元、踵有可至鎌倉之命、然將家之廢立如手反覆、忠久安否又未可知、故捧願書於隅州噌唹郡衆集院、(像伽三蜜道場而、天智帝之御宇、為笛竹貢御之地、所謂青葉之笛竹出于玆、今以有証書矣、)

199

『臺朗寺文書』

奉立　大願事

可造立衆集院本堂壹宇參間四面事

右、件本堂壹宇、可奉造立之由、大願志者、左衛門尉惟宗忠久上洛間、爲無事安穏泰平、所奉立也、仍今度下向之時、早可令造進之狀如件、

建仁三年十月十九日

左衛門尉(忠久)惟宗(花押)

「此文書、旧御番所御文書二番箱中ニ正文在リ、印判写置也」

200 御譜略云、建仁三年九月四日、因外伯父能員之罪、被收公領國日隅薩、(事見于東鑑)雖然、忠久在遠國而不與能員、故所領遂如元、踵有可至鎌倉之命、然將家之廢立如手反覆、忠久安否亦未可知、故捧願書於隅州噌唹郡衆集院、註略、而發薩州至鎌倉、然更無事故、還國則不違志願之旨、創建本堂一宇矣云々、

201 東鑑曰、建仁三年癸亥九月四日己巳、被召禁小笠原弥太郎・中野五郎・細野兵衛尉等、此輩恃外祖之威、日來與能員成骨肉之昵、去二日合戰之際、相伴廷尉子息等之故也、島津左衛門尉忠久被收公大隅薩摩日向等守護職、是又依能員縁坐也、加賀房義印束手參遠州侍所云々、

202 「水引執印文書」

「北条殿」御判

下　薩摩國新田宮執印職并五大院々主職事

惟宗康友

右、件所職散在名田畠等、無相違可令領掌、但于御公事者、任先例、可致沙汰之狀如件、

建仁三年十月廿六日

203 『栗野士神田橋助右衛門文書』

（花押）

前地頭忠久押領所弁濟使得分米事

一　下大隅郡弁濟使得分米可令運上事、

一　鹿屋院弁濟使得分(米脱カ)同可令運上事、

一　串良院弁濟使得分米同可令運上事、

一　小原別府弁濟使得分米同可令運上事、

一　祢寝院弁濟使得分米同可令運上事、

一　肝付郡内之村(補脱カ)弁濟使得分米同可令運上事、

一　柏原別府同可令沙汰事、

以前条々、於得分米者、慥無懈怠、爲義廣之沙汰矣、京都可運上也、於由緒者、早企參上、弁濟使職可訴申子細之狀如件、縦不入目錄、忠久押領所々尋沙汰、可令運上也、

建仁三年十一月十日

204
「此文書御譜中ニアリ」
（本文書ハ二〇三号文書ト同文ニツキ省略ス）

205
『執印文書』『年間不詳故此ニノセ置也』

薩摩國牛屎院之内
木崎十五町　名主前内舎人康友
同國鹿兒嶋（郡脱カ）之内
府領社七町五段　下司前内舎人康友
公領百九十七町　郡司前内舎人康友
「右文治より建久之比為領主」（建久八年薩摩国図田帳ノ抜書ナラン）

206
『仝』

薩摩國高城郡國分寺ハ、聖武天皇天平年中御建立、一國一寺之土地、同所天満宮、村上天皇應和三癸亥御建立、
「右文治・建久之比、薩摩国之内百四町余者寺社領」

207
『水引執印氏文書』
「北条殿」
在御判

藤内康友訴申、嶋津庄内鹿兒嶋郡司并弁濟使職事、召問両方理非於庄官等、付文書道理、可令致沙汰給之由、所候也、仍以執達如件、

建仁三年十二月九日　景成奉

長澤左衛門尉殿
當國守護所

208
『本田静観傳入來本田氏文書』

下　嶋津御庄内薩摩國山門院住人
可令秀忠領掌當院所帯職事
右人、継親父國秀之跡、可領掌所帯職之由、去建久四年九月四日成賜　故大將家政所御下文畢者、任彼状、可令秀忠知行之状如件、

建仁三年十二月廿八日　遠江守（時政）平在御判

209
「島津國史」

元久元年甲子、是年二月改元久、正月猶是建仁四年、春二月二十日改元、大拠日本史、秋七月十八日、幕府殺其兄故征夷大將軍頼家於伊豆修禪寺、拠続本朝通鑑、統本朝通鑑、時政告實朝、使人殺頼家於伊豆修禪寺浴室、注東鑑止言卒、不言殺、承久記、保暦間記云、時政殺之、太平記云、為實朝所害、増鑑云、皇代図云、義時弑之、神皇正統記、止言遭害、不言為某人所害、時政与實朝謀焉而害之、是時實朝幼弱、事無大小決於時政、殺頼家者蓋時政也、然拠他日公暁以實朝為父仇而弑之、則實朝亦与知之矣、故従増鑑、按頼家者實朝之所忌也、時政使人殺之、未必不出於實朝之意也、若果出於其意、則是仮手於時政而殺之也、不出於其意乎、則当討時政擅殺之罪、而乃

不之討、是亦實朝殺之也、故書曰、幕府殺其兄頼家于伊豆修禅寺、

二年乙丑、事缺不書、

建永元年丙寅、是年四月改元建永、自三月以前猶是元久三年、夏四月二十七日改元、拠大日本史、

承元元年丁卯、是年十月改元承元、自九月以前猶是建永二年、冬十月二十五日改元、拠大日本史、

二年戊辰、三年己巳、凡二年、事缺不書、

四年庚午冬十一月二十五日、

土御門天皇傳位於

順徳天皇、拠大日本史、

建暦元年辛未、是年三月改元建暦、自二月以前猶是承元五年、春三月九日改元、拠大日本史、

二年壬申、事缺不書、

建保元年癸酉、是年十二月改元建保、自十一月以前猶是建暦三年、春二月二日、幕府選諸將有學藝者十八人、更日直宿、分爲三番、每番六人、公預焉、拠東鑑、和田義盛反、公從北條泰時擊之、夏五月七日、幕府賜公甲斐國波加利新荘、賞戰功也、同上、公使其子掃部助忠直領之、拠島津系図、秋七月十日、政所下文、使公領薩摩國地頭職如故、拠得仏公旧譜、八月二十六日、幕府臨大江廣元之第、供奉後隊二十七人、公預焉、拠東鑑、冬十二月六日改元、拠大日本史、

二年甲戌秋七月二十七日、幕府臨大倉大慈寺供養、後騎十八人、公預焉、拠東鑑、

三年乙亥、事缺不書、

四年丙子秋七月二十九日、小河法印忠快、修六字阿臨法於相模川、幕府臨止、供奉狩裝束十二人、公預焉、拠東鑑、

五年丁丑、事缺不書、

六年戊寅夏六月二十七日、幕府謁鶴岡八幡宮、供奉衛府十九人、公預焉、拠東鑑、是歳、創建花尾權現社於滿家院厚地村、拠得佛公旧譜、花尾山名、權現社在其麓、因名花尾權現、厚地村、即今郡山郷地、廟堂要覧曰、花尾權現社、供養三位木像、中為源頼朝、左為永金阿闍梨、右為丹後局、按源頼朝、薨於正治元年、前此二十年矣、則公供養其像、固応爾也、永金円寂、年月不詳、然公薨於安貞元年六月十八日、後此九年矣、若白、則是年永金尚在、然花尾社所蔵鏡背銘、称建保六年九月永金敬使永金先公円寂、則公供養其像、亦応爾也、至於丹後局、則後公六月而薨、実安貞元年十二月十二日也、則供養局像、非公之所及也明矣、竊以事理推之、公建花尾社、以祀源頼朝、而丹後局永金從祀、応在於公薨之後、然亦無所考拠、姑書其説、以俟後考、使永或作金阿闍梨、諸本皆作闍梨、按類書纂要釈道部、比丘闍黎並云僧也、闍梨疑是闍黎、領其事、永金栄、因建平等王院及三十六坊於厚地村、拠得佛公旧譜、三十六坊之名、伝於後者、圓融院・多聞院・本地院、拠花尾社所蔵鏡背銘、永金俗姓大藏氏、・普賢院、其余名闕、

「栗野士神田橋氏文書」

「御譜中ニアリ」

御庄(島津庄)政所下

可早任京都御折紙狀、義廣(為脫カ)沙汰令運上、所所弁濟使得分等事、

下大隅郡　鹿屋院　串良院　小原別府　祢寝院

肝付郡内内浦　柏原別府　已上柒箇所

右、件御折紙狀偁、於得分米者、慥無懈怠、爲義廣之沙汰矣、京都可運上也、於由緒者、早企參上、弁濟使職ヲハ可訴申子細之狀如件、縱不入目錄忠久押領所々ヲハ尋沙汰、可令運上也云々者、任件狀、可致沙汰之狀如件、郡郷院等宜承知、不可違失、故下、

建仁三年正月十八日

藤原(花押)

211

「國分宮内澤氏蔵」

正宮公文所下　貫首酒井道吉

可令早任寺家御下文旨、停止爲宗非論、領掌溝部村内并下散在田畠等事、

右、去年十一月日御下文今年正月十九日到來偁、修理所検校爲宗不用本所御下知事、右、爲宗与道吉所領相論之間、於公文所召決兩方之日、任文書之理、道吉蒙裁許欤、而爲宗募守護所之威、一切不用寺家御下文之旨云々、先爲宗爲修理所検校、已社家進退神官也、且此条仰本所裁判之故、令訴申之處、依無道理、令雌伏之間、背本所募武威之条、不當無極事也、就中件沙汰、或守護所道吉道理之由成敗早云々、或國衙止爲宗之非論、可令道吉領掌之由、令裁判早云々、而爲宗偏處社家之僻事、致悪口、令違背之条、甚以不穩便、若尚背下知之旨者、爲宗可放神人之職也云々者、早任御下文之旨、停止爲宗之妨、令道吉領掌、可勤社國所役之狀如件、

建仁四年三月　日　　權政所散位息長(花押)

執印大法師判　　御供所検校散位息長(花押)

政所検校散位大藏(花押)

權執印散位息長(花押)

212

『正文在權執印』

宮里郷地頭散位紀正家

奉寄進志奈男社修理料田字井□

參段并長畠壹處事

右、件社本給田者、有時吉名田之内、雖然、依爲件料田

荒野之地、已令破壞畢、且郷内坐鎮守、何郷内名頭等不崇奉哉、依之爲息災祈禱、奉寄進件田畠畢者、件田畠等令耕作、彼社破懐(壞)顛倒令修造、可被祈願一家息災延命之由、仍奉寄進之狀如件、

建仁四季二月十日　　散位紀(花押)

213

元久二年乙丑

六月二十二日、

本田左衞門督貞親武州二俣川にて、畠山重忠の難に従ひ、力戦して死之、

214

『臺明寺文書』

當國臺明寺衆徒等申、爲在廳篤秀以下輩、被致狼藉之間事、訴狀副具書、謹進上候、子細見狀候哉、可有洩御奏聞候欤、仍言上如件、

『年間不詳』

一一月七日　　大隅守中原師顯上

進上　頭亮(平仲兼)殿

215

『仝』

大隅國臺明寺申在廳篤秀已下輩狼藉事、師顯申狀副具書等、如此、子細見狀候欤、可被申関東之由、天氣所候也、

以此旨、可令洩申給、仍言上如件、仲兼頓首謹言、

二月十一日　　中宮亮平仲兼奉

進上　彈正大弼殿

216

『仝』

長日御祈禱御巻數、取進候畢、目出候之由、被仰下候也、仍執達如件、

十月五日　　左衞門尉經清(花押)

217

『仝』

御祈禱巻數一枝、令披露候了、仍執達如件、

十二月十三日　　修理亮(花押)

臺明寺衆徒中

218

『清水臺明寺蔵』

講(衆)泉僧印西謹言

沽渡進傳領田地事

在噌唹郡

内取条壹里

字花牟礼田肆段半者

右、件田地者、先年之比、讀誦法花經百部ヵ布施析ニ、自鏡能房之手所傳得印西之也、雖然依有要用之直物、相副次第参通證文等、限永年、於理性房所沽渡進也、於巨細者、度〻券狀旨具者欤、仍沽券如件、

建永二年三月十七日　　僧在判

219

「長谷場家文書」

地頭所下　南郷沙汰人

可早如元令安堵女房千世松母堂屋敷事

右屋敷、如元可宛給千世松母堂也者、沙汰人存此旨、可宛行之狀如件、宜承知、勿違失、以下、

承元二年三月三日　　地頭在判

220

「長谷場氏文書」

たひらのうち

うりわたしたてまつるこかうせうはうのゐそのならひニみなみをもてのたのこと

みき、くたんのたそのハ、五たいさうせうのそのならひにたなり、きしようのたいしあるによて、かわうの御はうに、はちしひきにうりわたしまいらせ給ふところなり、このほかにまたくなんによの子そくのあひたニも、そのさまたけあるへからす、よてこにちのせうもんのために、ゆつりしやうくたんのことし、ましてたにんのあひたにも、さまたくへきひとさふらへからす、又〻さうてんのゆつりふみてつきは、たひらのうちは〻の六十一のとし、せうまうにやきてさふらふ、

せうけん二ねん三月十八日　　たひらのうち在判

221

『臺明寺文書』

（端裏書）「六丈十一段小袖一銭一貫

とうない衛門殿」

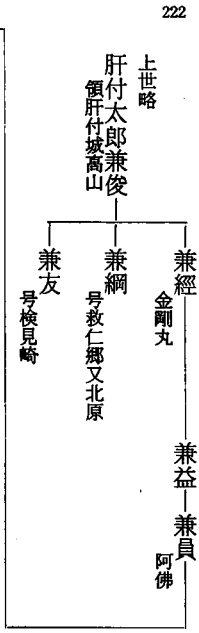
藤原篤滿うりわたしたてまつる田の事

合肆段　三反たれかこ　一反こかいもと

右件田、篤滿かせんそさうてんのしりやう也、よてようく〳〵あるによて、そうたうまんさうくしをちやうしして、又ほんそやくにいたるまて、ほんみやうにつけて、ゐやうねんおかきて、うりわたしたてまつるところ也、よてそうもん如件、

222

建暦元年七月廿七日　　藤原（花押）



「建暦元年八月四日ノ文書参考ニ供ス」

223

『肝属譜中』

建暦元年辛未八月四日、島津御荘預所（按東鑑文治二年云、自近衛殿賜小橋荘預所職之類、即下文、以散位伴朝臣兼廣、爲鹿屋院辨濟使職、初此也、）兼廣家世補辨濟使於本院、故有以陳、至是補之云々、

224

（花押）

下　鹿屋院

定補　弁濟使職事

散位伴朝臣兼廣

右件職、相傳之由依申之、補任彼職如件、百姓等宜承知、勿違失、故下、

建暦元年八月四日

225

『清水臺明寺文書』

起請

毎年立義問者事

右、於二十二人衆者、瞻違次第可令勤仕給也、設雖有他行、誂人無懈怠可致勤行、兼又於新田者、任鵜次、隨田善悪、次第可令思宛（ママ）給之狀、僉儀如件、

建暦元年十一月三日

大法師俊海（花押）
大法師俊毫（花押）
大法師覺有（花押）
大法師長毫（花押）
大法師良兼（花押）

226

「權執印文書」

辨官下（左脱カ）　向大宰府路次國國

使使部藤井末延　從貳人

紀　守□　從貳人

火長壹人

右、左大臣宣、奉　勅、令賫新制拾壹箇條官府（符）、差件等人發遣如件、府宜承知、使者經較（ママ）之間、依例給食馬、路次之國亦宜准此、官府（符）追下、

建暦二年三月廿二日　　大史小槻宿祢在判

右小辨藤原朝臣在判

227　「仝」

廳宣　留守所

可早任官符旨、遵行新制雜事拾一箇事（条脱カ）、

副下　官符

右、件雜事、早任官符、可遵行狀、所宣如件、留守所宜承知、依件行之、以宣、

建暦二年八月　日

大介源朝臣在御判

228　大府宣　大宰府在廳官人等

副下　官符

右、件官符、仰先畢、早可令遵行之狀、所宣如件、在廳官人等宜承知、依件行之、以宣（日脱カ）、

建暦二年五月

都督藤原朝臣（資実）在判

229　「正文在長谷場氏」

（外題）「如折紙狀者、非無其理欤、前々之地頭代々無致沙汰、敢任道理令免除之、　地頭所笠判」

僧智惠謹言

南郷内門貫山寺薗壹所爲郷地頭殿被押召難堪愁狀件条、彼薗者寺僧之領志弖年序既積矣、所以御庄建立主平大監季基朝臣之御子息平五大夫兼輔朝臣之時、從大宰符（ママ）奉呼越竹林房給弖、所渡与給薗也、仍竹林房墓所眼前也、其後彼入室之弟子講衆成覺房快禪大德八十六年之間居住、其墓所眼前也、其後又講衆成鏡房兼禪大德請次（ママ）四十二年、彼人死後ニハ、又講衆快賢香禪房之所領也、快賢大德之墓所也、又以顯然也、其子息比丘尼妙法相傳、彼時件薗依有隙、藤先生正弘借文ヲ込テ暫居住、借文明鏡也、雖然其後返早、比丘尼妙法如元居住志弖、其子息

比丘尼相傳志弓、自其手僧智惠令相傳天、常樂寺御祈禱勤仕之間、宿房ニ定矣、爰以藤先生正弘本主ニ返与之後、右衞門殿・大輔殿・藏人入道殿・笠次郎殿、代〻地頭所之御時、全以無其妨、然當御時被押領之条、難堪之致、何事如之矣、仍蒙裁許、御祈禱之間、宿房ト定天、欲致本家領家大將軍家地頭家御祈禱之丁寧、錄狀言上、以解、

建暦三年四月　日　　僧智惠上

230

「忠久公御譜中」

「在東鑑廿一巻」

建暦三年癸酉二月二日、眤近伺候人中、撰藝能之輩、被結番、共有三番、各當番日者、不去御學問所、令參候、面々隨時御要、又和漢古事可語申之由云云、一番六人之内忠久有之、于時島津左衞門尉、是實朝將軍家二十二歳御時也、

231

「仝」

建暦三年癸酉五月七日、甲斐國波加利新庄、去二日三日爲和田合戰之賞、被充行于忠久畢、于時島津左衞門尉、抽賞記第二載之、波加利本庄者武田冠者賜之、抽賞記第一載之、

232

譜略云、創建本堂一宇矣、後建暦三年五月三日、和田義盛率軍、乱鎌倉時、忠久有戰功、實朝賞之、同七日賜甲斐國波加利新荘、事見于東鑑、

233

建暦三年癸酉、十二月六日改建保元年、

五月三日、税所次郎篤滿此月二日、鎌倉にて和田義盛を討るに從ひ、義盛の子四郎左衞門等敵三人を斬り、数創を蒙りて、此日に死すと見へたり、

234

「正本在比志島家」（島津家ノ誤ナラン）

（端裏書）

「さつまかたの御下文」

將軍家政所下　嶋津庄内薩摩方住人

補任　地頭職事

左衞門尉惟宗忠久

右人、如本爲彼職、任先例、可令致沙汰之狀、所仰如件、

以下、

建暦三年七月十日　　案主菅野（花押）「景盛」

令圖書少允清原（花押）（清定）　　知家事惟宗（孝実）

別當相模守平朝臣（花押）（義時）

遠江守源朝臣（花押）（親広）

武藏守平朝臣（花押）（時房）

書博士中原朝臣（師後）

「此文書、御譜中ニアリ」

「右ノ原書ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之中ニアリ」

235

「忠久公御譜中」

「在東鑑廿一巻」

建暦三年八月廿六日甲午、將軍家實朝入御于廣元朝臣之第、是移徙之後、御行始也、御後之供奉廿五人之内、忠久在之、于時島津左衛門尉忠久、

236

「仝」

建保二年甲戌七月廿七日庚寅、大倉大慈寺供養也、午刻將軍家實朝御出、供奉人御後十八騎之内、忠久在之、于時島津左衛門尉忠久、

237

「在仝廿二巻」

舊譜云、建保四年丙子七月廿九日庚戌、小河法師忠快、於相模川修六字阿臨法、仍將軍家實朝御出、六位十二人着水干負野矢狩装束二行、在御輿前、此内忠久在之、于時島津左衛門尉忠久、

238

「小川氏文書」

留守所下（武蔵多西郡）二宮神官并百姓等

可早任御下文狀、以日奉直高、爲當社地頭職事、

右、九月一日御下文同七日到來、子細云々、具也者、任御下文狀、以彼直高可爲地頭之狀、所仰如件、宜承知、依件用之、以下、

建暦三年九月七日

散位日奉宿祢（花押）

散位日奉宿祢（花押）

散位橘朝臣（花押）

目代藤原（花押）

239

「若狭島津氏忠季譜中」

「在東鑑廿二巻」

建保二年甲戌七月廿七日庚寅、大倉大慈寺御堂供養、將軍家實朝御出、隨兵十三人之内、忠季在之、于時若狭兵衛尉忠季、

240

「忠久公御譜中写」

散位藤原朝臣在御判（コノ一行ハ前文書ノ断簡ナラン）

逐仰

若背先例、對捍輩出來者、可令注申交名給候、
明年内裏大番事、自五月至于七月上旬十五日、以薩摩國
御家人等可令勤仕之、兼又日向大隅并壹岐嶋可寄合也、
可令此旨下知給之狀、依鎌倉殿仰、執達如件、(以脱カ)
建保三年十月四日　　圖書允清原(清定)在判
謹上　嶋津左衛門尉(忠久)殿

241

「忠久公御譜中」

「ふんことのゝさいそくのしやう」

明年の五月より七月の十五日ニいたるまて、たいりの大番、薩摩國御家人をもて、つとむへきよし、おほせくたさるゝところ也、いそきしやうらくして、明年の四月の廿日よりうちに、京とにてけんさんニいらるへき也、かつハたいかんのともからあらむニをきてハ、けうミやうをしるし申すへきよし、おほせくたさるゝところ也、みけうそくたしつかハす、一けんのゝちにハ、かへしつかはすへきなり、大番やくのおくたしふミおなしくくたしつかハす、ほうをまいらせらるへきなり、いそきけんさんニいれむかためなり、あなかしこ〳〵、
(建保三年)十一月廿一日　　(忠久)在判

242

「西藩野史」

「年間シレス」

みやさとの八郎殿

建保元年癸酉、建仁四年二月廿日、改て元久元年とす、三年四月廿七日、改て建久元年とし、二年十二月廿五日、改て承元元年とす、五年三月九日、改て建暦元年とし、三年十二月廿六日、改て建保元年とす、五月、左衛門尉和田義盛叛す、先是、義盛上總國守護職たらん事を乞ふ、將軍實朝、侍臣國司に任する例なきを以て許さす、義盛恚む、時に泉小次郎親平信州の人、賴家の子千壽を立て將軍とし、北條氏を亡さんことを謀る、義盛か志を得ざるを聞、人をして義直義盛第四子・義重同第五子・胤長義盛甥に説しむ、三士諾す、發覺して拘繫せらる、義直等も其中にあり、義盛歎訴す、於是、義直・義重免を得たり、明日義盛一族九拾余人と共に、營に到て胤長か赦を乞ふ、將軍可す、縛て奥州に流す、義盛益恚む、胤長が宅ハ營の東隣にあり、義盛又是を乞ふ、將軍可す、北條義時是を止む、更て義時に賜ふ、義盛愁憤に堪す兵を起す、將軍使を遣して故を問ふ、義盛曰、既に三世に歴仕して飽まて厚恩に浴す、豈ニ叛を謀らんや、義時不義の行有て吾儕を侮る、故に子弟等是を問んとす、僕是を制すれ共能わす、止む

事を得すして是に從ふのみ、義時驚て營中に入る、士大夫悉く營中を保つ、義盛軍を分て營を襲ふ、五月二日、朝比奈三郎義秀義盛第三之子、勇力絶倫、門を破て營中に入、火を縱ち、勝に乘して力戰す、將軍の兵殺傷甚多し、將軍難を法華堂に避く、義盛か軍益奮ひ戰ふ、波多野朝定彌二郎と称す、・千葉介常胤難を聞き、援兵を卒來て義盛か後を襲ふ、於是義盛か軍大に潰ゆ、義盛乱軍の中に死し、其子義直・義重・義信・秀盛悉く戰死す、義秀ハ房州に走て其後を知らす、或云高麗国に往く、義盛軍死する者二百三十余人、營中死するもの亦數百人に至る、忠久公奮戰して功あり、實朝是を賞し、甲斐國波加利新庄を賜ふ、五月七日、掃部助忠直忠久公第三の子、按に忠直建長中鎌倉に在て將軍宗尊親王に事ふ、十二世の孫を宮里久光と称す、其後伝記に見得す、をして爰に居らしむ、武藏守北條泰時義時の子、賢材あり、將軍に告て曰、人唯賢に馴るゝ時ハ善日〳〵に進む、文武材藝の人を以常に君の左右に候し、和漢古今の嘉言善行を言わしむへし、實朝是を納る、於是十八人を撰ひ分て三とし、代て近侍し、善を述へ邪を閉ち補益する事あらしむ、忠久公又選擧第一に在り、當時以て榮とす、

六年戊寅、忠久公、考頼朝公・妣丹後局の廟を薩摩國滿家院厚地村日置郡郡山郷に立て、号して花尾大權現といふ、亦一寺を傍に立て、華尾山平等王院と号し別當寺とす、僧永金をして爰に居らしむ、後に永金卒シテ并せ祭る、

承久三年辛巳四月、上皇後鳥羽帝北條氏を討せん事を謀る、承久元年實朝弑せられ、北条義時頼経を京師に迎立ツ、頼経年纔に二歳、義時其母二位尼と共に政を專にす、初上皇紀州熊野に幸す、路にして仁科盛遠信州の人か兒年十五を見て悅ふ、召て侍童とす、盛遠も又召されて奉仕す、義時怒て曰、盛遠鎌倉の命を待すして恣に院宣に隨ふ、是鎌倉を蔑如する也、遂に其采地を奪ふ、上皇義時に詔して是を返さしむ、聽かす、上皇怒る、亦上皇愛妓あり、亀菊と稱す、攝州長江・倉橋の二庄を賜ふ、義時か置所の二莊の宰亀菊を侮る、亀菊怒て上皇に訴ふ、上皇義時に命して宰を代らしむ、義時辞して曰、夫諸國の主宰ハ前將軍頼朝の定むる所なり、罪なくんハ私に代難し、故に院宣に從ふ事あたわす、上皇益憤り、終に兵を揚て義時を擊んとす、於是義時兵十九萬を起し、弟相模守時房及ひ長子武藏守泰時を將とし、三軍に分て、東海道二人將たり、從軍十万・東山道武田信光・小笠原長清・小山朝長・結城朝光將たり、從軍五万・北陸道義時二男朝時・結城朝廣・佐々木實信將たり、從軍四万を經て地を略し京に薄る、上皇兵を發して宇治・勢多に戰ふ、忠久公・忠時公及ひ若狹兵衛忠季、泰時に屬し河を渡り、敵擊て功あり、上皇の軍利あらす、帝及ひ諸士

比叡山に遁る、東軍追ひ到て捕へ、上皇を隠岐國に、帝廃帝順徳帝の子と順徳帝上皇次子を佐渡國に、土御門帝上皇長子を土佐國に、皇子雅成上皇第三の子を但馬國に、頼仁上皇第四の子を備前國に移す、義時、後堀河帝八十五世を立つ、伝云、小川太郎季能、承久乱宇治川に功あり、薩州甑嶋を賜ふ、其子小太郎来て嶋に居す、世々相伝て天正年中に至る、小川越前守と称す、収公せられ更に五百石を賜、五月、信濃國大田庄をもて忠久公に加賜ふ、公爰に移るの志有て果さす、六月、近衛基通公忠久公を以契子とす、於是惟宗姓を改めて藤原姓を冒す、一説に、忠久公始て封に就の日、京師を過て藤姓を免さると云、自是世々藤原を以姓とす、寛永八年、光久公元服の時源姓に改む、此時侍従に任する口宣に源光久とあり、此故に支族の内、寛永八年より先に分れたるハ源姓を冒す、後に分れたるハ藤原姓を冒す、越前嶋津氏の支族に到てハ惟宗姓を号す、又桐・牡丹の紋近衛氏衣紋幕のを許さる、於是十文字と并せ用ゆ、七月十二日、越前國守護職に任す、次子周防守忠綱、守護代として爰に居す、是を越前嶋津と稱す、越前嶋津氏の伝、継豊公の伝に在り、忠久公、左衛門尉・大夫判官・豊後守に歴任し従五位下に叙す、封を受る事薩摩・大隅・日向・越前・若狭の五州及ひ勢・甲・信の三州の内を領す、

嘉祿三年丁亥、承久四年四月十三日、改て貞応元年とす、三年十一月廿日、改て元仁元年とす、二年四月廿日、改て嘉祿元年、六月十八日辰刻、相州鎌倉に薨す、平素脚気病を憂ひ、又赤痢を病、年を享こと四十九、得佛道阿弥陀佛と諡す、墓を薩州感應寺野田に、廟を本立寺五道院清水山と云、始寺号無し、光久公論語に君子務本、本立て、道生の字を取り本立寺と号せしむ、に、神主を淨光明寺に松峯山無量寿院淨光明寺、文治年中創建、開山宣阿説誠和尚と云、時衆宗たり、然共一遍上人に先こと九十年也、立て祀る、

243

「忠久公御譜中」

建保四年丙子七月廿九日庚戌、小河法印忠快於相模川修六字阿臨法、仍將軍家實朝御出、六位十二人着水干負野矢狩装束二行、在御輿前、此内忠久在之、于時島津左衛門尉忠久、

244

『市來崎氏文書』

譲与

薩摩國山門院内針原村田畠荒野并屋敷市來崎□

薗二ヶ所、水田高柳北夜中桓元事、

舎弟平五

右、秀忠之父譲狀偈、於山門院郡司職者、依爲嫡子、秀忠譲与了、舎弟共可□(良欠カ)隣民云々、依之針原村并屋敷田畠等者、秀忠限永代、舎弟平五譲与早、針原村者、隨分限、可令勤仕御公事也、而及秀忠子孫、郡司職知行輩、聊令成煩之時者、平五子孫可申賜郡司職者也、(ママ)依所譲与如件、

建保五年三月五日

平(秀忠)(花押)

245 『正本在比志嶋氏』

正六位上平秀忠

右、于嶋津左衛門尉殿、依奉成志深、所令書進如件、

建保五年五月廿九日　　平秀忠在判

246

和与　山門院地頭所務条々

一地頭狩倉開發事、

止兩方開發、可爲本狩倉也、

一薗等事、

酒藤薗者、令安堵其身、於彼薗有限在家役并地利物等可令弁勤之、於源次郎薗者、可爲地頭之薗、於高少野薗者、可爲地頭進止、今半分者、居百姓可取在家役并

「以下無紙」

247

『入來永利氏文書』

「件村事、（外題）如申狀者、尤有其謂、早任相傳道理、無違乱、宗久可令領知之狀、所仰如件、

右衛門尉藤原朝臣（花押）」

源宗久解　申進　申文事

請被殊蒙　恩裁、且依重代相傳證文等理、且任代代知行實御裁許、嶋津御庄領薩洲方薩摩郡内山田村名頭職子細愁狀、

副進　調渡（度）證文等

右、謹檪案内、彼村者、是宗久妻女之先祖相傳所領地也、而高祖父信房（件）奉行之時、爲薩洲住人忠景企謀叛一國惣領之時、暫程押領許欤、而以彼非例、稱兼宗庄方弁濟使職、彼所押領之程、越中前司庄務之時、爲曽祖父信明令上件子細言上之日、任文書之道理、如本蒙裁判、領掌顯然也、隨又宗久妻女之父故種信（大蔵）相継領掌畢き、而種信死去之後、同無妨領知之程、庄國課役難堪之故、代官眞清男逃脱之尅、爲弁濟使友久、寄事於左右、令押領、此五六箇年之間中絶許也、望請　恩裁、任重代相傳濟狀理、停止友久之自由押領、蒙御裁判、如本令領掌、爲庄國之公役勤仕、勒子細言上如件、以解、

建保五年八月　日　　源宗久上

248 『入來永利氏文書』

御庄政所

施行薩摩方御領薩摩郡内山田村名頭職事

右、去八月日源宗久京進解狀下給偈、件村者、是宗久妻

女之先祖相傳所領也、而高祖父信房之時、爲薩州住人忠景一國惣領之時、暫押領欤、而以彼非例、稱兼宗庄方弁濟使職、彼所押領之程、曽祖父信明任文書道理、如本蒙裁許、領掌顯然也、隨又宗久妻女之父故種信(大蔵)相継領掌畢き、而種信死去之後、同無妨領知之程、庄國課役難堪之故、代官眞清男逃脱之尅、爲弁濟使友久、寄事於左右、令押領云〻者、御外題云、件村事、如申狀者、尤有其謂、早任相傳道理、無違乱、宗久可令領知之狀、所仰如件云〻者、仍以施行、

建保五年九月廿六日　　別當伴　朝臣

別當藤原朝臣(花押)
別當伴　朝臣(花押)
沙　　弥(花押)
別當藤原朝臣
別當藤原朝臣(花押)
別當伴　朝臣
別當藤原朝臣(花押)
執行伴　朝臣(花押)
別當柒嶋宿祢(花押)
別當藤原朝臣(花押)
別當伴　朝臣
奉行執行刑部丞藤原朝臣(花押)

249

『臺明寺蔵』

(花押)

講衆僧覺仁謹辞　讓与字淨妙房得分事

合

阿弥陀經講壹町　但三丁内

田地参段(但字竹原田北方可領也、在桑東郷)

右、件講經田地等、任本券并手次之狀、可令領掌、但於講免證文者、在月往房許、若有後日沙汰時者、以彼證文可令合也、仍副案文所讓与也、但如此雖讓与、背覺仁意趣人者、不可有覺仁之門弟之義也、若無住山輩者、可付本坊、仍爲後日沙汰、讓狀如件、

建保五年十一月六日　　講衆僧覺仁(花押)

250

「忠久公御譜中」

「在東鑑廿三巻」

建保六年戊寅六月廿七日丁卯、將軍家(實朝)被任大將御之間、爲御拜賀、参鶴岳宮給、被用御車、御後供奉衛府十九人

二行左右共之内、忠久在之、于時島津左衛門尉、右第二番、年鷹次第、

251

「若狭島津氏忠季譜中」

建保六年戊寅六月廿七日丁卯、將軍家實朝任大將御間、爲御拜賀、參鶴岡宮給、供奉之衞府十九人之内、忠季在之、于時若狭兵衞尉忠季、

252

「在東鑑廿三巻」

建保六年戊寅九月十三日辛巳、明月、於營中實朝卿營有和歌御會、披講最中鶴岡宮騷動、因茲關左衞門尉・若狭兵衞尉忠季等爲御使、馳參宮寺尋子細之處、宿直之輩候廻廊、而兒童若僧等徘徊明月、彼宿直人見無禮之、故起鬪諍、爲少生被打擲云云、

253

「忠久公御譜中」

夫薩摩州滿家院厚智山花尾權現所以創建、何無其因乎哉、忠久之母堂丹後局、亡父正二位頼朝卿之妾、享年過半百、十二月十二日娑婆生緣既盡、則載輛車遠葬彼地也、權化僧永金阿闍梨、嘗巡見彼此求一山地、山之高野之廣雖有佳疆、或大體全備小體不足、或近人倫不清潔、以未稱己之心也、爰選得主賓相應之地於當村、厚智村及東俣村者丹後局之所領、永金知行之、永金欣々然而營作精舍、號平等王院、爲開基現住、且復設三十六僧坊、各嚴重盛々焉、立金剛之法幢、演秘密之乘教、遠離俗家奇妙之靈場、母堂一見當山、則高仰之深感之、以爲決死後葬場於此地遺言亦然、所以遂其願也、其後相攸堀山充谷築壇於此、擇聚材木爲久遠之設施、使梓人之有棟梁材者興作數箇殿社、既終土木功、則安置三體木像矣、中尊者頼朝卿、右脇者丹後局、左脇者精舍開基永金阿闍梨、加之建保六年戊寅九月日、大藏臣僧永金一作栄金、大中臣眞久鑄七尊之神鏡、奉崇寶殿、然後堅固封之、雖曰寺僧神職、令不得假開内殿、當其可祭之日、則使國中之人承祭祀、齋明盛服祭焉、則神之格洋々乎、有其誠則有其神、孰不敬信而有可厭者乎、仰冀夫宮寺與山齋其高、與水度其長、爲島津氏之守護神、至盡未來際不敢退轉、仍其神體佛像各寫圖以記左方、示當家之後胤、宜專恭敬致祭祀也、若神社佛廬將迄破壞、則速加修補、勿怠慢迨大破、万歲万歲万万歲、

「図アリ略ス、後巻ニアリ参照スヘシ」

254

『入來院氏文書』

薩摩郡内山田村本領主大藏氏所進折紙獻之、如狀者、右

近將監友久狼藉無遁方欤、早相尋子細、所行若實者、可令召進関東給候、仍執達如件、

十月廿七日　　右京權大夫(義時)在判

嶋津左衛門尉(忠久)殿

「建保六年十月廿七日給了」

「右ノ正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之中ニ在リ」

255

『入來永利氏文書』

「忠久公御判」(花押)

薩摩郡内山田村の名頭職事、大藏氏女帯證文等、可令安堵由依訴申、任文書之道理、可令領知之由、所成賜外題也、早無其煩、件村に大藏氏を可令爲居之狀如件、

建保六年十一月廿六日　　中務丞忠俊奉

薩摩方地頭代殿

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニ在リ」

256

一上品上生阿弥陀九條臺瓔珞　一体

奉安置無量壽尊晨旦之金佛　壹軀

右、奉爲護持篤信心大檀越忠久公御子孫、永保國泰民安、怨敵退散、君臣和睦故也、

承久元年己卯正月吉日

但串木野東嶽山社頭御本地後光之裏書ニ有、

右阿弥陀者、　忠久公串木野東嶽山江御安置也、　光久公被召上於京都、尉(阿カ)子莊嚴被　仰付、表御看經所江御安置被遊也、

「右享保四年己亥五月吉日、時任慶右衛門記ス所ノ御当家御本尊由緒覚ノ内ニアリ、外ニ谷渡愛染明王ヲ初諸仏体多シ」

257

「若狭島津氏忠季譜中」

「在東鑑廿四巻」

建保七年己卯正月廿七日戊子、將軍家實朝被任右大臣給、爲拜賀御參鶴岡八幡宮、供奉之後騎之内、忠季在之、于時若狭兵衛尉忠季、及夜陰神拜事終、令退出給之處、右大臣家爲別當阿闍梨公暁被弑畢、

258

「國史」

承久元年己卯、是年四月改元承久、自三月以前猶是建保七年、春正月二十七日、鶴岡別當公暁、弑其君源實朝、公暁、賴家之子也、實朝年二十八、北條義時迎藤原賴經於京師、爲鎌倉主、賴經、攝政道家之子也、時年二歳、拠大日本史、云、實朝無嗣、按大日本史北條義時

欲立源氏、懼其不利於己、欲立他姓、則鰥於無辞、乃以摂政道家子頼経、与頼朝有叔孫之親、与諸将定議、迎立頼経為主帥、頼経年甫二歳、臣正誼・臣貞良謂、此時現有得佛公、公者親源大将軍之子、年又長、若欲立源大将軍之子為将軍、則舎公奚求、而当時殊無此議焉、義時既不欲立源氏、又不欲立長君故也、夫唯如此、是以公卒得有薩隅日三州之地、而山礪河帯、爰及苗裔、源大将軍之祀、亦得以不絶焉、抑大将軍不以東南諸道四通五達之郊授公、而封諸西海僻遠之国者、豈以東南無可封之地耶、楚孫叔敖将死、戒其子曰、王封汝、無受利地、豈後敖死、王以美地封其子、而子辞請寝丘、遂十世不絶、漢蕭何亦置田宅、必居窮処、曰後世毋為勢家所奪、源大将軍豈亦為叔敖蕭何之慮者乎、漢竇融、累世仕官河西、竊謂兄弟曰、天下安危未可知、河西殷富帯河為固、一旦緩急、足以自守、此吾遺種処也、若本藩者、亦可謂源大将軍遺種処矣、向使得佛公去薩摩徙鎌倉、代實朝為将軍、則子孫百世無窮之祀、社稷千年不拔之基、果能若今日乎、　夏四月十二日改元、同上、六月二十五日、頼經如鎌倉、後隊隨兵十六人、　公預焉、拠東鑑、

二年庚辰、事缺不書、

三年辛巳夏四月二十日、

順徳天皇傳位於

九條天皇、拠大日本史、五月、藤原頼經、以　公爲信濃國太田荘地頭職、拠得佛公旧譜、武蔵守平朝臣義時承云、承旨施行、按三代将軍之時、政令自幕府出、藤原頼経以降、政令自北條氏出、所謂政及大夫者也、然其称於天下、則猶曰、自幕府出、且藤原頼経是年甫四歳矣、以公為大田荘地頭職、未必出於其意、仍称承旨施行、則是頼経命之也、故承其辞而書之、猶春秋書事従告之意云、以下倣之、六月十四日、北條泰時與官軍戰於宇治川、　道佛公斬敵五人、生獲二人、拠東鑑、左衛門尉忠康・若狭兵衛尉忠季戰死、　道佛公公之長子、忠康・忠季者、惟宗廣言之二子也、拠島津系図、市來次左衛門系図、按市來次左衛門系図、市來氏、八文字民部大輔惟宗広言之後、広言領市來院、二子、長曰忠康、畠山氏所生、少曰忠季、丹後局所生、二子死於承久之乱、乃以国分友久子友成為嗣、友成娶市來郡司儀仗大蔵家房之女、生政家、而家房死、其妻道阿尼、即政家之外祖母也、因以市來郡司職伝政家、由是、政　公之初生也、畜家称市來太郎左衛門尉、子孫遂為市來氏、於藤原基通之家、已而畜於惟宗廣言之家、因冒惟宗氏、至是、改稱藤原氏、蓋爲基通所子云、拠得佛公旧譜、島津譜略、旧譜云、是年六月、改惟宗氏為藤原氏、拠是年五月太田荘地頭職下文称惟宗某、七月十二日、越前国守護人下文称藤原某、則改為藤原氏、応是五月六月七月之際、然未知其的為何月也、故置於此、旧譜又云、建久七年八月一日、公帰薩摩、過京師謁近衛殿、於是賜公藤原姓、亦一説云、又按公已改姓為藤原氏、則其後宜専称藤原氏、然島津氏蔵東鑑公之冀、仍曰惟宗某、其外文書、或称藤原、或称惟宗、未詳其故、因書於此、以諗後之観者、秋七月九日、

九條天皇傳位於

後堀川天皇、拠大日本史、十二日、頼經以　公爲越前國守護人、拠得佛公旧譜、　公使其子周防守忠綱爲守護代、於是忠綱居越前、號越前島津氏、歴事頼經・頼嗣・宗尊三世幕府、拠島津譜略、系図、忠綱子白周防守忠行、弘安二年為播磨下揖保地頭職、於是自越前徙播磨、忠綱子孫世居其地、不与本国相関、故此編不復書其事、八月二十五日、頼經以　道佛公爲越前國生部荘及久安保重富地頭職、拠道佛公旧譜、古者地方有郷保荘之称、貞永式目諸国守護人事条曰、補代官於郡郷、課公事於荘保、神皇正統記曰、文治之始、国置守護職、荘園郷保置地頭、此云久安保、亦荘保之類也、　冬閏十月十五日、又爲伊賀國長田郷地頭職、同上、

259

「忠久公御譜中」

「在東鑑廿四巻」

承久元年己卯七月十九日壬子、左大臣道家公賢息一歳爲継將軍後嗣、下向關東、後陣隨兵十六騎之内、忠久在之、時于島津左衛門尉、

260 名勝志串木野冠嶽山鎭國寺頂峯院の條云、初め本尊弥陀の尊像ハ、得佛公四十一歳にならせ給ひし時安置の靈佛也、後光裏銘云、

奉安置無量壽尊一軀晨旦金佛

右、奉爲護持篤信心大檀越忠久公御子孫、永保國泰民安、怨敵退散、君臣和睦故也、仍旨趣如件、

承久元年己卯正月吉日

261 寛陽公靈佛なることを聽給ひ、住僧全有法印四十世住僧麗府護國院開祖、に命して、府城看經所に安す、今の本尊ハ其代に賜ふと云、

262 聖榮自記云、忠久様ヨリ以來之事聞傳ル所、上代ハ系圖ニ有、承久年中ニ天下京都関東兵乱之時、忠久関東方ニテ宇治川先陳ヲ給、合戰之時、一腹之舎弟忠季、同関東方ニテ打死ス、忠經京方ニテ打死有、其時之御旗・小十文字ノ御劔・同御鐙・綱切之打刀、御鞍は今有、

「有、承久三年六月十四日道佛公宇治川御出陣ノ參照ニ供ス」

263 「忠久公御譜中」

承久三年辛巳六月、忠久改惟宗氏爲藤原氏、建久七年己巳記所改氏之故、

264 譜略云、自忠久出生之初、近衞基通公、加恩惠、加之、承久三年六月、以忠久爲契子、故去惟宗而冒藤原姓、用桐牡丹之紋亦據焉、

265 安國寺申狀云、判官渡時、藤原にてハ被渡ましく候、仍宗家之系圖所望候て御渡候けるよし、人々申あハれ候程ニ、不知事ニ而候ほとニ、さてハ藤原もはんくわんハ有ましく候と存候處、師久判官ニ御成候時、藤原師久と宣旨明鏡候を見出し候間、これむねはんくわんにて御渡候ける哉、か様ニ思候に申合候間、行末何とか申なし候すらんと存候、

仝申狀云、初ハ惟宗氏、承久三年改姓有之、藤原と号す云々、

266 譜略云、同年七月、補越前國守護、（此下文今失之、而存陸奥守義時之奉書數通、省繁故不載于茲、）然後忠久以越前讓二男忠綱、（奉仕頼経・頼嗣・宗尊三将軍、子孫相継仕将軍家、事蹟皆見于東鑑、）

267 『頂峯院文書』

薩摩國薩万郡内串木野村領主平忠道謹辞

奉寄冠嶽新別墅靈山寺（『此三字群ナラス』）被曉持當居住之私地壹曲事

但四至如城（ママ）也、

右、尋彼山者、彦山權現御本山、既送七百餘歳之星霜、遠者本朝奇異靈地、近者當國無雙勝地也、抑此嶽爲躰、四明霧晴、生死長夜忽曉、谷靈水清澄、煩悩塵垢早被先、實極樂東門、爲西方便道云々、爰一人聖人隠居既卅年、偏望西方淨刹、而間齢及八旬、建立一宇伽藍、号云靈山寺、安置之弥陀佛像、勤修之毎月十五日一晝夜不断念佛、爰忠道隨喜之哀之、爲末代佛事相續、停止万雑公事地利物、莫大功德何事如之哉、且爲正朝外朝國吏泰平、且爲忠道現當二世悉地成就圓滿、限永代寄進畢、仍於彼聖人趾跡、相継弟子同法者、敢至于子々孫々、不可致其妨之狀如件、

承久貳年庚辰八月　日　　「串木野三郎殿」「忠道」平（花押）

268 『清水臺明寺蔵ノ文書』

智得引渡大覺房壹町（字墓町、相副本券、但壹町貳段ハ臺明寺若宮永寄進之、十前□段別顕陸斗、无尽蔵升定、僧供三）

右、件田者、自源太子之手所傳領也、但讀誦法花□段別十五部并饑法阿弥陀經各二十巻布施所配如件、但雖如此配分、存生之時、移住他國、又違背者、不可□（匂）行、件經周忌之後三年之内、可讀誦之狀如件、

承久三年四月十六日　　智得□

269 「長谷場氏文書」

かとのきやまのそのハ、かわうのをんハうのさうてんふたいのしりやうにて候、しかるニくさか（日下部）へのをゝいこゐるところ候はぬニよて、しハらくかりうけまいらせてゐ候なり、のちのさまたけ候へからす、あなかしく〳〵、

「門貫山」

せうきうにねん八月十日　　くさかへのおゝいこ在判

270 「忠久公御譜中」

可令早左衛門尉惟宗忠久、爲信濃國太田庄（水内郡）地頭職事、右人、可爲彼職之狀、依仰下知如件、

承久三年五月八日

271 北條介時兼男、建久四年二月廿五日、於京都卒、其文中ニ文治五年四月十日、任左衛門尉、賀茂臨時祭并御祈ノ功、

陸奥守平朝臣（義時也）御判

272 聖榮自記云、信濃ニ者、忠義三男大炊介高久住國として、中沼殿是也、

273 「旧御番所御文書二番箱中」
「御宝鑑三巻中」
（本文書ハ二七〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

274 可令早左衛門尉惟宗忠久、爲越前國東郷（足羽郡）庄地頭職事、
右人、爲勲功之賞、補任彼職之狀、依仰下知如件、
承久三年五月十三日
陸奥守平朝臣（義時）在判

275 「若狭島津氏忠季（忠久公弟）譜中」
「在東鑑廿五巻」
承久三年辛巳兵乱之時、六月十四日丁卯、忠季入道属關東方、於宇治川（承久記曰、若狭兵部入道（誤欽）同欲渡大川、于時関与左馬者溺水畢、致合戰、手自討敵三人、于時若狭兵衛入道云云、○此時遂戰死之旨記于当家系図、雖然東鑑戰亡記内無之、不審可有詳考、）中務丞・左馬四郎共四騎、関左衛門尉・小野寺

276 「若狭島津氏譜中」
忠季
二代 忠經
兵衛次郎
承久記ニ有之、
八十二代主上後鳥羽院、禪位於第一子、而後専好武藝、求勇敢之有聲譽者於四方、故多集於諸州、往昔後白川院御宇、始使武士以號北面、今又稱西面、以使之、其比勅于狭東曰、勇敢者撰十人可進献、越乎、津田筑後六郎・賤間若狭兵衛次郎・原彌五郎・突井兵衛太郎・高井兵衛太郎・萩野三郎共進六人矣、故忠經在京師、以承久三年辛巳六月十四日属官軍、於宇治川遂戰死畢、

277 承久三年辛巳
六月十四日、市來左衛門尉忠康（北條泰時に属して官軍と宇治川に戰ひ死之、惟宗廣言の子）

278

「忠時公御譜中ニ在リ」

『写在官庫』

なり、若狭兵衛尉忠季（同しき戦に死す、亦廣言の子にて、母は丹後局といへり、）佐多太郎久秀（亦同しく戦て死之、公高城六郎重貞亦同しく戦死す、族の佐多にあらず、）

279

「忠時公御譜中」

『東鑑巻廿五』

承久三年辛巳、兵乱之時属關東方、五月廿二日乙巳、従於北條武藏守泰時進發於鎌倉、六月十四日丁卯、渡宇治川、共九十六騎之中也、承久記曰、討敵七人、内僧一人・生虜二人云云、泰時歎美忠義之軍功已下、而有所擧關東之書、其案文記左方也、

280

「仝」

『写在官庫』

こんの三郎兵衛殿（忠時）、むさしのかみ（泰時）と京上事、承了、神妙候、恐〻、

『承久三』五月十九日　（錦時）在御判

『統目裏判』（花押）

281

「仝上」

『写在官庫』

追申、

わかさ（若狭）の國中もんくわむ（没官）領の候をハ、三郎兵衛尉に関東御せいはいのほとハと申て、申付候了、しるしふミをあいくして令進候、わかさの兵衛（忠季）入道かあとをハ、こけ、あんとの御下文を給て候へハ、そのほかのもんくわんの兩候を、申付て候也、すこなんとも（守護）、たうしハ申付候了、

『統目裏判』（花押）

（本文書ハ二八〇号文書ノ後ニ接続スベシ）（本頁ノ統目裏判ハ同一花押ナリ）

しまつの三郎兵衛尉（忠時）、とゝのいくさてんのきや（御）仕て候上に、人〳〵いつもへしたいを申候ところに、いつもへもまかり下候也、ありかたくきう〳〵しくみへ候しにて候也、便宜の時は、可令入見参給候、しさいはをりかみに見えて候也、恐〻謹言、

承久三年七月十二日　武藏守（泰時）在判

藤内左衛門尉殿

『統目裏判』（花押）

282

『写在官庫』

三郎兵衛尉殿とゝのたゝかいせられて候上に、いつもに【出繁】ミな人〻【辞退】したいを申候ところに、したいも申され候はす、さうなく下られ候ひぬ、まことにほうこうさうなき人にて候也、且ハこのよしを、上へも申あけ候、謹言、

「承久三」七月十二日　　武蔵守(泰時)(花押)

嶋津左衛門尉(忠久)殿

283

「在別写本載置也」(前号文書ト同文書ナラン)

三郎兵衛尉殿とゝのたゝかいせられて候上に、いつもにミな人〻したいを申候ところに、したいも申され候はす、さうなく下られ候ひぬ、まことにほうこうさうなき人にて候也、且ハそのよしを、上へも申あけ候にて候也、

「カキ入レ」「承久三」七月十二日　　武蔵守泰時在判

嶋津左衛門尉殿

「右ノ正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ」

284

「正文有之　忠久公御譜中ニアリ」

可令早左衛門尉藤原忠久、爲越前國守護人事、右人、任先例、可致沙汰之狀、依仰下知如件、

承久三年七月十二日　　陸奥守平(義時)(花押)

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ」

285

「越前島津氏忠綱譜中」

承久三年辛巳七月十二日、嚴親忠久公補越前國守護職、忠綱爲守護代往彼國、故稱越前島津矣、昵近鎌　將軍賴經卿　賴嗣卿　宗尊親王、佳名顯然於東鑑、事詳于左、嘉禎四年云〻、寶治二年云〻、建長二年三年、其他各年月ニ記シ置也、此ニ略ス、

286

聖榮自記云、越前ニ者、忠久之御子二男忠綱被差置、至于今越前号嶋津早云〻、伊地知・福崎方・仲万方も越前之事由承候云〻、

又一本云、一追而越前嶋津一族名字越前國者、忠久奥攻之御大將御向之時、賴朝ヨリ始御給候、其外之國〻、取分三ヶ國之自力ヲ以、御隨有ニ依テ御讓ト被申候、國役者當御代及モナシ、忠久之次男忠綱者、越前ニテ繁昌候、其末ニ水津殿　早郎殿　栗屋殿　細江殿　細路木殿　大野殿　河北殿　見方殿、此中之旗頭ヲ不知、依テ承出シ

候テ可示、先是ヲ記置所也、

287

「写有之」

御ふみくはしくうけ給候ぬ、こ□(んと)三郎兵衛尉殿、事にちうをつくし□(て御たと)かひの候事ハ、くわんとうにも令申候也、そのうゑに、いつもへも人〳〵し□(田畠)□のきもなく御くたり候事も□(きう〳〵しく)□おほえ候へハ、其由令申候了、かならすい□(く)さのきや奉公にてあるへき事にても候はす、方〻今度奉公、無左右事にて候也、恐〻謹言、

「カキ入」承久三七月十五日　　「泰時」武蔵守在判

嶋津左衛門尉(忠久)殿

「此文書、御譜中ニアリ」

288

「写有之」

「在御譜中」

可令早領知左衛門尉藤原忠久、信濃國太田庄(水内郡)地頭職事、

右人、任先例、可致沙汰之状、依仰下知如件、

承久三年七月十八日　　陸奥守平(義時)在御判

289

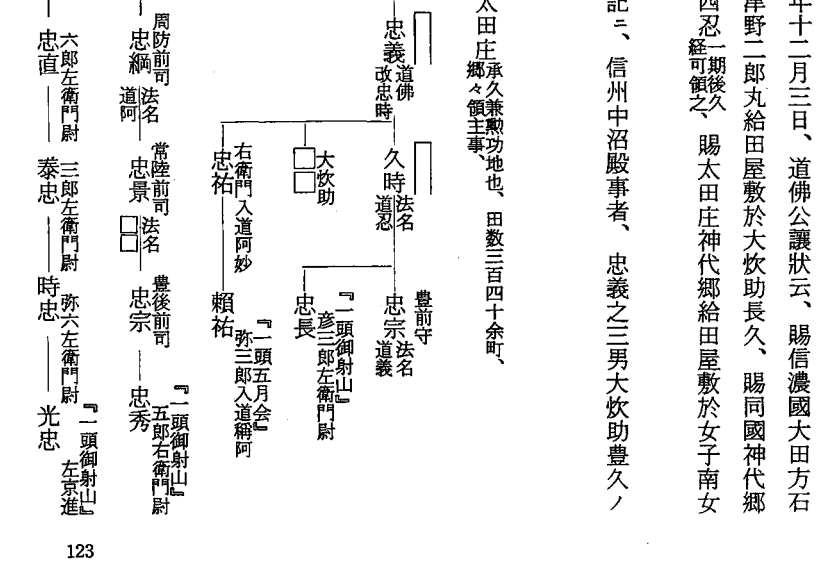
「右書続目裏判」(花押)

文永四年十二月三日、道佛公譲状云、賜信濃國大田方石村南郷津野二郎丸給田屋敷於大炊助長久、賜同國神代郷於夫人西忍一期後久経可領之、賜太田庄神代郷給田屋敷於女子南女房云〻、

聖榮自記ニ、信州中沼殿事者、忠義之三男大炊助豊久ノ子孫也、

290

信濃國太田庄承久兼勲功地也、郷々領主事、田数三百四十余町、



九郎藏人
忠光
十郎左衛門尉
景村
三浦又太郎式部妻
女子

『一頭御射山』
大隅前司忠時　知行分
『一頭御射山』
豊後前司忠久　跡知行分
人々

291 東鑑云、延應元年十一月一日寅刻云々、近日信濃國司初任検註事有其沙汰、而諏訪五月會并御射山頭人等企訴訟、相當神事頭番之輩、有預免許之先例、但被優神事、雖被免其年、以後年於被遂行其節者、不可有免除之由云々、仍今日有評定、被尋問先例於當社大祝信濃權守信重云々、九日甲戌、信濃國司初任検註事、諏方大祝信重捧請文、當社五月會御射山以下頭役人等申國検事、依相當頭番、不限其年、被免一任間事、爲先例之由載之、仍重御沙汰之趣、不及異儀云々、

292 聖榮自記云、貞久在國ノ時者、信濃國ニ御下、本社懐御申、山門ニ崇祝御申、神馬鷹御すへ御下向有、左ニ依て、諏訪を道鑑ゟ以來御崇仰、鷹之事も御奔走有、次ニ御鷹を仕ル、鳥を取る度ことに、風切の羽ニて諏訪ニ手向申事、鷹師へ可被教也云々、

293 上諏方神社　下諏方ヨリ三里、延喜式名神大月次ニ座、

あらたまる須波の祭のみかり人しるも有けり神のちか
ひハ　　奈良親王（宗カ）

祭神健御名方命　見続日本紀・文徳實録等、略之、

下諏方同神、舊事記天孫降臨時、大己貴神弟二子健御名命欲拒天孫、於是經津主神遣岐神逐之、健御名刀命逃到信濃國諏方郡迫甚、而請曰、願得此郡以爲父母讓不爲天神之怨、而作吾居則吾豈奉背天孫哉、因茲經津主神以諏方一郡附于健御名刀命、是卽諏方明神也、

神皇正統記、神功皇后征三韓時、天照大神託以住吉明神諏方明神令爲輔佐、又云、信濃諏方下野宇都宮專狩獵、供鳥獸、

御射山、上諏方ノ東ノ山ヲ云、

金刺盛久

尾はなふく穂やのめくりの一むらにしハし里ある秋のみさ山

「外ニ」「鹿児嶋諏方御佐山之御登之次第、寛正六年ヨリ年々作法、本田治部少輔宗親ノ文書アリ」

294 『伊予攻』いよせめのいくさにまいらせ給候へきよしの事、さゝけ給候ぬ、たゝしかわのゝ(河野入道)(隆)にうたうかう人にてまいり候あひた、そのいくさハ候ましきに候、いまハいそき御京上候て、むさし(泰時)との・さかみ(時房)殿のけさんにいらせ給へく候か、又さやうにのほらせ給候をりふし、いくさ候へしときかせ給候て、まいらせ給へきよし候こそ、しんへうに候へ、このよしはさこのせうまいり候へハ、けさんにいれまいらすへきよし申へく候、恐々、

『承久三年辛巳』七月廿日　『進士判官代隆邦カ』藤原在判

かこしまの藤内馬殿　御返事

295 東鑑承久三年六月廿八日辛巳、伊豫國住人河野入道相從當國勇士合戰之間、爲一方張本、仍可討罰之由、武州下知、國中不與河野之輩等云々、

296 上世略 康友 ― 藤内　内舎人　右馬允　大夫判官

鹿兒島郡司并弁濟使職、○文治年間之頃、於　禁裏薩摩國新田宮執印職并五大院々主職被補、康友子孫代々二男友久江、同國高城郡國分寺留守・同所天滿宮被補別當職云々、而康友・友久相共傳是子孫、右寺社領之爲領主、而自鎌倉將軍家至室町將軍、世々爲御家人、

薩摩國一宮新田宮執印職之事、上世　禁裏御政務之砌祭禮之時、堂上方爲勅使、年々御下向爲有之由、然處、遠境御難儀ニ被思候上、康友江子孫代々被補之、今祭禮旁ニ付相勤來候、

― 康村
　又康兼　鹿兒島太郎　中務允
　鹿兒島郡司并弁濟使職　新田宮執印職　迎阿後夫
― 友久
　國分寺留守　左衞門尉　右近將監　迎河先夫
　川内國分城主　天滿宮別當職

297 『國分寺文書』左辨官下　大宰府

應令管内諸國司、且停止武士狼籍、且言上子細、筑前國安樂寺領等之事、

薩摩國

山門庄　國分寺

自余國〻庄〻略之、

右、近日都鄙罷騷擾、丁壯苦軍旅、俗之凋弊、職而斯由、就中五畿七道諸國神社佛寺以下庄領、或武士寄事左右、煩費州懸(マヽ)、或民庶不營租税、亡命山澤、權大納言源朝臣通具宣、奉勅、宜令下知彼宰吏等、停止狼籍、但若有子細者、言上聽裁者、同下知諸國既畢、府宜承知、依宣行之、緯在機急、暫莫延怠、

承久三年七月廿七日　　大史小槻宿祢在判

中辨藤原朝臣在判

298

「權執印文書」

廳下　諸郡郷院

可早任先例、令勤仕八幡新田宮御放生雜事(事脱カ)、

高城郡

寶樹二本・騎兵一人　出馬一疋　競馬一疋　松百把

相撲二人　菩薩粁一人　濱梯除(歸カ)廳屋七間　東郷三間

時吉一　吉枝延武一　若吉一　二立一前　次三十前

薩摩郡

寶樹二本　騎兵一人　出馬一疋　競馬一疋　松百把

相撲二人　菩薩粁一人　持夫一人　埒七丈　濱梯除僧

坊一宇五間　二立一前　次三十前　流鏑馬二番郡司一番荒河一番

入來院

道造自御館御門至于原中　出馬一疋　競馬一疋　五十把(松脱カ)　相撲

二人　持夫一人　樂所屋一宇三間　二立一前　次十二

前　騎兵一人

祁答院

道造自御館御門至于原中　騎兵一人　競馬一疋　出馬一疋　相

撲二人　國掌屋三　二立一　次三十

牛屎院

道六段卅　騎兵一人　出馬一疋　競馬一疋　松百把

相撲一人　菩薩粁一人　持夫一人　浮(埒カ)六丈　家子屋三

立一(二脱カ)　次三十

山門院

道自橋本至于宮原中　騎兵一人　出馬一疋　松百把　相撲二人

菩薩粁一人　持夫一人　御庁三間シレス　屋形埒四丈

二立一前　次三十前

莫祢院

道自橋本至于鳥居　騎兵一人　出馬一疋　松四十把　相撲二人

菩薩析一人　埒三丈　相撲屋二間　二立一前　次十五

前　不由百把　鐵二廷　御樂修理　流鏑一番（鳥説）

伊集院

道六段　騎兵一人　出馬一疋　相撲二人　松百把　埒

三丈　持夫一人

指宿院

道二段　騎兵一人　出馬一疋　松五把　相撲一人　埒

三丈　持夫一人

穎娃院

道二段　騎兵一人　松五十把　出馬一疋　埒三丈　相

撲二人

智覧院

道一段卅　騎兵一人　松五十把　出馬一疋　埒三丈

相撲二人　蘗一連　御簀二間（広四尺　長八尺）

河邊郡

道五段　騎兵一人　出馬一疋　松五十把　相撲二人

持夫一人　蘗一連　御簀三間（広六尺　長八尺）

阿多郡

道八段　騎兵一人　出馬一疋　松百把　相撲二人　埒

六丈　持夫一人　龍頭船一艘　安幕一間　持夫一人

菩薩析一人　埒七丈　御目代屋三間　二立一前　次二

十前　流鏑二番（郡司一番　余名一番）

市來院

道五段卅　騎兵一人　出馬一疋　松五十把　相撲二人

菩薩析一人　持夫一人　小舎所屋三　埒四丈　二立一

前　流鏑一番

滿家院

道三段　騎兵一人　出馬一疋　松五十把　相撲二人

埒三丈　持夫一人　小舎所三間　二立一前　次十五前

鹿兒島郡

道六段卅　騎兵一人　出馬一疋　松百把　相撲二人

持夫一人　埒七丈　持屋三間（家子方）　鼓打一人　笛吹一

人　拍子打一人　殖女一人　苗引一人　二立一前　次

三十前

谷山郡

道六段廿　出馬一人　松百把　相撲一人　持夫一人

埒五丈　鼓打一人　笛吹一人　拍子打一人　殖女一人

高足一人　安幕二間　騎兵一人　二立一前　次二十前

給黎院

道二段　騎兵一人　出馬一疋　松五十把　相撲二人

二立一前　次三十前

日置南郷

道三段廿　騎兵一人　出馬一疋　松五十把　相撲二人

持夫一人　埒三人(丈カ)　鶏首船一艘　家子屋三間

同北郷

道三段廿　騎兵一人　出馬一疋　相撲二(人脱カ)　持夫一人

松五十把　埒三丈　御厩副屋三間　二立一前　次十五

前　流鏑一番

右、色々雑事等、任先例、守式目、可令勤仕之狀如件、

承久三年八月廿一日

――――在判

――――在判

大目――判

掾大前在判

299

『忠時公御譜中』

可令早嶋津三郎兵衛尉忠義(忠時)爲越前國生部庄(足羽郡)并久安保重

富地頭職事

右人、補任彼職之狀、依仰下知如件、

承久三年八月廿五日

陸奥守平(義時)(花押)

「右ノ正文、旧御番所文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ」

300

『國分寺文書』

安樂寺領天滿宮薩摩國分寺并寺領等事

右、件天滿宮并寺領等、不可有武士狼藉、又遼遠之境、

如此之時、寄事於左右、結構新儀濫妨、對捍有限之所當、

好濫行非法者、自出來欤、若然者、可注進交名、可處罪

科也、沙汰人右近將監友久以下、一ノ神人等、更不可有

事煩之狀如件、以下、

承久三年八月廿八日　武藏守(泰時)在御判

相模守(時房)在御判

301

『水引執印文書』

(端裏書)「□允康友朝臣申被停止守護所(使脱カ)御教書案」

(外題)「八幡新田宮執印神主職事、且任前々例、且止狼藉、

可令知行社務之狀如件、　在御判」

薩摩國八幡新田宮執印左馬允惟宗康友解　申進申文事

請被殊任代〻將軍家御免許旨、重賜御判、弥致丁寧御祈禱子細之狀、

右、謹檢案内、件八幡新田者(宮脱カ)、大菩薩宗廟之靈社、殊勝擁衞之砌也、因之、自故　大將殿御時、至于代〻將軍家之御代、於彼社領者、被止地頭守護所(使脱カ)、于今無相違、然而如此御代〻〻刻、令止旁〻狼藉、任先例、不可有相違之由賜御判、弥神官所司等、爲致丁寧之御祈禱、粗勒子細、言上如件、以解、

承久三年十月三日　　左馬允惟宗康友上

302　『國分寺文書』

安樂寺領薩摩山門庄并國分寺領事、早任宣旨狀、停止武士狼籍、庄務之間、不可有違乱之狀、下知如件、

承久三年十月八日

『北条泰時』武藏守判
『北条義時』『時房欠』相模守判

303　『忠時公御譜中』

可令早左兵衞尉惟宗忠義(忠時)爲伊賀國長田郷地頭職事

右人、依勲功賞、可爲彼職之狀、依仰下知如件、

承久三年閏十月十五日

陸奥守平(花押)『義時』

「右ノ正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之中ニアリ」

304　『國分寺文書』

『頼朝公』御袖判

(本文書ハ一四七号文書ト同文ニツキ省略ス)

305　『國分寺文書』

「修理亮殿御書」

薩摩國御家人鹿兒嶋馬丞令在京候、爲申上在京子細候、子息四郎康忠令參上候、罷入見參候なハ、給暇可令在京之由、令申候、以此旨、可令申入給候、時氏恐惶謹言、

『年紀不詳』九月廿三日　　時氏在裏御判

進上　平兵衞尉殿

306　『仝』

「武藏守殿御書」

薩摩國御家人賀兒嶋馬丞之子息右近將監友尚・四郎康忠令參上候、馬丞者阿一字シレス召人西面衆預候而、下遣薩摩國

候也、入洛之後、件輩最前罷上候、以此旨、入見参候ハ、急々申暇、可令歸國給候、恐々謹言、

『年記不詳』九月廿九日　　武藏守(泰時)御判

壹岐前司殿

「多祢嶋」

御家人見和平次有光入見参、被下向也、可令安堵之狀如件、

承久三年十二月　日

守護所(花押)

307

『臺明寺藏文書』

(端裏書)「すかう田のせうもん」

宣枝謹言

うりわたす曽野郡宣枝内

すかうの南六反事

右、件水田ハ、篤吉せんそさうてんのせうりやう也、しかりといへとも、えう〳〵あるニよて、ちやうりはうニ、永年をかきて、うりわたしまうす所しちなり、但、本やくゝしみやくに(ママ)の所當りんしかやくにおいてハ、本名ニととめをわん、五日(ママ)のためニせうもん如件、

承久三年十二月　日

藤原(花押)

308

『正文在小根占池端氏』

(端裏書)「あんとの御下文」